
インフィニットストラトス 改変物語

ケン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニティストラトス 改変物語

【Nコード】

N3426W

【作者名】

ケン

【あらすじ】

これは、少年、織斑一夏が、幸せをつかみ、守るべき者のために戦う物語。

プロローグ

これは、ある少年の日常生活の一部始終。

「なあ、見ろよ。またあいつやってるぜ」

「うわ、本当だ。」

「あいつ、勉強ができるからって授業は全部寝るし、マンガは読むわ、ゲームはするわ。」

「ほんとだよな」

ある教室で一人の少年が誰とも話さず一人さみしく問題を解いていた。

その問題をよく見ると小学生では到底できないような問題であった。しかし、少年はスラスラと解いていた。

休憩中であるにもかかわらずその少年の所に誰も行こうとしなかった。

これが少年、織斑一夏の日常。

プロローグ（後書き）

はじめまして、作者のケンです。始まりました。改変物語。作者も最初は読み、専門でしたが、書きたいなあと思って、構想を考えまくりました。

初心者なので改行などおかしくなりますが、できるだけなくしていきますので暖かい目をお願いします。更新はできれば毎日と考えていますが、出来ない日もあるので、その時は次にまわしたいとおもいますのでお願いします。
では、お楽しみ下さい！

第1話 動き出す運命

「ここはどこだ？」

そこは、子供たちの楽しそうな声が
まったく聞こえないなんと寂しい公園だった。

「うーん、ここ懐かしいっていう感情は
あるんだけど、きたことあったっけ？」

ひとまず一夏は、その場にいるのも何なので
その公園を散策してみることにした。
すると一人の女の子がしゃがんでいるのが見えた。

「どうしたの？」

一切こちらには、反応しなかった。
不審に思い、肩にふれると、

「あれ、手がすり抜けた？」

なんと、すり抜けてしまった。驚いて何回もふれようとするが
結果は同じだった。
すると・・・

「どうしたの？　なんで泣いてるの？」

「あなたには、関係ないでしょ！　ほっといてよ！」

「関係なくないよ、泣いている女の子をほっとける程、
ばかじゃないよ。ねえ、遊ぼうよ！」

半ば無理やり手をつないで遊具のほうへいつてしまった。
それからというもの、女の子は最初のほうこそ嫌な顔をしていたが、
次第に笑顔に変わっていった。

「ハハッ、楽しいね！」

「うん！」

「ねえ、君の名前なんて言うの？」と少年が聞くと、

「私の名前はねえ、××××って言うの」

ピピピピピピピピピピ~~~~~~~~

「ん？ 夢か」

一夏は枕もとにあつた目覚ましを止めると、時間を確認した。

「んんー、朝の5時か、そろそろ起きていつものやるか」

学生がおきるのには、早いと言える時間に起きると

服を着替えて、筋トレを始めた。

30分後~~~

「ふう、終わった。さて、朝ごはん作るかな。」

「では、次のニュースです。先週男で初めてISを動かした織斑一夏君のことで・・・」

「は、何で俺がIS何かを動かすかね」

それは、まだ寒い日が続く日だった。

「あゝ何で一番近い高校を選んだのに何で電車で4駅も乗らなきゃ何ねーんだよ」

一夏は今、自身が受けようとしている藍越学園へと向かっていた。「つつても、ここさえ卒業すれば就職率は高いし、それに学費も安いし。」

まあ、特待生ではいればどこも一緒か」

実はこの少年頭脳がある人物と同等かそれ以上と騒がれている所望、天才と言われる部類だった。

「お！着いた、着いた」

受験票を持ち会場へと入っていった。

「迷ってしまった」

まさかの十五歳で迷子になってしまった。

「たつくく広いんだよ。たかが入試試験だろ？」

別にこんな広い所でなくても」

会場が多目的ホールだった為、広い構造となっていたのだった

「お！あの人に聞か。あゝすみませーん」

「ん？受験生？向こうの部屋で着替えてね。もう時間がないから」

「は？」

カンニング対策か？と思い何も言わずに部屋に入るとそこにはあるものが置かれていた。

「ISじゃん」

そこには膝を折り曲げて置かれているISだった。

「天才とか言われてるけど俺もISは知らねえしな」

目の前のISを全て知っている訳ではないようだ。

「これは確か打鉄だっけ？。はゝいいなゝ俺も女に生まれたかった。俺も触ったら動かせるのか？」

そう思いISに触れた瞬間・・・

「！？」

頭の中に膨大な数の情報が流れ込んできた。

「まさか！動くのか？」

「貴方は誰？」

「俺は一夏だ」

「そう。さあ、乗って」

言われるがままにISを装着すると先ほどよりも多い情報が流れ込んできた。

「ちよつと！誰よ！ここは立ち入り禁止・・・うそ！男がISを起動している！」

この瞬間、少年の運命が動き出した

第1話 動き出す運命（後書き）

ふう、肩が痛いケンです。皆さんいかがでしたでしょうか。
まだまだ、ですが、頑張っていけますのでお願いします。

第2話 IS学園

IS学園 一年一組教室内

「はい、皆さん揃ってますね、じゃあHRをはじめます。私は副担任の山田麻耶です。」

皆さん一年間よろしくおねがいしますね」

「……………」

「じゃ、じゃあ自己紹介からいきましょうか」

「はあ、何でISを動かせたのかね」

しかもよりによってあいつのいる場所とは。

本当に俺はあの人から離れられねえのかよ」

「……………君、織斑君」

「は？」

「あ、あの怒ってるかな？怒ってるよね？ごめんね、ごめんね。自己紹介今、「あ」から始まって

「お」の織斑くんなんだ。だから自己紹介してくれるかな？」

「わかりました。俺の名前は織斑一夏。知ってるだろ？」

後はめんどいから自分で調べろ」

バシイイイイン

「痛！何すんだ！」

「貴様は自己紹介すらできんのか？」

「俺の勝手だろうが」

そこには一夏の唯一の肉親、織斑千冬が立っていた。

「年上には敬語を使い」

「てめえに使う気はない」

すると、千冬は申し訳なさそうな顔をして教壇にたった。

「すまない、山田君、クラスのことをまかせてしまって」

「いえいえ、それも私の役目ですから」と言い顔を赤くしてしまった。

「諸君、私が織斑千冬だ。私の仕事は

貴様らを優能なIS操縦者に育てることだ。いいか！

私の言っている事が理解できなくても頭に入れる！いいな！」

まるで、ソニックブームのような叫び声がクラスに響いた。

「キヤーーーーーー」

「本物の千冬様よ！」

「私、昔からファンでした！」

「私は、北九州からきました！」

などなど男の一夏からすればどうでもいいような声があがった。

「はあ、毎年、毎年私のクラスにはばかり集めているのか？」

「キヤー、お姉さまもつと罵って」

「うるさい、黙れ、授業を始めるぞ！」

と言うとまるで何事もなかったかのようにシーーーーーンとなった。

キンコーン、カーンコーン

一時間目終了後……

はあ、一夏は本日何度目かの溜息をした。

「俺は、客寄せパンダか」

そう思わざるを得ないほどの女子生徒が廊下にブラッーーーーと並んでいた。

興味はあるくせに、目が合うとすぐ離す、その繰り返しだ。

ふうざい、うざい、うざい、うざい、

全員俺のことをキチンと俺として見てくれない。ㄚ

恐らく彼女たちは織斑千冬の弟、

もしくは世界初の男性操縦者として見ていないのだ。

へそれに、さつきから俺を敵視する視線もかんじるし、はあ、地獄だよ

キンコーン、カーンコーン、チャイムがなると蜘蛛の子散らすよ

うに消えていった。
再び授業が始まった。

第2話 IS学園（後書き）

どうも、ケンです。この作品は本当に読んでもらっているのか不安です。

読んでくれたら、ぜひ感想を下さい。後の参考にしますので。
次回は設定を出します。では~~~~

第3話 クラス代表

キンコーン・カーンコーン

「あゝ終わった」

授業が終わりリラックスしている一夏に一人の少女が近づいていた。

「ちよつと、よろしくて？」

「よろしく、ありません」

「ちよつと！よろしくて？」

「何だよ？」

鬱陶しく思い後ろ向くと・・・

「まあ！何ですの！その返事は？私に話しかけられたのですから、それ相応の返事があるでしょう？」

その言動は明らかに男と言うものを見下している言動だった。

「悪いがお前みたいな世間知らずは知らないな。だれだ？」

「まあ！私を知らない？この入試首席で唯一試験官を倒した、イギリス代表候補生のセシリア・オルコットを知らない？」

「ああ、知らないな。それに首席で試験官を倒したのがお前だけじゃないぞ？」

「な、何ですつて？私、ただだと聞きましたが？」

「女の中ではじゃないのか？」

「な！あなたねえ！」

キンコーン・カーンコーン

授業の開始を知らせる鐘が鳴った。

「く！後でまた来ますわ！」

「来なくて結構だ」

「では、これより実践で使用する武装について説明する。
あゝその前にクラス代表を決めんとな」

千冬が思い出したかのように言いだした。

「クラス代表とは文字通りクラスの長だ。

再来週から始まる対抗戦に出るだけではなく、

会議などにも出席してもらう。誰かいなか？

自薦他薦なんでもかまわんぞ」

「嫌な予感がする」

その予感ハ的中することになる。

「はい！織斑君を推薦します！」

「私も！」

「やっぱりか」

「他にはいないか？」

「納得いきませんわ！」

「私も納得いかんな！」

二人の生徒が反論しだした。

「クラス代表は最も実力のある者になるもの。こんなド素人に
任せられませんわ！」

「私も同感だな。こいつは昔から出来ない事には一切手を出さない。
出来ないなら努力すれば良いものをこいつは一切しない！」

「あゝめんどくさいことになったかも」

「立候補者は3人だけか？ならば来週に決闘を

行い勝ったものが代表になる。それで構わんな？」

「はい」

「ご自由に」

「ならば決定だ。授業を始める」

放課後

「あゝやつと終わった。」

一夏が教室でリラックスしているとそこに山田先生が来た。

「あ！織斑君、ここにいましたか。」

「どうしましたか？山田先生？」

「実は織斑君の部屋が決まりました！」

「は？俺は1週間は自宅登校と聞きましたか？」

「実は色々あるんですよ。そこら辺は聞いてますか？」
聞かれてはいけないのだろうか？耳元で話し始めた。

「まあ、いいですが。ルームメイトは誰ですか？」

「それは・・・」

「私だ」

後ろから聞きたくもない声が聞こえてきた。

「織斑千冬」

「年上には敬語を使えと言った筈だ」

「俺はお前に敬語は使わない」

「そうか・・・」

千冬は一夏の顔から眼をそむけてしまった。

「えっと、ひとまず良いですね？」

「本来はイヤですが分かりました」

一夏の部屋

「い、一夏」

「気安く呼んでんじゃねえよ」

「す、すまない。元気にしていたか？」

「元気にしていたかだあ？ふざけんじゃねえよ！」

「！！！！！！」

「よく、てめえみたいな奴が教師してられるな。え？織斑千冬！」
「・・・・・・・・」

「忘れたわけじゃねえよな？あの日の事。」
「！！！！」

千冬はその言葉を聞くや否や顔を俯かせた。

「俺はお前を許さねえ。何年経とうが俺はお前を憎み続ける！」
「・・・・・・・・」

夜は静かに更けていった。

??? side

「失礼します」

「どうぞ」

「会長。例の報告書ができました」

その部屋には二人の少女がいた。

「ありがとね。いつも」

「いえ、これが仕事ですので」

「ふふふ、だからよ」

「ですが、本当に彼なんですか？」

「ええ、そうよ。今日、彼のネックレス見たもん。」

「そうですか。良かったですね。」

「うん！ようやく見つけたよ・・・・・・・・一夏」

月明かりに照らされた彼女の笑顔はまるで女神のようだった。

第4話 決闘

「織斑、お前のISは決闘の日に送られてくるそうだ」

「あ？」

「え？一年生のこの時期に専用機？」

「いいな、いいな」私も専用機欲しいな」

「それは良かったですわ。訓練機ではフェアではありませんものね」

「何で専用機何か送ってくんだよ」

「お前のデータが欲しいそうだ」

「つまりはモルモットかね」

世界で唯一の男性操縦者のデータが欲しくない訳が無いのである。

「専用機か」あの、マッドが作ってなきゃいいけどな」

一夏の頭には一人の女性が浮かんでいた。

クラス代表決定戦当日

会場となる第3アリーナは類を見ない程の超満員になった。

「では、まず初めに篠ノ之さんとオルコットさんの試合を行います。

その後にお二人には織斑君と

闘ってもらい、勝った回数が

多い人が代表となります。いいですか？」

「わかりました。」

「わかりましたわ」

「・・・・・・」

「お、織斑君？」

一夏は先生の声を完全に聞き流して、ある一点を見ていた。

「あの、格納庫から何かを感じる、俺を呼ぶ何かが。」

「あ、あの」

「山田君、時間もそう長くは無いんだ。始めよう」

「で、では、これより1年1組の代表決定戦を行います。」

オルコットさんと篠ノ之さんはアリーナの中央に行ってください」

すると、打鉄を纏った箒とブルー・ティアーズを纏ったセシリア出てきた。

「オルコット、よろしく頼むぞ。」

いい試合にしよう」

「セシリアで構いませんわ、箒さん」

「そうか、わかったセシリア」

二人は向き合いながら闘志を燃やしていた。

カウントが開始された。

5、4、3、2、1、 ビー—

闘いの火蓋がきつて落とされた。

??? side

「ついに始まりましたね、お嬢様」

「もう！だからお嬢様はやめてって、言ってるでしょ」

「すみません、つい癖で」

青色の髪の毛をした美女と、黒髪の美女がそこにいた。

二人とも戦いを観戦していた。

「どちらが、勝つと思いますか、会長」

「うーん、経験的に言えば、候補生のセシリアちゃんが

圧倒的に有利だけど、箒ちゃんも才能があるみたいだしねえ」

箒 side

へくっ！ 流石は代表候補生全く入り込む隙がみあたらない、こっちは近距離なのに向こうは遠距離ときたものだ」

決してセシリアのワンサイドゲームと、いうものでもなかった。
箒はセシリアから距離をとって、レーザーをかわし、
かわしきれないものはブレードをうまく使い機動を逸らしていたが、
徐々にエネルギーの方も、
減っていつているのも事実だった。

セシリア side

先程から、攻めてはいますが、決定打をことごとく防がれています
わね。

このままでも、勝つことはできますがあれでおわりしましょう。

「箒さん、これで幕引きとさせていただきますわ」

セシリアはビットを展開すべく一瞬、動きを止めてしまった。
箒はこの一瞬の隙を見逃さなかった。

「今だ！うおおあああああああ！」

まるで、雄たけびのような叫びをあげながら箒は

セシリアとの間合いを0にし2回ブレードをふるった。

たったの二回だったがそれでも

セシリアのエネルギーを半分削った。

「きゃあああああああ」

「はあっ、はあ」

「くっ！や、やりますわね。これで終わらせます」

すると、セシリアの背中からビットが4機射出された。

「こ、これは」

「喰らいなさい！これがブルー・ティアーズの全力ですわ！」

4機のビットから同時にレーザーが放たれ、そして、

ビーーーーー、勝者<セシリア・オルコット>

わああああー

歓声があがった。立ち上がって拍手をする者、感動して涙目になっているものなど凄まじい歓声だった。

「くそ！」

篤は悔しそうに地面を殴った。そこへ、

「篤さん」

「何だ？」

「素晴らしかったですわ！先ほどの試合。わたくしも感服いたしました」

「あ、ああ、しかし負けは負けだ」

「例え、そうだったとしてもわたくしは、たいへん意味があった試合だったと思いますわ」

「そ、そうか。ありがとう。しかし、

流石は代表候補生だな！私とは大違いだ！」

「いえ、いえ、わたくしも、まだまだですわ。先ほどの試合で痛感しました。よろしければ、友達になりませんか？」

「そんなの、当たり前だ！」

「え、えっと、皆さんにお知らせがあります。本来ならば、この後、織斑君との対戦を予定、

していましたが織斑君の都合で棄権することが、決定しました。繰り返します……」

試合が決まる１０分前……

一夏side

俺はいま、目の前の物に目をうばわれていた。

「これが、」

「はい！これが、織斑君の専用機＜白式＞です」

白式の放つオーラ？みたいなものに俺は動けずにした

「これ程まで純白で、何者にも染まらないような白があるのか」

「では、織斑君、別のアリーナで、フォーマットと

フィッティングをして、一次移行を、

済ませてきてください」

「わかりました」

一夏が白式に触れようとした瞬間、

バチ！、バチ、バチチ、バチチチチチ、

とピット全体に電流がはしった。

「きゃあ！」

「くっ！」

二人には電流が走ったようだが一夏には全く流れなかった。

「待つて、まだ私は準備ができていないの、

だから私を動かさないで、お願い！」

頭の中に直接、幼い女の子のような声が聞こえた。

「今のは、一体？」

だが、声が聞こえた以上は無視は出来なかった。

「山田先生、俺は棄権します」

「そ、そうですね。この状態では試合は

無理ですね。わかりました」

会場では何とも言えない空気が流れていた。

「え？棄権何で今さら？」

「もしかして、さっきの試合を見て、二人にびびっちゃったとか！」

「かもね、やっぱり所詮は男だし」

「会長、何かあったのでしょうか？」

「ん、せつかく織斑君の試合を見れると思ったのに、残念」

「おい、おねえちゃん、かいちょ」

明らかにダボダボの服を着ている女の子が
ゆっくりとした動作でこちらにやって来た。

「本音、何かあったの？」

「うん、実はね、おりむーが棄権した理由を教えようと思って」

「あら、本音ちゃん、知ってるの？」

「うーん、さっき偶然先生たちの会話を盗み聞きしちゃって」

「こら！本音いつも言ってるでしょう」

「まあまあ、虚ちゃん、で、その理由ってのは？」

「うーん、とねおりむーの専用機が

なんだかトラブルを起こしたみたい」

「トラブルねえ・・・」

「本来なら、キチンと整備した後だからトラブルなんて起こさないんだけどな」

「虚ちゃん至急、情報を集めて頂戴！」

「わかりました」

「本音ちゃんは織斑君の情報を！」

「りょうかい」

「何もなければいいけど」

その顔は真剣そのものだった。

第5話 差別

??? side

「ふむ、封印が解けたのは良いが、

このままでは私本来の力が出せないな、

かといって人に受け継がせると力は半減してしまう。

これではあの時の二の舞になってしまう。

何かいい方法はないものか？」

黒い発光体のようなものがふわふわと漂っていた。

「ん？そうか！この方法があつたか！

なぜ今までできずになかったのだ。

これを、使えば本来の力が存分に使える。

ふふふふ、待ってる、光よ」

代表決定戦の数時間後~~~~~

今はもう、試合のほとぼりも冷め、生徒たちは夕食をとっていた。

「ねえ！凄かったね！今日の試合！」

「もう、あんたまだ、言ってるの？」

「だって！あんな試合もうないかもしれないんだよ？」

「あのねえ」

すると、そこへ一夏が食堂にやって来た。

「おばちゃん！日替わり定食」

「あいよ！」

「ねえ、見て織斑君だよ」

「千冬様の弟だつて聞いてたけど、所詮は男ね。期待して損しちゃった」

「確かに」

食堂にいる女子生徒達が蔑みはじめた。

「はあ、イライラする。何でもこれも女子共は勘違い野郎が多いんだ」

「あら、これは、これは試合を棄権した方ではありませんか」

「……………」

完全に無視していた。

「聞いてますの！その貴方！」

「いや、全く聞く気もねえよ。勘違い野郎」

「まあ！その様な分際でよくそのような

言葉を吐けますわね。感心しますわ。」

「何に感心するかは知らないがうるさいぞ」

「ふん！まあいいですわ」

それでも、一夏は無視をして、そそくさと出て行ってしまった。

一夏の部屋兼千冬の部屋……………

ガタン！

「くそ！あのクズどもが、俺を下に見やがって、

あいつら何を勘違いしてやがんだ。

あいつらは何も自分自身が強いわけじゃないのに

自分達が最強みたいに振舞いやがって！

あいつらが優秀なわけじゃない、ISが優秀なんだ。

それを勘違いしやがってくそが！」

一夏は部屋にあるものを壊しながら叫んだ。すると、そこに・・・

「どうしたんですか！織斑君、落ち着いて下さい！」

「うるさい！黙ってる！」

山田先生は体を大きくふるわせ始めた。

「はあ、はあ、すみません山田先生怖がらせてしまつて壊した備品はすべて弁償します」

「お、織斑君？大丈夫ですか？

何かあつたなら先生が相談にのりますよ？」

未だに震えている体を、抑えながら言つた。

「いえ、大丈夫です。先生こそ大丈夫ですか？震えてますよ」

「だ、大丈夫です。少し驚いただけですから」

「そうですか、では俺はこれで」

一夏が部屋を出て行こうとすると服の袖を引つ張られた。

「ど、どこに行く気ですか？」

「いえ、別に屋上で寝ようかと思つて、

このままだと先生に迷惑かけますから」

「で、でも・・・」

麻耶は止めようとするが、一夏はそのまま出て行つてしまった。

「織斑君・・・」

部屋にポツンと小さな声が響いた。

第6話 光と闇

織斑一夏の軌跡~~~~

俺は、異常だった。自覚したのは俺が幼稚園の時だ。

俺はほかのみんなが出来ないようなことができていた。

例えば、勉強。この頃には既に高校の勉強すら出来ていたし、趣味も子供らしくなく俺の趣味は勉強だった。

毎日、毎日問題を解いた。古典、数学、物理、化学、世界史、日本史など全ての教科をしていた。

その時は楽しかったんだ。問題を解くことが。

この頃の俺はまだ、気付きもしなかった。

この後の人生が地獄へと変わっていくサインを、俺は見逃していた。

第6アリーナ~~~~

今、俺の目の前には白式がたたずんでいた。
なぜ、ここにいいのかという・・・

「一夏、今から第6アリーナに来て。」

「!」

後ろを振り向くが誰もいなかった。

「あの時の声か、誰だか知らないが、」

「だったら、聞くな。」

「ごめん、ごめん。じゃあ、

まずクイズといこうか？私は誰でしょう？」

「は？」

一夏は止まってしまった。初対面の女の子に、

「誰でしょう？」と聞かれたら誰だって困るだろう。

「誰って、お前と俺は今が初対面だぞ、そんなもんわかるか」

「うつん、私と貴方は一度会ってるよ。」

「姿は違っけどね！」と満面の笑みで言った。

しかし、一夏には心あたりがなかった。

「私の事が分からない人に、使ってもらいたくないなあ」

「使っ？」

「お前まさか、白式か？」

「そう！大当たり~~~~~」

周りからカランカランと聞こえそうな

ハイテンションで、はしゃぎ始めた。

「いやゝたった一つだけのヒントで言い当てるとはさすがは天才！」

「で？言い当てたはいいが、景品でもくれるのか？」

「うつん、景品は、わ・た・し！」

「つまりは、白式か？」

「うつん、じゃあ今から契約しようか？」

「契約ってなんだ？」

「うつんと人間たちというファーストなんか。」

「ああ、そう言う意味ね。分かったじゃあしようか」

「あ！待って。もう一人紹介したい人がいるんだ。」

「ライト！出てきていいよ！」

どこからともなく銀髪の女性が現れた。

「こんにちは、織斑一夏、そして光の最適合者。」

「誰だ？お前は、それに光ってなんだ？」

「はい、今から説明します。」

ライトと呼ばれる女性が指を鳴らすと

風景がガラツと変わってしまった。

「なっ！」

「落ち着いてください。これは幻影ですから」

今から遙か昔、この宇宙では二つの力が争っていた。

光と闇、この二つの力は相反するものでありながらお互いに引き合っていた。

会ったびに争い、また争った。

しかし、そこに人間の登場により、一気に状況が変わった。

光は人間に知恵を与え、平和に暮らすことを説いた。

闇は人間に強さを与え、強いものが弱いものを支配しくらししていくことを説いた。

この結果、争いが起こってしまった。

これにより、光は争いを止める為にあることを行った。

それが、力の継承だった。

これにより、争いは終わり、再び平和が戻ろうとした矢先に最悪の事態が起こった。

闇も人に力を継承し再び世の中は争いが起こった。

これにより、争いが長期化し多くの命が消えていった。

このままでは、人類が絶滅してしまうと考えた光は闇を封印するのと決意した。

そして、無事に封印は成功し光も眠りについた。・・・

「これが、光と闇についてのおおまかな説明です」

「なあ、じゃあ何で、あんたはここにいるんだ？」

さっきの説明だとあんたは今でも、

眠っているんじゃないのか？」

「ええ、本来ならばそうですが、状況は最悪です。

私が施した封印が解けてしまったのです」

「どうして？」

「いまの世の中、人の心の中には闇が溢れています。
恐らくそのせいかと。」

「そうか、で？俺にどうしろと？」

「お願いします！光を受け継ぎ、

闇と闘ってくださいませんか？」

「なぜ？俺なんだ？」

「それは、あなたが光の最適者だからです。」

「どうして、そんな事がわかるんだ？」

「あなたの心には光が満ち溢れているからです」

「俺は光なんか無いぞ？」

「いいえ、貴方は気づいてる筈です。

自分の心の奥深くの物に」

「わかった」

「え？」

「何、そんな驚いた顔してんだ。

俺がやらないとこの世のなかの人たちが、

危ないんだろう？だったら、俺がやってやる！」

「本当ですか！ありがとうございます！」

「一夏、本当にいいの？」

「ああ、それにまだやるべき事が残ってるからな」

「わかった、一夏がそう言うのなら私もいいよ」

「ありがとうございます！では今すぐに」

継承を始めましょう。白式さんもいいですか？」

「うん、ついでだから私との契約も済ませちゃおうっと！

じゃあ、一夏始めるよ？」

「ああ、頼む」

そう言うのと、俺の体の中に何か温かいものが流れ込んできた。

第6アリーナ~~~~

気がつくと俺はアリーナの真ん中に立っていた。

「俺は、戻ってきたのか」

「うん、ごめんね？」

「いや、構わないさ、終わったのか？」

「うん。終わったよ」

すると、突然、

ズドオオオオオオン

アリーナのバリアを突き破り黒い塊が落ちてきた。
その塊は全身装甲をしたISだった。

第7話 初陣

IS学園第6アリーナ……

一夏は黒いISと向き合っていた。

「誰だお前は！何が目的だ！」

「……………」

「一夏！あれって。」

「ああ、おそらく無人機だろう、人の気配が全くしない。しかし、まだ無人機の技術はないはずだが？」

いくらISの登場により科学が進歩したと

いつても人がいなくては動かせない。

しかし、目の前のISには、

独立稼働、遠隔操作のどちらかが使われていた。

すると…………

「うお！危ね、発射するの早すぎるだろ！」

一夏はかろうじてレーザーをかわした。

「大丈夫？一夏！」

「ああ、それよりも一次移行は終わったんだよな！」

「うん！」

「そうか、見せてやろうぜ！俺達の力を！」

「うん！」

黒いISは荷電粒子砲を放ってきた。

「遅えよ！そんなもん当たるか！」

一夏は撃ってくるレーザーをことごとくかわしていた。

「ねえ？一夏」

「何だ？」

「そろそろよくない？」

「ああ、そうだな」

「じゃあ」

「ああ、本気出すかな」と言い一夏は動きを止めた。
そこを見逃す筈もなく相手は容赦なく撃った、そして・・・

ズドオオオオン。全ての攻撃が一夏を襲った。

「こんなものか、初めの方が強そうだったんだがな」
そこには、純白の翼を羽ばたかせている一夏がいた。

「次は、こっちから行くぜ！」

僅か一度の加速だけでゼロ距離まで近づき、無人機を切っていた。

「白式は高機動タイプでは1、2を争う。

お前みたいなのロマに捕まるものか！」

そう言い放つと再び無人機へと近づく。

しかし、無人機も学習したのか

、瞬時加速を使い距離をとった。

だが、目の前に標的はいなかった。

「どこ見てんだ？」

振り返るのが遅かった。

すでに、一夏の目の前にはエネルギーの壁が10枚ほど並んでおり、
半分通過していたところであった。

すかさず、無人機も最大出力で放とうとするが遅かった。

「くらえ！これが俺と白式の力だ！」

一夏が相手を貫いたと同時に爆音が鳴り響いた。

??? side

「あつれ〜?おかしいなあ」

IS学園に向かわせた

奴からの信号が消えちゃった。

倒されちゃったのかな〜?

でも、まだみんな寝静まつてる

時間なんだけどな〜」

そ今の時刻はまだ薄暗い3:30であつた。

本来ならばまだ、おねむの時間だ。

「う〜ん、ま!いつか!別にこれと言って困るようなものは乗せていないし、

あつたとしてもコアぐらいだけども〜んな、おバカさんだしいいや」

喋っている女性の名は篠ノ之束、

自他共に認める大天才であり、ISの生みの親でもあつた。

しかし、いささか性格がひんまがつており、

格好も頭にはウサミミ、服は長いドレスのようなものだった。

「うん、まあ試作機にしては上出来だったかな?very good!

でも試作機とはいえ、ちよつと倒されるのが早かったかな?

誰に倒されたのかな?なかなかの強さだね。」

束が珍しく興味をもった。

「でも、凄いいよね!だってこの子を倒すのにかかった時間が、

50秒だなんてね。」

一夏side

戦いが終わった後、アリーナの片づけを済まし一夏は整備室を貸し切っていた。

「白式の設定を変えとかないな。燃費が悪くて仕方がない」

一夏は空中投影型のモニターをいくつも展開しながら教本を片手に膨大な量の情報を眼で追っていた。

突然、白式が輝き始めた。

「くっ！眩しい」

輝きがおさまり目を開けるとそこには……

「ん？ようやく、出れたー」

「お、お前白式か？何でここに？」

「さあ、私もよくわかんない。気がついたら外にでてた」

「お前は俺の精神世界にいるんじゃないのか？」

「だから？わかんないの！」

そこで一夏はふと気がついた。

「まさか、ライトもいるんじゃないやあねえよね？」

そう、もう一人の住人の姿が見えなかった。

「はい、何でしょうか？」

「「！！！！！！」」

「い、いたんだ」

「ふん！どうせ私は光なのに影がうすいですよーだ」

「わ、悪かった。ライト。そのだな……」

初めてだったからわからなかったんだよ！」

「う、うん、きっとそうだよ！」

しかし、ライトは・・・

「白式さんのことはすぐに、気づいたくせに？」

「・・・・・・・・」

妙な空気が漂っていた。

「そ、それでどうかな？私の調子は？」

「あ、ああ。燃費は無駄をなくして大幅に上げておいた」

「そっか、良かった」

白式は嬉しそうに顔を緩めた。

「お前はいじられてるのに何で嬉しいんだ？」

「だって、私が調整されて強くなると一夏も

扱いやすくなるでしょ？

そして、もっと私達は近づける」

「そう言う意味ね」

――――

あるところに、二人の天才がいました。

片方は、世界から認められこの世界に変革をもたらし、行方不明中の変人。篠ノ之束。

もう片方は、心を閉ざし自分を隠し続ける織斑一夏。

この二人はどのように世界に絡み合い、どのような結果が待っているのかは、

誰にもわかることはない。例え、神というものが存在しようとも。

第8話 変化

織斑一夏の軌跡その？

一夏には友達という存在はいなかった。

自分に近寄ってくる人物全てを敵視していた。

学校でも日常でもそれは、変わらなかった。

しかし、唯一敵視しなかった人物がいた。

公園であつた女の子の女の子だけは敵視しなかった。

一夏はこの人物に会いたかつた。例え何年かかろうとも・

しかし、一夏は気づかなかつた。その人物はすぐ近くにいることを

・

IS学園総合受付所~~~~~

「では、これで入学手続きはおしまいです。

ようこそ、IS学園へ。鳳鈴音さん。」

そこには、制服を改造して両肩を半分ぐらいまで出し、髪をツインテールにした少女がいた。

「あの〱織斑一夏って何組何ですか？」

「ん？ああ、噂のあの子？確か1組だったはずだけど、それがどうかした？」

「ん、まあちよつと。」

「でも、あれはないわよね」

「あれって？」

「ああ、そつえば知らなかつたわね。

実はね鳳さんがくる少し前に1組の代表を決める試合があっただけだね、それに織斑くんも、エントリーしてたんだけど、ビビッて逃げちゃったらしいわよ。所詮は男だった訳ね。」

「また、あいつ勘違いされたんだ。」

「なんか言った？」

「あ、いえ別に。ありがとうございます」

「がんばってね」

「さ〜て。今度はあいつになにしようかな？」
イタズラを考えるような子供のように笑っていた。

鈴が来る2日前〜

「では、1組の代表はオルコットさんに決定しました！」
パチ、パチ、パチ、パチ、

「みなさん、よろしくお願いしますわ。」

「セシリアが代表なら文句ないよ！」

「がんばってね〜」

様々な声が飛び交うなか、そこへ・・・

「遅れてすみません。山田先生。寝坊しました。」

一夏が入ってくると、さっきまでの騒がしさが嘘のように静かになった。

「あ、あの〜織斑君？その髪の毛どうしたんですか？」

一夏の髪の毛が真っ白になっていたのだ。

「ああ、これは染まりました。」

「織斑、染めたのか」

「あんたには関係ねえだろうが。いつもみたいにほっとけよ」

「織斑、年上には敬語を使え。」

「あんたみたいなのに敬語なんか使つか。」

「まあいい。今日から、ISの実習が始まる！各人ISスーツに更衣したうえ、

第3アリーナに、集合！遅れるなよ！」

「……はい！」「……」

第3アリーナ……

「では、これよりISの基本飛行を実践してもらう、
オルコット、織斑！前にこい！」

「はい」

へめんど

「では、まずISを展開しろ」

すると、あっという間にセシリアの体をブルーティアーズが包んだ。

「次！織斑、展開しろ！」

「ねえ、織斑君て本当にIS使えるのかな？」

「さあ？使えなかったりして！」

クスクス、クスクス

へあんの小娘ども……

へ落ち着け、白式相手にするな

「どうした、織斑さつさと展開しろ」

「はいはい」

そう言うと、一夏は白式の待機形態をとりだした。

「なんだ、それは。」

「見てわかれよ。ISに決まってるだろ」

その待機形態は明らかに他のものとは違い、鞘のついた物だった。

「行こうか、白式」

「うん！」

「よし！飛べ！」

二人は同時に飛んだ。しかし、圧倒的に一夏の方が速かった。

「まあ、出来たんですの？貴方にしてはすごいものですわ」

「・・・・・・」

「！！また、無視ですよ！あなたねえ、なめて」

「おい、いつまでそこにいるつもりだ。次は急停止しろ。目標は地表20cmだ」

「はい」

するとセシリアはあつという間に降下していった。

「なんだ、代表候補生つっても所詮あんなものか」

一夏も降下していった。しかし、

「織斑、誰が地表1cmのところまで止まれと言った」

「さあ？」

「まあいい、では次にいく」

昼休みの屋上――

「ふああ〜眠い」

一夏は屋上で横になっていた。すると

「ねえ、一夏」

「ああ、分かっている」

「なあ、ストーカーはあまり良い趣味とは言えないぞ、出て来いよ」
物陰から一人の少女が現れた。

「あら、まさか、ばれているとは思わなかったはね。一夏くん」

「ほとんど気配を消せていると言うことは、家は暗部？」

「な！なんでわかったの？」

「あんたの名前だよ、更識楯無17代目当主様」

「！！！！」

そう聞くと更識は戦闘態勢に入った。

「まあまあ、落ち着こうぜ。ここで戦っても

お互いに利益なんかでねえだろ」

「まあ、それもそうね。隣いいかしら？」

「ええ、どうぞ」

楯無は警戒を解き、一夏の隣に座った。

「ねえ、」

「何だ？」

「どうして、私が更識家の17代目当主だって知ってたの？」

「ああ、そんなことか」

「そんなことって、あなたねえ、

結構軽く言ってるけど

家のセキュリティは、

そこらへんのセキュリティとは

比較できないほど強いんだけど」

「簡単さ、ハッキングしてあんたの家の情報を閲覧しただけ」

「だから」と楯無が反論するが、

「まあ、確かにあんたの家の守りは相当なものだよ。

普通のハッカーじゃあ、

到底無理だ。逆探知されて即通報だ。

でも、それは普通のことだったらの話だ。

もし、篠ノ之束と同格かそれ以上の

天才がしていたらどうする？」

「ああ、そう言えば貴方は天才だったわけ？」

「まあな」

「ねえ、私の昔話聞いてくれる？」

「ああ」

「あれは、私がまだ小学校低学年ぐらいかな・・・」

楯無 side

私はこの家に生まれたときには、既に当主になることが決まっていた。

物心ついたときには、英才教育をされて、

勉強、武術などの当主として必要なことをやっていた。

最初のうちはまだ楽しかった。

当主とはいえ、まだ小学校にすら入学していなかったから。

でも、入学後から一変した。

毎日、毎日トレーニングの繰り返し。ただ、それだけ。

初めは笑顔も多少はあったかもしれない。でもその笑顔も完全に消え失せた。

そして、私は家を飛び出した。

あまりにもきつかったの。

私は近くの公園につくと幸いだれもいなかったので思いっきり泣いた。

今までせき止めていたものが一気に流れだしたの。

「うえ、ぐす、ぐす、何で？何で私ばかりがこんな辛いめに遭わなきゃいけないの？誰とも遊べないし、

家にすら呼べない。もう嫌だよ」

「ねえ、どうして泣いてるの？」

「あなたには、関係ないでしょ！ほつといてよ！」

「関係なくないよ！女の子が泣いているのにほつとけるほどばかじゃないよ。さ！行こう」

少年は楯無のうでを無理やりとって遊具の方へと向かっていった。

「ちょ！ちよつと、待ってよ」

少年は止まらなかった。

最初は嫌な顔をしていた楯無だったが次第に笑顔になっていった。

「ははは！楽しいね！」

「うん！」

「名前なんて言うの？」

「私の名前は更識××って言うの君は？」

「僕はね、××って言うの！」

「よろしくね！××君！」

そう言い暗くなるまで二人は遊んだ。

それからというものの、二人は一緒に遊んでいたが別れの日がやって来た。

「ぐすつ、ごめんね。××君、今日でお別れなんだ。」

「うん、泣かないでよ。きつとまた会えるよ！」

「うん。」

「そうだ！これをあげるよ！」

そう言うで一夏は青いリボンを取り出した。

「これは？」

「じつはね、もらったんだ。」

「いいの？もらったものなのに。」

「うん！」

「ありがとう、じゃあこれ、あげる。」
そう言い、ネックレスを外し一夏に渡した。
「わあ、きれい、ありがとう！」
「これが私たちをつなぐ証だよ！」
「うん！またね！」
「うん、ばいばい！」

「あの子のおかげで今の私がいるの。あの子にもう一度会いたいな」
「会えるさ、きっと」
「そうかもね」
「じゃあ、俺はこの辺で帰らせてもらう」
「うん、じゃあね！一夏君」
「ああ、じゃあな、楯無」
そう言い、二人はわかれた。あの時と同じように。
「もう会えたんだけどね」

第9話 部屋と会長

1組教室~~~~

「セシリア、頑張つてね！フリーパスのためにも！」

「ええ、是非がんばらせていただきますわ！」

実は、もうすぐクラス代表別トーナメントというものが開かれるのだ。

そこで、優勝するとデザートフリーパスが貰えるのだ。

女の子は甘いものが好きな子は結構いるので、みんな必死なのだ。とはいえ、戦うのは代表なのだが……

「でも、知ってる？2組に転校生がきたらしいよ、

それも中国の代表候補生だつて！」

「ん？この時期に転校生か、珍しいな」

「あら？私の存在を危ぶんでのことかしら？」

「でも、きつと大丈夫だよ！専用機持ちはいま、1組と4組だけだからね！」

「・・・その情報古いよ」

「え？」

そこには、ドアに体をあずけ腕を組んでいた鳳鈴音がいた。

「残念だけど、2組の代表は私に変わったから
そう簡単には優勝させないわよ」

「あなたが、2組の代表ですの？わたくしは、」

「あゝいいよ別に、あたし他の国に興味無いし」

「な！あなたねえ」

「ねえ、そんなことより一夏はどこにいるの？」

「一夏つて、誰だっけ？」

「さあ？」

「あゝごめん。織斑はどこにいる？」

すると生徒たちは顔を見合わせ、

「さあ？知らない。興味無いし」

「へゝあいつ、ここでもこんな扱いなんだ」

「ここでもって？」

「ああ、実はね・・・」

すると、後ろから、

「おい、どけ。邪魔だ。通れないだろうが」

一夏の声が聞こえた。

「あ！久しぶりね！元気してた？」

「誰だ、お前？」

「ふゝゝん。相変わらず気に入らない奴の名前を覚ええないのね、いいわ、もう一度言っただけ。私は・・・」

名前をいいかけたところで、

スパアアーン！という音になった。

「いったー、誰よ！」

「さつさと教室にもどれ、バカ者」

「は、はい！」

「お前たちもさつさと席に座れ！」

そう言つと全員が驚く程の速さであつという間に戻ってしまった。

「では、これよりSHRを始める！」

授業が始まった。

放課後ゝゝゝ

「あ！織斑君。ここにいましたか。」

「どうかしましたか？先生？」

「はい！実は織斑君の部屋が用意できましたので
そちらで今日から生活して下さい。」

「わかりました」

「ようやく、あいつともおさらばか。」

「こんな短期間で用意してくれた」

山田先生に、感謝だな」

一夏は荷物を持ち新たな部屋へと向かっていった。

一夏の部屋前」

「俺の部屋は・・・ここか」

ガチャッ、・・・ボタン！

ドアを開けるもすぐに閉めてしまった。

「ちよつと、待て、ちよつと、待て。確かここは」

俺の部屋のはず。それなのに、

すぐく見憶えのある青色の髪が

見えたのは気のせいだろうか？

いや、気のせいだ。きつと」

そう、自分に言い聞かせ、もう一度開けてみる。

ガチャッ。

「おかえりなさい。あなた？、ご飯にする？お風呂にする？
それとも、あ？た？し？」

「なあ？何であんたはエプロンの下に水着なんか着てんだ？」

「あら？ばれちゃった。はだかエプロンだと思ったでしょ」

「残念ながら肩紐が見えてるんで思わない」

「ありや？これは失敗、失敗」

「なんで、ここにいんだよ！楯無！」

そこには生徒会長、更識楯無がいた。

「んーまあ、ちょっと、連絡かしらね」

「連絡つてなんだ」

「うん、じつは私もここに住むから、よろしく」

「はあ？ちよつと待てよ！俺は聞いてないぞ」

「うん、私が今決めたもん。生徒会長権限で」

実はIS学園の生徒会長は他とは違い生徒の中で最も強い生徒が務めるのだ。

つまり、会長＝最強なのだ。そして会長は教師と同等の権力をもつ。

「職権乱用だろ。まあいいや。ひとまず俺はシャワーをあびさせてもらうから、

その格好をどうにかしろ」

そう言い一夏はシャワー室へと消えていった。

この二人が今後、どのようにして関わっていくのかは次回のお楽しみ。

第10話 試合と侵入者

クラス代表別トーナメント当日~~~~

「さあー始まりました。クラス代表別トーナメント。この試合で優勝すると、

フリーパスが贈呈されます。さあ、どのクラスの手にわたるのでしょうか！」

わあああああー

ー夏side

今ごろ、会場は大盛り上がりしているだろう。

外にいても歓声が聞こえてくる。

「こんなところにいた！試合見に行かなくていいの？」

「ああ、良いんだよ。別に試合何が見なくても強いし」

「その自信はどこから出てくるのかしらね？」

第2アリーナビット内~~~~

「じゃあ、セシリアがんばれよ！お前なら大丈夫だ。」

「ええ！もちろん勝ってきますわ。箒さん」

そついうとブルー・ティアーズを纏いフィールドへと向かっていった。

そこには甲龍を展開した鈴が待っていた。

「鳳さん。よろしく願いしますわ。」

「うん。よろしく。でも勝つのはあたしだから」

カウントダウンが始まった。

5・4・3・2・1、ビー

先攻は鈴だった。瞬時加速でセシリアに近づき双天牙月をふるった。しかし、セシリアも負けじとインターセプターではじいた。

「へえ〜やるはね」

「これでも、代表候補生ですので」

そう言い、セシリアはいったんセシリアから距離をとった。しかし、
「甘い！」

そう言うのと甲龍の肩のアーマーがパカツとスライドして開き、
中心が一瞬光ったかと思うと何か見えない物に殴られた。

「キヤア！」

セシリアは地面に叩きつけられた。

「あれは、まさか・・・」

第side

「あれは？」

「あれは、衝撃砲「龍砲」ですね。空間自体を圧縮し砲身を作って
その余剰エネルギーを、

打ち出し攻撃するものです。」

「つまり、砲身も砲弾も見えないんですか？」
「ええ」

第は再び画面に視線をもどした。

「へえ、やるじゃない。一発しか喰らってないなんて。」

「それでも、代表候補生ですから」

しかし、セシリアは内心焦っていた。

「まずい、ですわね。砲身も砲弾も見えないとするとビットもつかえませんわ。」

こうなれば・・・」

すると、セシリアは先ほどよりも大きく動き出した。

「見えなければ、撃たせなければいいこと。」

「くっ！さつきからちょこまかと！」

「今ですわ！」

セシリアが鈴にレーザーを撃とうとしたとき・・・

ズドオオオオン。

アリーナのバリアを突き破って何かが落ちてきた。

「な、なんですよ！あれは！」

「知らないわよ！こっちが聞きたいくらいよ！」

すると、その落ちてきたものが突如観客席に向かいはじめた。

「まずい！鳳！オルコット！今すぐあのISを止める！」

オープンチャンネルを通じて千冬の怒号が聞こえた。

「え？え？」

「いいか！奴はアリーナのバリアをBT兵器を使い破壊した。」

つまり奴は絶対防御をも貫く攻撃を持っている。

これを観客席に放ってみる。あとは分かるな？」

「「!!」」

「行くわよ！セシリア！」

「ええ！」

二人は黒いISに向かっていった。

ビット内~~~~

「山田先生。今すぐ警戒レベルを上げてください。」

「そ、それが、さっきからやっているんですがこちらの操作を全く受け付けません！」

「何？どういうことだ！」

「恐らくあのISに乗っ取られたかと・・・」

「くそっ！」

千冬は壁に拳を叩きつけた。

「先生！生徒たちを避難させなくていいんですか？」

「そうしようにも、防護シャッターは降りませんし、会場につながる全ての、

ドアが開かないんです」

「それでは、政府に支援要請をしては・・・」

「それも無理だ。あのISによって今、IS学園はすべてのコントローラーが奪われて、

しまっている」

「そ、そんな」

「あの二人に任せるしかない。」

フィールド内~~~~

「セシリア、あいつにB-Tを使わせちゃだめよ！」

「ええ！わかっていますわ」

二人は所属不明のISと交戦していた。

「きゃあ！」

「セシリア！」

セシリアが相手の長い腕で弾き飛ばされてしまった。

「何なのよ！あいつは。なんで全身装甲なのよ？」

相手は全身装甲をしており、異様に長い腕に背中には大型のスラスターがつけられていた。

「へまずいわね。さっきの試合との連戦だからほとんどエネルギーが残っていない。」

ドカン！

「ぐう！」

「大丈夫ですか、鳳さん！」

「ええ、そんなことよりあいつは？」

相手はすでに発射準備を終えて、今にも発射しそうだった。

「やばい！セシリア！あいつを狙えないの？」

「今やっていますわ！」

セシリアは照準を向けるが、既に遅かった。

相手は既に発射し終えていた。

「やめてええええええええええ」

鈴の悲痛な叫びがアリーナに響いた。

ズドオオオン。

レーザーが光に弾かれた。

「え？何？また敵なの、それとも……」

その光が消え姿を現したのは……

一夏だった。

一夏side

「ん？あれは……」

アリーナの上空に黒色の何かが浮遊していた。

「なあ、白式。あれってもしかしてISか？」

「うん。そうだね。それも無人機だよ」

「そうか。じゃあ行くか」

「うん」

「一夏君？どこに行くの？」

「ちよつと用事が出来たんでな」

そう言い一夏は白式を取り出し、鞘を抜くと光となって行ってしまった。

「こいつは、もしかして・・・」

「うん、多分前の奴とほぼ同じだね」

「そうか。じゃあ、破壊しようか」

「了解！」

「なんで、あなたがここにいますの！すぐに戻りなさい！

ここは遊び場ではないんですよ！」

「・・・・・・・・・・」

一夏は腕を上げ、1度だけ指を鳴らした。すると、

ビーっ、ビーッ、ビーッ

「生徒の皆さんはすぐに避難してください。繰り返します。生徒の皆さんは・・・」

「今、IS学園の全てのプログラムの主導権は俺が握った！

さあ、始めようぜ！俺たちの試合を！」

ビット内へへ

「織斑先生！」

「ああ、見えているよ。あいつ、一体なにをした？」

「くそ！先生私に打鉄の使用許可を！」

「何故だ？」

「あいつがいても何も変わりません！」

「ダメだ。許可できん」

「な！なぜですか」

「今、織斑が交戦中だ。これ以上行っても何も状況は変わらんここは、織斑に任せる。」

「なぜ、あんな奴に任せるんですか！」

「あいつならば絶対に勝つからだ」

「しかし！」

「篠ノ之、見ている。あれがあいつの力だ」

一夏side

「ふーん。成程。確かに奴よりも性能は上がっている。けど、弱いな」

一夏は相手の攻撃を避けながら言った。

「こんな奴に時間を懸ける気はない。そろそろ終わりにしてやる。」

一夏はそう言うのと突然後ろを向きだした。

相手もそれを見逃すほど馬鹿ではなく、攻撃のために距離を縮めようと

距離を詰めるが突然、雪片式型の刀身部分が伸び相手を壁際まで押し込んだ。

そのせいで相手は動けずにした。

「さあ、これで終わりにしようか」

そう言い一夏は雪片式型に乗ると10枚程の壁が現れた。

「いくぜ！」

一夏は翼を出し、空中に飛びあがると壁を通り抜けて行った。

「喰らえ！」

10枚目の壁を通過すると同時に相手に蹴りをいれた。

それと同時に黒いISは大爆発を起こし見るも無残な姿になっていた。

「何なのよ、あの威力は。一撃で破壊するなんて」

鈴はあれを自分が喰らったらと思いい顔を青ざめていた。

「そんなバカな！なぜ、あの方がたおしたのですか！それも一撃で。」

二人と同じことを考えていた。

夕方。IS学園地下50メートル地点――

そこはレベル4以上の権限を持つ者しか入れない場所。

そこへ、先程のISが運び込まれ、冷たい顔でデータをみている千冬がいた。

「織斑先生」

「どうぞ」

千冬が許可するとドアが自動で開いた。

「解析結果ができました。」

「それで、どうでしたか？」

「はい。それが無人機でした」

「やはりか」

「はい。どのような方法で動いていたのかは不明です。

織斑君の一撃で全てが壊されていました」

「そうか・・・それでコアの方は、どうなった？」

「はい、それが・・・」

麻耶が突然、苦い顔になった。

「どうかしましたか？」

「はい。実はコアなんですが完全に破壊されてました」

「そうか。すまない。引き続き頼む」

「わかりました」

いつも以上にキビキビと動いていた。

「あいつは一体なにを考えているんだ。」

千冬は頭に一人の人物を思い浮かべて、仕事に戻って行った。

第11話 転入生と二人目

敵の襲撃から数時間後……

—夏side

俺はいま整備室を先程の戦闘を見ていた。

「ここは貸し切りにしていたはずなんだけどな。分からなかったか？楯無」

「あら、そんなの会長権限で無くしちゃった？」

「相変わらずの職権乱用だな」

「あら嬉しいわ」

「褒めてねえよ」

「それで、あいつは何だったの？」

「んゝ言えないんだがなゝ」

「大丈夫。当主の名にかけて言わないわ」

真剣な表情で答えた。

「……分かった」

「こいつは無人機だよ」

「!!!!」

楯無は驚いたような顔をした。

「そ、そんなはずは！」

「ああ今の技術では不可能だ。でも現に現れたんだ。受け入れろ」

「で、でも一体誰が？」

「そんなの決まってるだろ」

「心あたりがあるの？」

「ああ、まだ推測だがな」

整備室からだと楯無が話しかけてきた。

「ねえ、一夏君」

「ん、なん・・・」

後ろを振り向くと楯無はリボンをしていた。

しかし、ただのリボンではなく一夏にとって特別なものだった。

「お、お前そのリボン、まさか!」

「うん。久しぶりだね。一夏」

そのリボンは一夏が唯一、敵視することなく会いたがっていた、少女にあげたものだった。

「まさか、お前が公園の少女?」

「うん、一夏、ペンダント持つてるでしょ?」

一夏はペンダントを取り出した。

「うん、それはね私があげたもののなの。」

突然、一夏が楯無を抱きしめた。

「え?ちよつ、一夏!」

「ぐすつ。そうかお前が。よかった、会えて」

「一夏?」

一夏は泣いていた。

「お前に会っていなかったら今、俺はここにはいなかった。ありがとう」

「うん」

それから数分後・・・

「悪いないきなり抱きついたりして」

「い、いや別に一夏になら何されても」

先程の事を思い出し思わず顔を赤くした。

「へ？最後よく聞こえなかった。もっかい言ってくれ」

「い、いや別に何もない」

「そ、そうか」

おされぎみな一夏だった。

「なあ、今度どっかに行かないか？」

「え？それって」

「ん？嫌か？」

「いや、別に。むしろ行きたい！！」

「あ、ああ、じゃあ今度の日曜日でもいいか？」

「う、うん！じゃあね一夏！」

「ああ！じゃあな。」

一夏side

へなげ、俺は今ドキドキしてんだ。ただ数分話しただけなのに、この気持ちには、一体何なんだ？」

顔を赤くしながら悩んでいた、一夏であった。

楯無side

へふう。あゝドキドキした。まだ心臓がバクバクしてるし顔も若干赤いかな。

何なんだろう？この気持ちは？確かに一夏君はかつこよかったけど、別にそんな目で見てたわけじゃないのに、
こちら顔も赤くしながら悩んでいた。

余談~~~~

二人とも考えすぎて壁に気付かず顔面をぶつけ、悶絶していたのは知る由もない。

翌日、教室内~~~~

「ねえねえ！あんたはこのモデルにするの？」

「んゝあたしはこのかな？」

「えゝ、そこ選ぶのゝなんかダサくない？」

「そうかな？別に普通だと思っけど・・・」
ガラガラ。

「みなさん、おはようございます」

「みんな、おはよう」

「あ！箒ちゃんにセシリア！おはよう」

「ねえねえ二人のISスーツってどこのなの？」

ISスーツとはISを装着するときには必ず着なければならぬス

「ッだ。」

さらに吸汗性、通気性抜群の代物なのだ。

「私はハヅキ社製の物だ」

「あ！篠ノ之さんも？私もそこにしようかな」

「えゝでもハヅキのってデザインだけって気がしない？」

「デザインがいいの！」

「セシリアのはどこのなの？」

「私はイギリスの特注品ですわ」

「おおゝやぱり候補生はすごいね」

すると、そこへ・・・

「みなさん、おはようございます」

「ゝゝゝおはようございます」ゝゝゝ

全学年公認？のゆるキャラこと山田先生が入って来た。

「諸君、おはよう。」

「ゝゝゝお、おはようございます！ゝゝゝ」

最強の先生も入って来た。

「えゝつと 全員いますか？」

「織斑がいないようだか？」

「遅刻しました。すみません」

「あ、織斑君、最近遅刻多いですよ？」

「すみません」

全員がそろった。

「皆さんに嬉しいお知らせがあります」

「ゝゝゝ？？？？」ゝゝゝ

「実はここに転校生が2人も来ます！」

「え？二人同時に？しかも同じクラス？」

「それでは、どうぞ」

「！貴様がー」

パチン！

「ドイツの挨拶はこうやるのか？」

「！！」

ラウラは受け止められるとは思わず驚いていた。

「じゃあ、俺もするでしょう」

「ぐあ！」

突然ラウラが何かに吹き飛ばされた。

「貴様！いつたいなにを・・・」

「何ってこれがドイツの挨拶なんだろう？なら挨拶を返したまでさ。」

そこには白式の翼を部分展開した一夏が立っていた。

「そうではない！それは何だと聞いている！」

「ん？これか？翼に決まってるんだろ。目も悪いのか？」

ラウラも展開しようとするが、

「そこまでだ！」

「教官」

「貴様らアラスカ条約を忘れたのか？」

「あんなもん形骸化してるも同然だろが。」

「織斑、貴様そんなに処罰を受けたいのか？」

「そんなことよりさっさと終わらせろよ。時間ねえんじゃねえの？」

「ちっ！では各人ISスーツに更衣し、第二グラウンドに集合！遅れるなよ！」

「「は、はい！」」

「あ、君が織斑君？はじめまして、僕は・・・」

「なあ、皆を騙して生活なんて出来んのか？」

「え？」

「いいよ。デユノア君そんな奴ほっとこう。私もう着替えたから案内してあげる」

「え、あ、うんよろしく」

第二グラウンド」

「全員集まったな。では、これより1、2組合同授業を行う！」

「……はい！」

「では、本日より実践的な訓練を行う。まず、出席番号順に一人ずつ、

専用機もちにつけ！」

「よろしくね！デュノア君！」

各グループ賑わっていたが二つだけ静かなところがあった。

1つはラウラの班。まだそこはいい、一夏の班がひどかった。全員1mは離れていた。

「それでは各班のリーダーの専用機もちの人はISを取りに来て下さい」

「はあ、何であたしがあれの班なの？」

「仕方無いじゃない。がんばりましょ」

一夏は打鉄を持ってくると・・・

「お前らで勝手にやれ。俺は何もしない」

そのままPICで浮いて横になってしまった。

「ふん、誰が貴様なんぞに頼るか！」

そっつい筈がリーダーになってしまった。

「さあ、みんなやろうか？まずは1番の人から頼む」

「OK」

放課後くくく一夏の部屋兼楯無の部屋くく

「聞いたわよ。一夏。転校生をぶっ飛ばしたんだって?」

「はあく何で知ってたんだ?」

「今、学園中で噂よ?一夏が暴行したって」

「悪いが暴行じゃない。まったく何も知らないクズどもが調子にのりやがって」

「まあまあ、一応生徒会の方で注意しておいたから」

「あっそ」

「そ、それよりも明日だよね?」

「あ、ああ」

二人して顔を赤くした。

「じゃあ、明日は11時に駅前でいいかな?」

「何で?一緒にできればいいんじゃないのか?」

「もう!女の子には準備がいるの!」

「お、おう」

「じゃあ、御休み」

「ああ、って早すぎだろ!まだ9時だぞ!」

スー、スー

すでに寝息が聞こえていた。

はあ、何でこうなんだ?

一夏も夢へと落ちていった。

明らか誰が見てもチャライと思うほどの奴がいた。

金髪にピアスにチエーンがじゃらじゃら着けているのが複数いた。

「すみません。人を待ってるんで。」

「ええ、いいじゃん。そんな奴よりも絶対俺達の方が楽しませられるって！」

「バ、力違うだろ、気持ちよくさせれるだろ。」

「はかなの？馬鹿なのか？」

「ごめんなさい。あなた達には興味が湧かないから」

「うわあ、ザックリ言うなあ、でも聞き覚えのある声だな、
そう思いとなりを見ると………」

楯無だった。

「こつちが下手にいれば調子に乗りやがって、いいから来い！」

無理やり手をつかもうとした時、

「おい。くそ野郎。さっさと手を放せ。潰されたいのか？」

体が勝手に動いていた。

「あ？何だてめえ！」

「いいから手をはなせ。」

「もっぺん言ってみろや！」

「耳でも悪いのか？」

「てめえ！」

「はあ、やっぱリクズだな。」

「な！」

ヒュッ！ボキ！

「あ？骨いつちやったかな？」

「いてえええええ」

「ヒイ！に、逃げろ」

「あ、逃げた。ビビリだな」

「あ、ありがとう。格好よかったよ」

「お、おう」

「それよりも行こうぜ」

「うん！」

とあるデパート内~~~~

「ねえ！これどう？」

「うん。可愛い」

「もう、さっきからそればかりじゃない！」

「むちゃ言っなよ。何時間たつてると思う？」

「うん。30分？」

「違う！1時間半だ！」

そうさっきから服をとっては着て俺に見せまた脱ぐ。これの繰り返しだ。

「え！そうなの？」

「はあ〜まあいいや。で？どれを買った？」

「うん、今日は買わない」

「はあ！なんじゃそりゃ。まあいいや次行こうぜ」

「うん！」

「楯無、何してる？」

「ん？腕に抱きついてる」

「そんな真顔で言われても」

「だめ？」

「だ、だめじゃない」

上目づかいで思わず顔を赤くしてしまった。

「ふふ！なら良いじゃない」

夕方~~~~

「どうだった？楯無、今日は楽しかったか？」

「うん！楽しかったよ！ありがとう！」

「そうか、初めてだったがまあいいか。」

「ねえ？一夏」

「ん？なん・・・」

ちゅっ！

「は？」

「そ、その、今日は楽しかったよ！また誘ってね」

「あ、ああ」

ドクン、ドクン、ドクン

相手に聞こえるんじゃないかって言うぐらいに心臓が高鳴っていた。

「ああ、そうか。やっと分かった。この気持ち。この気持ちは・・・」

俺はこいつのことが好きなんだ。♡

一夏はようやく気づいたあの公園であつたあの日から好きだつたと言う事が、しかし・・・

「でも、これは叶わないんだろな。俺の場合♡」

一夏は昔から自分を好いてくれる人などいなかったのだ。

「だから、俺は・・・♡」

楯無side

へな、なんで、私はキスなんかしたんだろう？

ドクン、ドクン、ドクン。

胸が疼くような感覚が残っていた。すると・・・

「楯無。」

「ん？な、何？」

「楽しかった！ありがとう！」

一夏が満面の笑みで笑うと楯無の心臓は一気に高鳴った。

へそつかへ何で気付かなかったんだろ？ようやく分かった。

この胸の疼きといい、心臓の高鳴りの正体は・・・

一夏が好きなんだ。初めて会ったあの日からずっと、今日まで

お互いに、ようやく気付いた気持ち。

果たしてお互いの気持ちを通じ合う日はくるのでしょうか。

この結末はいつか語られることだろう。

意外と近い日に。

第13話 憎しみと掴む手

織斑千冬の手記より抜粋――

私は最悪の間違いをしてしまった。

どうして、あいつをあの時信じられなかったのか。

一夏……許してくれないだろうが……すまない

――

一夏の部屋――

「あ、あの織斑君。ちょっといいかな？」

「ん？何か用か」

「今日、一緒に訓練でもどうかな？っと思って」

「一夏で良い。で？なぜ、そう思ったんだ？」

「え？いや、えっと」

「まあいい。分かった。第2アリーナでいいか？」

「うん、分かった。先に行ってるね」

「ああ」

第2アリーナ――

「あ！一夏」

「よう、じゃあ始めようぜ」

「うん」

そう言い二人は専用機を展開した。

数分後――

結果から言えば俺の勝ちだった。

「一夏、強いんだね」

「そうか？」

「凄いよ！だってまだ一夏ってIS動かして間もないのにここまで強いなんて」

そう言いシャルルは俺を褒めていた。

動きがどうか、間合いの詰め方とか正直聞いててうざかった。すると、そこへ・・・

「ねえ！あれ見て。」

「うわ！ドイツのISだ」

「確かドイツの第三世代機って試験段階じゃなかったの？」

そこには漆黒のISがいた。

「おい貴様。貴様も専用機もちだそうだな。私と闘え！」

「悪いが断る。」

「なぜだ！」

「理由もなしに闘っても時間の無駄だ。」

「そうか。ならば戦わざる様にしてやる！」

突然、ラウラがエネルギー手刀をコールし切りかかってきたが、それをかわし雪片二型をコールした。

「な！」

「隙だらけだ。零月！」

「がああああああああ」

辺りが白に包まれた。

「ぐ、が、貴様！」

「どうした？こんなものか？やはり所詮は候補生レベルと云うことか。」

「貴様らそこで何をしている。名前と学年を言え！」

「終わるか。まあいいや。いい暇つぶしは出来た。帰るかな」

「待て・・・まだ勝負はついていない。戦え！」

そう言うも既にISのダメージレベルCを超えている。

「おい。ボーデヴィツヒ。まだお前がそんな玩具で俺と闘うって言うなら

殺すぞ」

ゾクッ！

何か得体のしれないものがラウラの体を駆け巡った。

へ何だ。今のは。この私がこんな奴に恐怖しているとでも言っのか？
実際ラウラは気づいていないが手が恐怖で震えていた。

「はあ。この程度か」

「ど、どこへ行く！」

「興ざめた。お前と闘っても面白くない」

そう言い一夏は去って行った

夕方、一夏の部屋……

「おい、シャルル」

「ん？何かな？」

「いい加減、男装するのはやめたらどうだ？」

シャルロット・デュノアさん。」

「……！」

シャルロットの体が大きく動いた。

「な、何の事かな？僕はシャルル・デュノアだよ？」

「まだ、薄情しないのか？まあいい。証拠を見せてやる」

そう言い俺はシャルロットの胸に手を置いた。

「え？い、一夏？」

「シャルロット。呼吸してみる」

「え？」

「人間には二つの呼吸方法がある。一つは腹式呼吸。もう一つは胸式呼吸。」

男性は大体は呼吸するとお腹が動く。女性ならば大体は胸が動く。

つまりはお前が呼吸をして胸が動いたら女性、お腹が動いたら男性の確立が、

高いって訳だ。さあ、やってくれよ。呼吸ぐらい出来るだろ？」

「ごめんね一夏。」

「ようやく言う気になったか？」

「うん」

そう言うとシャルルは服の下からコルセットを取り出した。

「うん。一夏の言うとおり、僕は女の子なんだ。」

僕の話聞いてくれる？」

「ああ」

シャルルは静かに話し始めた。

結果から言えばシャルロットはデュノアの実の娘ではなく、愛人の子だという。

「今、デュノア社は経営難でね、こうでもしないと政府から今度の、

選定で落ちればIS製造の資格を剥奪されるんだ。」

「だから、イレギュラーである俺に広告塔として近づき、白式のデータを、

奪おうとした訳か」

「うん。ごめんね一夏」

「それで？お前はとうしたい？」

「え？」

「だからとうしたい？」

「僕は・・・」

「シャルロット。」

俺はあるものを見せた。

「え？これって！」

「デュノア社のデータだ」

そこにはデュノア社の見られたくはないデータが大量にあった。

「でも、どうやって！」

「そんなことは今はどうでもいい。このENTERキーを押せば、このデータを世界中にばらまけるぞ」

「でも、そんな事をしたら！」

「まあ、今の社長は一生日の目を見れないな。」

「それは・・・」

「お前がしたい事をしろ。でも覚えておけ、もうお前は一人じゃない。」

お前には俺がついている。俺の手を掴め。シャルロット」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

数分考えたシャルロットは、ENTERキーに指を近づけていき・・・

押した。

「これが、お前のやりたかったことか？」
「うん。僕が掴む手はもうデュノアじゃなくて一夏の手だから」
「そうか」
「一夏、君は一体何者なの？」
「俺か？俺は、ただの惨めで弱い学生だよ」
笑いながら一夏は言った。

余談~~~~

翌日のニュースはデュノア社の社長が捕まり、新しく建て直すことが決まり、騒いでいた。

翌日、第3アリーナにて~~~~

「あら？鳳さんではありませんか？」

「ん？セシリア？何でいんの？」

「ええ、まあ少しISを動かそうかと思ひまして。」

「そう、じゃあこの前の決着と行こうかしら？」

「いいですね」

二人がISを展開し始めようとした瞬間、二人の間を何かが通った。
「何よ！」

「誰ですよ！」

そこにはシュヴァルツェア・レーゲンを展開した、ラウラが立っていた。

第14話 戦いとタツゲ

織斑一夏の軌跡その？~~~~

俺には幼馴染と言われるものがあるらしい。

俺には自覚はないが。

まあ、そいつには一人、姉がいた。

篠ノ之束である。その人は天才だった。俺と同じくらい。

「へー凄いね、君！お友達になるうよ！」

これが篠ノ之束との出会いだった。

第三アリーナ~~~~

「あなたは！」

「ラウラ・ボーデヴィッヒ！」

「ふん。実物よりもデータの方が強く見えるな。やはり、古いの
人が多いことぐらいしか、

取り柄のない国と言うことか」

「な、なんですって！」

「あなた、イギリスを侮辱しますの？！」

「そんなことはどうでも良い、かかって来い」

「いいじゃない。ケンカ売ったこと後悔させてやるわ！セシリア！」

「ええ！そうですわね！」

「ふん」

戦いが始まった。

「おい、シャルル。新社長はどうだった？」

「うん。とても優しい人だよ！でも、まだ第三世代の着手には時間がかかるみたい。」

「まあ、そうだろうな。当分は無理じゃね？」

二人が第三アリーナに入ると騒がしかった。

「ん？なんだろう？」

「さあ？どっかの馬鹿どもがケンカでもしてんじゃねえのか？」

「ねえ。何かあったの？」

「今、鳳さんとセシリアとボーデヴィツヒさんが模擬戦してるんだよ！」

「ふん。らしいよー夏」

「あつそ。興味無いな」

「あゝもう！。何なのよ！あの武装は！」

「何だ？AICを知らんのか？」

「AIC！やはりそうでしたか。相性最悪ですわね」

AICとは対象の物体の動きを止めることができるもの。

「やはり、こんなものか。そろそろ終わりにさせてもらおう」

そついいラウラは背中からロープ状のものを射出し、二人を捕らえた。

「くっ！」

「きゃあ」

「そらそら！こんなものか」

動けない二人をラウラは殴っていった。何度も。

それにより装甲が落ちていき、ダメージレベルがCを超えた。

「やばいよ。あの二人。すでにCを超えている！一夏！」

「ん、ほつとけよ。あんな奴ら」

「え？何で？」

「何でって、自業自得だろ？自分の実力もわかってないのに格上に挑むなんて」

「でも！それじゃあ、あの二人が！」

「はいはい。分かったよ」

そう言い一夏は白式を展開しアリーナのバリアを切り裂いた。

「ふん。こんなものか。やはり弱いな。」

「おい。」

「何の用だ。織斑！」

「そろそろ弱い者いじめはやめたら？惨めだぞ？」

「あなたねえ！」

「お前、俺を殺したいほど憎いんだろ？だったら今度のトーナメントで、

決着付けようぜ？」

「ふ。それもそうだな。」

そう言いラウラはISを戻し、帰って行った。

保健室~~~~

「大丈夫？二人とも？」

「ええ、大丈夫よ」

「まあわたくしもですが、なぜ、止めたのですか！」

「はあ。そんなことすら分からなかったのかよ」

「なんですって！」

「まあまあ。一夏も喧嘩を売らないの」

「失礼しまーす」

「あ、山田先生」

「先生。どうでしたか？」

「はい。二人のISはダメージレベルがCを超えていました」

「え？そんな！それじゃあ試合はどうなるんですか？」

「もちろん。棄権と言うことになります」

「そんな！じゃああいつに仕返しできないじゃない。」

するとそこへ・・・

ドドドドドドドドドドドド

地鳴りのような音が聞こえてきた。

「ん？何の音だ？」

「「「「「デュノア君！私と組んで！」「」「」「」

「え！何の事？」

「これの事だよ！」

一人の生徒が一枚の紙を見せてきた。

「ん？なにに。個人別トーナメントは二人一組での出場とする？」

「はい！実はこの前の時のように非常事態が起こらないとも言えませんが、

その時の備え、とのことですよ」

「だから、」

「「「「「わたしと組んで！デュノア君！」「」「」「」

相変わらず打ち合わせしてるのかと言うほどのハモりっぷりである。

「えっと、僕は・・・」

「悪いがシャルルは俺と組むから」

「!!!!!!!!!!!!!!」

「え？一夏？」

「なんだ？お前らその顔は？不満か？」

「まあいいか。でもデュノア君の足は引つ張らないでしょ！」

そう言い軍団は出て行った。・・・・・・

一夏の部屋~~~~~

「一夏、ありがとう」

「ん？何が？」

「だって僕が女の子なのをばれないようにしてくれたでしょ？」

「へえ〜いいことしたじゃない、一夏。」

「よう。楯無」

「え！会長さん！」

「大丈夫だ。シャルロット。こいつも関係者だから」

「そ、私も事情は聞いているから大丈夫よ。」

「そうですか。」

それから三人で語り合った。

「じゃあそろそろ寝ようか。明日試合だしね」

「うん。そうだね」

「ああ」

そう言いベッドに入ったが問題が発生した。

ベッドが一つ足りないのだ。

「なあ、俺はどうすればいい？」

「ん〜。一緒に寝る？」

「な！」

思わず顔を赤くしてしまった。

「もしかして……」

「それが良いよ！一夏。」

「はあ！ちよ、シャルロット！」

「会長さんはどうなの？」

そう言っていると楯無は顔を赤くしながら、

「わ、私は別にいいよ」

「た、楯無！」

「一夏は嫌？」

涙目で下から見られた。

「う……」

「そんな目で見たら断れないだろ」

「分かった。一緒に寝よう」

「うん！」

嬉しそうに楯無は顔を緩めた。

しかし……

「眠れない！」

結局こうなった二人だった。

番外編　　一夏の幸せな過去。

本篇から少し時間を戻してみよう。

本篇から約12年前。一夏が幼稚園に入る所から始めようか。

「はい。皆さんおはようございま〜す」

「「「「「おはようございま〜す」「「「「「」

「はい。よくできましたね！私の名前は、村井静香で〜す。
静香先生って呼んでね」

「「「「「はい。静香先生〜」「「「「「」

「はい。よくできました。それじゃあ、みんなのお名前を呼ぶから、

名前を呼ばれたら大きな声で返事してね〜。いいかな〜」

「「「「「はい。」「「「「「」

みんな元気いっぱいに声を出した。

後ろにいる保護者も幸せそうに笑っている。

一人を除いて・・・

「え〜と、中原由美さん！」

「はい」

「はい！元気いっぱいですね〜。え〜と次は、織斑いち・・・」

名前を呼び掛けて先生は止まってしまった。

後ろの保護者も不思議に思い先生の視線の先に目を移すと、そこに

は・・・

「ここはあれを使って・・・」

到底幼稚園児が理解できないような単語を言いながら、問題を解いていた。

「え〜っと。織斑一夏君？」

「はい。何でしょうか。先生。」

「いや、何でもありません」

つい、敬語を使ってしまうほど大人びていたという。これが織斑一夏の入園式の様子である。

数ヶ月後〜〜〜

園児たちもそろそろ幼稚園に慣れ始め、友達と言つものができ始めたころ・・・

「あの〜織斑君？」

「はい。何でしょうか？先生」

「えっと、お友達と遊ばないの？」

「ええ。みんな、僕と遊ぶのを嫌がってますから」

「それ、本当なの？」

「はい」

先生が園児たちに聞くと・・・

「ねえ。みんなどうして織斑君を入れてあげないの？」

「え〜だってあいつが入ると面白くなるもん」

「どういふことかな？」

「あいつとサッカーするとあいつがほとんど点入れるもん！」

「何点ぐらい？」

「ん〜この前は相手が泣いちゃうぐらい！」

幼稚園ではこんな一夏だが家での様子も見てみよう。

「ただいま！お姉ちゃん！」

「おお！お帰り一夏！よいしょー」

「うはははは。高い！」

一夏が帰ってくるのと千冬は必ず一夏を抱き上げた。

「ん？一夏。また大きくなったか？重くなったぞ」

「本当？嬉しいなあ」

一夏は本当に嬉しそうに顔を緩めた。

「ああ。本当だぞ！いつかはお姉ちゃんも抜かされるかもな。」

「えへへ」

幸せそうな二人の日常。これが普通だった。あれが起こるまでは・・・

今回のところはこれでお終い。これはまだ少年が幸せだと思っている頃の、

過去のお話。この続きはまた次回語られるだろう。

設定集

人物設定

織斑一夏

原作よりも頭が良くなっており、小学生の時には高校生レベルだった。

篠ノ之束と同等もしくはそれ以上の頭脳を持っているが小学生時代にそのことでいじめを

うけた為、頭が悪いように、見せかけている。

ISに関しては教本を丸三日で並の開発者よりも高水準の知識を増やした。

楯無が好きだと気付き一度は諦めようとするが本音の激励とさやからの言葉により、

臨海学校後に告白。今では超がつく程のバカップル

<専用IS>

原作と同じ白式だが相違点は天使のような白い翼が備わっており機動力が大幅に上がっており、

速さも搭乗者の事を考えなければ、ハイパーセンサーにぎりぎり捕まるか捕まらないところまで出せる。

<主要武器>

原作と同じく、雪片式型だが機能が増えている。

主に、刀身部分を伸ばす、零落白夜の効果を持つ斬撃をとばす

<必殺技のようなもの>

この作品の白式は必殺技のようなものがあり、それぞれ共通するのは一定値のエネルギーを消費すること。

1、キック

一夏の目の前にエネルギーの壁が10枚出て、それを通過することに足にエネルギーがチャージされ10枚目を通過すると同時に相手に蹴りをいれる。元ネタは知っている人は知っているある仮面ライダーのライダーキック。

2、剣

二つ目は、刀身を伸ばした、もしくはノーマル状態の雪片式型を構えると、キックと同じように、エネルギーの壁が出現し、通過することにチャージされ、相手を切るというもの。

元ネタはこれも仮面ライダーからの必殺技。

3、零月

3つ目は雪片式型から放つ飛ぶ斬撃。零落白夜の効果を持つ。

<アクセルとブラスター、アクセルブラスターについて>
贈り主不明の荷物から一夏宛に届いたもの。

ストップウォッチと3枚のカードが入っていた。

<アクセル>

10秒間だけ何ものにも追従を許さない圧倒的な速さが手に入る代わりに攻撃力が、

下がるが相手が理解する前に多くの攻撃を与えカバール。

<ブラスター>

10秒間のみ全てを粉碎する破壊力を得る。

その代りに速さが落ちるため一撃必殺タイプ。

<白式の人格とライトについて>

この作品の白式は一夏に時々話しかけます。時には一夏に助言をしたりします。

後、ライトについては、これはあるウルトラマンのキーパーソンがモチーフです。

ちなみに、白式の待機形態は原作ではガントレットだが今作ではこれもあるウルトラマンからの登場です。

言うなら、ネ○サスの、エボルトスターのようなもの。ISが近くにいと発光し光り輝く。

鞘を抜けるのは一夏のみでそれ以外の人に触れると電流が走る仕組みになっている。

織斑千冬

原作ではブラコンぎみ？だったが今作では、ある間違いをしてしまい、

一夏との関係は冷めきっている。

篠ノ之箒

今作では、一夏を自分よりも下にみている。元々は普通の関係だったが、

小学校時代にある理由で嫌うようになった。
姉の束との仲は原作より良好。

セシリア・オルコット

イギリス代表候補生でブルー・ティアーズの専属搭乗者。

今作では、近距離戦も原作よりかは強い設定。世の中の男性を下に

見ている節がある。

更識楯無

ロシア代表でミスティアス・レイディの専属搭乗者。

今作のメインヒロインで一夏が公園で会った少女。

一夏が好きだと気付いて告白。その後無事に付き合う事になり、
今では超がつく程のバカップルにまで成長。

桜木さや

一夏とは同じ中学校。

一夏とは腐れ縁みたいなものだが本当は一夏に一目ぼれしていた。
しかし、事故に遭い他界。

臨海学校で精神世界で一夏と再会。

想いを告白し激励する事で戦う目的を見つけさせ、成仏した。

<今作のオリジナル設定>

今作では、光と闇がキーワードになっている。

遥か昔からこの二つの力は人に受け継がれ、争ってきた。

しかし、遥か昔に光が闇を封印し、同時に己も眠りにつくことにより一時は平和になったが、

現代の人間は心の闇が多すぎて封印が解けてしまい解き放たれた。

そして、光も目覚め解き放たれた。

現在、光は一夏へ厳密には一夏と白式に受け継がれた。
闇は自らが器となることで半減のデメリットを無くした。

設定集（後書き）

おはようございます。ケンです。前に言っていた設定集です。
出るのが遅れてすみません。恐らくネタバレはありません。
これは随時更新致します。
それでは！さよなら！

第15話

決着と始まり

個人別トーナメント当日……

「おはよう！一夏！」

「ああ。おはよう。シャルル」

まだみんなには言っていないのでみんなの前ではシャルルと呼んでいる。

「1回戦は誰だろう？」

「さあ？見に行くか？」

「そうだね」

「えーと。1回戦の相手は……」

「ラウラと篠ノ乃ペアか」

「そうだね」

「シャルル」

「なに？」

「頼みがある」

「待つ手間が省けたというものだな。織斑」

「そうだな」

「あの時の借りは、晴らさせてもらっぞ」

「やれるもんならやってみろよ」

「そのつもりだ」

カウントが始められた。

5・4・3・2・1・ピー

「織斑！貴様の相手は私だ！」

「邪魔だ、どけ篠ノ乃！」

「悪いがあいつは私が倒す」

「ふざけるな！あいつの相手は私だ！」

「おい。何勘違いしてんだ？」

「なに？」

「かかってこいよ。二人で」

「！貴様、なめているのか？」

「なめてなんかないさ。シャルルには手を出さないように言っている。」

俺の力を見せるにはちょうどいいだろ？」

「ほう。面白い。貴様の無能さを全員に見せつけてやるう」

「いいから。さっさと来いよ。」

「いくぞ！」

ビット内へ

「はあ、凄いですね。織斑君。二人同時に戦ってますよ」

「ああ、そうだな」

「そ、そんな」

「これで、分かったでしょ？一夏が強いのに」

「あのー織斑先生？」

「どうしましたか？山田先生？」

「気になっっていたんですが、どうして織斑君はあんなにも織斑先生を嫌ってるんですか？」

「……また今度話そう」

「は、はい」

千冬の意外な反応にそれ以上口を出せなかった山田先生だった

楯無 side

今、一夏が二対一でありながら圧倒していた。

「あ、あれが織斑君？」

「す、凄い」

周りの生徒達は一夏の強さに驚いていた

「ふふふ、一夏は凄いなー」

それを見て楯無は嬉しそうに笑った。

「「ぐあ！」」

「おいおい。こんなもんかよ。情けないな。」

「貴様~~~~~」

「もういいや。そろそろ終わりにしよう」

そう言い一夏は雪片式型の刀身に触れると伸びた。

「の、伸びた!？」

「終わりだ!」

もう一度触れると剣にエネルギーがチャージされ青白く光っていた。

「ちっ!」

「お、おい貴様何をする」

箒を前に押し出し壁の様にした。

「余所見厳禁、火気厳禁つてな」

「しまっ!」

すぐさま箒が距離を取ろうとするが、

「遅い!せいやあああ」

「があああああああああ」

箒の打鉄が戦闘不能になり停止した。

「くそ!」

「後は・・・」

剣と剣がぶつかり火花が散った。

「見えてんだよ。ラウラ・ボーデヴィツヒ」

「織斑一夏~~~~」

「なぜ、貴様はそこまで俺を憎んでいる?」

「教官はかつてモンド・グロツソ二連覇と言う偉業を成し遂げられたのに、

貴様と言う存在のせいで教官はそれを逃した。この意味が分かるか!

織斑一夏!」

その時白式から白いオーラのようなものが放出された。

「な!何だこれは!」

「ふざけんじゃねえぞ!俺はあいつのせいでどれだけ、
人生を狂わされたと思っている!」

「何?」

「あいつがブリュンヒルデなんかになったせいで、俺に近寄ってく

る奴らは、

みんな俺に勝手に期待して、勝手に失望して、勝手に離れて行った。学校でもそうだ。全員、俺を俺として誰も見なかった。

俺は何もしていないのに、ただ友達が欲しいだけなのにできない。

お前にこの気持ちが分かるか？ラウラ・ボーデヴィツヒ！」

「！！！！！！」

一夏は叫びながら泣いていた。

「一夏ああああああ」

「！！！！！！」

「君は一人なんかじゃない！友達なら既に近くにいる！

僕や会長さんも君の隣にいる！ずっと！」

「シャルル・・・」

「ふ、ふん！馬鹿馬鹿しい。そんな小さいものを望んでどうする。」

「小さくてなかなか見えないから望むんだ！」

「なら貴様はそんな物が力になるとでも？」

「そうだ！一人で倒せなくても二人、三人、それ以上いればその分、力も上がる。それが真の強さだ！」

「違う！力の大きさが強さだ！そんな物に頼ってでは、

強くはならない。」

「いいさ。見せてやる」

「いくぞ」

「ぐあ！」

ラウラは壁に叩きつけられた。

「まだ、終わってねえぞ！来いよ。」

「言われなくてもそのつもりだあああああ」

ラウラはそう叫ぶと眼帯を外した。

「それは、確かヴォーダン・オージェだったか？」

「そうだ！貴様には使う必要はないと思っていたが、私の全力で貴様を潰す！」

「は！面白い。かかって来い」

そして、試合は終わりへと近づいていく。

「はあはあ」

「確かに反応速度等は飛躍的に上がったみたいがそれだけか？」

「黙れえええええ」

ラウラは瞬間加速で一夏に近づくが……

「これで、終わりだ」

一夏は雪片式型を両手で持ち、そして……

「零月！」

そのままラウラへとまっすぐに振り下ろした。

「終わったか。」

一夏は後ろを向き離れようとした時・・・

「！！！！」

「何が終わっただつて？織斑一夏！」

「ちっ！A I Cか」

「左腕は無事のようなが片腕だけでは何もできまい。
終わりだ！」

ラウラが一夏に砲撃しようとした時・・・

「残念だが終わるのはお前だ！」

突然、雪片式型の刀身が伸びラウラを壁際へと押し込んだ。

「くそ！こんなもの！」

ラウラが掴んでいる手を離し脱出しようとするが、

「いいのか？離すと一気に剣がお前を貫くぞ？」

「くそが！」

「さあ、ファイナレにしようか、ラウラ・ボーデヴィット」

一夏が飛び上がると同時に10枚の壁が現れた。

「くらえ！これが俺と白式の力だ！」

「くそおおおおおおおお」

壁をすべて通り、ラウラに蹴りを入れたと同時に試合終了を知らせる、

ブザーが鳴り響いた。

「やったね！一夏！」

「・・・・・・」

一夏はずっと空を見ていた。

「一夏？どうしたの？」

「何か、来る。」

「え？」

その時……

ズドオオオオオオオオオ

アリーナのバリアを突き破り何かが落ちてきた。

「あれは……」

「一夏さん！」

「ライトか？どうした？」

「気をつけてください！あれが、闇です！」

「！！あれが、闇。」

そこには、闇に包まれた何かがいた。

第16話

強さと理由

IS学園上空――

「ふむ。やはりこの方法で正解だったようだな。おかげで力も、100%フルに使える。それにどす黒い闇を感じる。そいつを使うか。」

黒い発行体がIS学園へと降下していった。

ビット内――

「山田君。すぐに警戒レベルを最大にまで引き上げる」

「は、はい！」

アリーナに非常事態を知らせる警報が鳴り響いた。

「それと、突入部隊をすぐさま編成する。」

部隊は教師陣で形成させ、一組5人で形成させる」

「は、はい！」

そう言い麻耶は自分の装備を取りに走って行った。

「何なんだ。今年は。襲撃が多すぎる」

アリーナ内――

「お前、誰だ？」

「ふふふ。ここでは初めましてのほうがいいかな？ 光」

「お前が闇の継承者か！」

「んゝ半分正解で半分間違いかなあゝ」

「何？」

「光は人に受け継がせたみたいだけど、それじゃあ力は半減する。それではお前には勝てない。だから、私は人に受け継がせるのではなく、

自分がその器となり力を半減させずそのままつかえるようにしたの」

「つまり、その姿が今の貴様の姿という訳か」

「まあねゝそれよりも・・・」

闇は倒れているラウラへと近づいて行った。

「何をする気だ！」

「まあ、見てなつて」

「だ・・・誰だ？」

「ねえ、あなた力欲しい？」

「な・・・に？」

「あなた、あいつが憎いんでしょう？」

「ああ、欲しい。私が最強である力、あいつを殺す力が欲しい！」

「ふふ、じゃあ、あげる」

そう言い闇は手から闇を出し、ラウラにぶつけた。

「さあ、その闇を解放しろ！」

「ああああああああああああああああああ」

すると、ラウラが闇に飲み込まれ悪魔の様な姿へと変わった。

「これは？」

「これは私の力の一部よ。対象の心の闇を増幅させて暴走させる。この暴走は誰にも止められない」

「おおおおおおおおおおおお」

「ちっ！シャルル！今すぐ篠ノ之を連れてこのアリーナから出る！」

「でも、一夏は！」

「俺はあいつを倒さなきゃならない」

「分かった。でも絶対に帰ってきてね」

「ああ。約束だ！」

そう言い一夏は暴走しているラウラに、シャルルは箒を背負ってアリーナから出て行った。

「あゝあ。逃げちゃった。」

「さあ、これでゆつくりとできる・・・うお！」

暴走したラウラが一夏へと剣を振り下ろしてきた。

「一夏さん！」

「どうした？」

「今、あの人は闇によって暴走しています。それを止める方法はただ一つ」

「どうすればいい？」

「闇と同じように光をぶつければいいのです」

「分かった」

「ふゝ。さてと。やるか」

「ん、どうしたの？もしかして降参？」

「いいや。あいつを止めるんだよ」

「言っただでしょ。それは無理だつて」

「無理じゃねえよ。この世に絶対なんてないんだよ！」

すると一夏の周りに光が溢れて来た。

「これは？」

「それをぶつけて下さい！」

「分かった。なあ、お前確か、力が欲しいんだっけ？」

ならその程度の力を貰ったくらいで暴走してんじゃねえよ！」

一夏は光を球状にしラウラへとぶつけた。

「がああああああああ」

ラウラのISが解除され、倒れた。

「闇が消えた？」

「簡単な話だ。お前のやり方を真似ただけだよ。」

「だが、一度見ただけでそれを自分の物に出来るものなの？」

「俺は天才だからな」

「・・・貴方、名前は？」

「俺は織斑一夏だ。」

「そうか、覚えておく。今日のところはこの辺で、引き上げるとするわ」

「待て！」

闇が発行体となってアリーナから出て行った。

「織斑君！侵入者は？」

「帰りましたよ。」

「へ？帰った？」

「ええ」

ラウラ side

「ん？ここは。」

「目が覚めたか」

「お前は・・・」

「ここは保健室だ。目立った外傷は無いが2・3日は全身に痛みが、残るが、まあ我慢しろ」

「なぜ、貴様はあそこまで強い？」

「悪いが俺はお前が思っているほど強くないさ」

「しかし、現に貴様は私に勝ったではないか」

「お前はなぜ、強くなりたいと思う。」

「私は・・・」

「理由が無いのならこれから探していけば良い。

ラウラ。人生は長いからな」

「織斑・・・」

「一夏でいい」

「そうか。一夏、貴様にはあるのか？理由が」

「まだ俺にも無い。だから、これから探していくさ」

「そうか」

「ああ。じゃあな。ラウラ」

夕方~~~~~

一夏の部屋~~~~

コンコン。

「ん？誰だろう？は〜い」

「あ！二人ともいましたか。」

「どうしたんですか？先生。」

「はい！実は今日から大浴場が使えるようになりました！」

「「え？」」

「曜日毎に使える日を決めたんです。さあさあ、二人とも行つてきてください」

大浴場〜〜

「どうする？シャルロット。お前から入るか？」

「いや、いいよ。一夏から入りなよ」

「そうか、なら先に入らせてもらっ

「うん。ごゆっくり」

「ふ〜。いい湯だな」

ガラガラ

「は？」

そこにはバスタオルで体を隠し、顔を赤くしたシャルロットがいた。

「い、一夏入ってもいいかな？」
「何だ。シャルロットか。ああ、いいぞ」

「ねえ、一夏。」

「ん？何だ？」

「僕ね、明日みんなに言おうと思うんだ。」

「！そうか。お前の好きなようにすればいい」

「うん。ありがとう一夏」

「何がだ？」

「一夏のお陰で僕は自由になったんだよ？
そのお礼だよ。」

「俺は何もしていない。決めたのはお前だ。」

「それでもだよ」

「そうか。どういたしまして」

「ふふ。先にあがるね」

「ああ」

そう言いシャルロットは大浴場から出て行った。

翌日~~~~~

「はあ、皆さん、おはようございます。」

その姿は疲れ果てていた。

「皆さんに転校生を紹介します。」

「え？また転校生？」

ガラガラ。

「おはようございます。シャルロット・デュノアです。よろしくお願ひします」

「え」と、デュノア君はデュノアさんでした。は、また部屋割り考えないと……。」

「「「「え？女の子だったの！」「」「」」

おっしゃる通りです。

「では、授業を始めます。は、ため息の多い山田先生であった。」

屋上~~~~

「もしもし？」

「やあやあ〜 篝ちゃんお久々の金平糖〜」

「実は……」

「うんうん。皆まで言うな。欲しいんでしょ。

ちや〜んと準備してあるよ。篝ちゃんのための篝ちゃんにしか、
使えない、白とは対をなす赤色が……

その名は……紅椿」

第17話 楯無と想い

これは、ある恋する少女の物語である。

トーナメントから3日後――

「ね、ねえ一夏」

「ん？どうした？楯無」

今俺は部屋で楯無と二人っきりでダラダラしていた。

シャルロットが女の子と判明し部屋割りが変えられた。

俺にとっては最高のシチュエーション、ゲフンゲフン。もとい元の、部屋割りに戻ったのである。

「えっと。その」

「ん？トイレか？」

「バ、バカ！違うわよ！その、今日暇だし買い物にいかないかなあ
ゝって

思って、どうかな？」

「つ、つまり、それはデートか？」

「う、うん」

二人して顔を赤くして俯いてしまった。

両想いなのに気付かないとは鈍感である。

ちなみに作者はそういう経験はない。

「じゃ、じゃあ、行くか？」

「うん！行く！行く！絶対に行く！」

「お、おう。じゃあ門のところ待ってるから」

「うん」

そう言い一夏はそそくさと行ってしまった。

数分後――

「うーどうしよう。どの服きていこうかなーこれもいいけど、これも良いし、

あーもう決められない！」

既に部屋はベッドの上も含めて服だらけである。

「あ！そうだ！こんなときこそ、彼女たちの出番だわ！」

そう言い楯無は携帯を取り出し誰かに電話し始めた。

5分後――

「やつほー！たっちゃん呼んだー？」

「失礼します」

「おじゃーましまーす」

上から順に薰子、虚、本音である。

「うわ！どったの？たっちゃん。こんなに服を出して」

「もしかして、どこかに出かけられるのですか？」

「うん、まあ・・・」

「もしかして、おりむーとデートですか？」

「！！！！」

湯気が出るくらい顔を赤くしてしまった。

「むむ！それは本当なのかな？ たっちゃん。」

「うん。まあ」

「では会長は好きなのですか？」

「べ！別に一夏の事なんかす、好きじゃないもん！」

「会長、わたしは誰も織斑君のこととは言ってませんが」

「！！うう」

「うわ！ たっちゃん顔真っ赤！でもこれは良い取材材料ね。後で話を聞かせてもらおうよ。 たっちゃん」

「それよりも服のこゝとだゝよ」

「それもそうね。じゃあたっちゃん動かないでよ」

「う、うん」

数分後~~~~~

「完成だわ！」

「ほえ〜か〜わ〜い〜いですよ。会長〜」

「これで織斑君も多少は気にするでしょう」

「そうかな？」

IS学園、校門前

「はあ、暑いなあ」

すると・・・

「お、おまたせ／＼／＼一夏」

「遅かったな。たてな・・・」

「どうかな？」

「・・・」

楯無の服装を見て一夏は固まってしまった。

「似合わないかな？」

「い、いや！めちゃくちゃ可愛い！可愛すぎて言葉も出ないくらい、
見とれていただけだから！」

「本当？」

「ああ、本当だ！」

「ふふ、そうか、よかった」

「じゃあ、行くか？」

「うん！」

「今日はどこに行くの？」

「ん？今日は今度行く、臨海学校の水着を買いに行つて、そこで
昼飯でも食べようかなって思ってるんだが？」

「あ！そうか。もうすぐ臨海学校だったね」

1年生は夏休み前に臨海学校に行くことになっている。
ちなみに2泊3日。

デパート内

「うわ、結構込んでんな。」

「そ、そうだね」

「どうしよゝ薰子から言われたあれを実行するか、しないか。うん」

幸せな悩みである。

「えゝい。ままよ」

「そう言い、楯無は一夏の手をとった。」

「た、楯無？」

「何？一夏？」

「何って、お前」

「さ！早くいこ！」

「お、おい！」

「一夏の顔は言葉とは裏腹に幸せそうな顔だったと言う」

「これなんてどう？一夏？」

「ん、そうだな。これにするか」

「分かった。じゃあ会計してくるね！」

「ああ悪い。頼む」

「そう言い楯無はレジへと走って行った。」

「はあゝ何で楯無は俺みたいな奴と一緒にいてくれるんだ？俺と一緒にいてもあいつには迷惑しかかけないのに。」

「するとそこへ・・・」

「ちよつと、その男子」

「出たゝ勘違い野郎」

「白式、そう言うなら勘違いブスだろ」

「はは！確かに」

「ちよつと！聞してるの！」

「はあゝ何だよ。何か用か？」

「その水着片付けといて」

ISと言つものが世に出てから男尊女卑から女尊男卑に変わり、
こういうことなどよくあることなのだ。

「嫌だ。自分でしろよ」

「何？あんた、立場分かつてんの？」

「悪いが俺はあんたの言う事を聞く義理はねえよ。ばか」

「あつそう。じゃあ仕方ないわね」

そう言い店員は警備員を呼ぼうとするが、

「すみません」

「ん？あんたの男？寝くらいしときなさいよね」

そう言つと立ち去つて行つた。

「ごめんね、一夏」

「いやいいよ。うざい勘違いブスがどっか行つてくれたし」

「ふふ。それはないでしょ。まあ確かにあれはないけどね」

「確かに」

「行こ！一夏」

「ああ」

そう言い二人はまた手をつなぎ出て行つた。

夕方

「あ！見て一夏」

「ん、あれは俺たちが初めて会った場所か」

そこは楯無と一夏が出会い、そして別れた公園であった。

「一回行ってみようよ！」

「そうだな」

「あゝ懐かしいゝ何も変わってないな」

「そうだな・・・・・・・・なあ楯無」

「ん？何ゝ？」

「何でお前は俺と一緒にいてくれるんだ？」

「え？」

一夏は疑問に思っていたことを楯無にぶつけた。

「正直、俺はまだ学園の全生徒から認められてるわけじゃない。

実際、お前前に何であんな奴と一緒にいるのって聞かれてたろ？」

「聞いていたの？」

「ああ、偶然な。それで、何でいてくれるんだ？」

「・・・・・・・・・・好きだから」

「え？」

「私は一夏が好きだから隣にいるんだよ?」

「え?ちよつと待て。その好きって言うのは友達としてだよな?」

「うっん。違うよ。私は一夏に恋しているんだよ?」

初めて会ったときからずっと今まで」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「別に今、返事をして、とは言わないから臨海学校から帰って来たぐらいに返事をして?」

「分かった」

「一夏、もう一度言うね。」

私、更識楯無は織斑一夏の事が大好きです」

「楯無、俺は・・・・・・・・・・」

「その後の言葉は帰ってきてから言うてね!待ってるから!」
そう言い楯無は走って行った。

ようやく、想いを告げた少女。しかし、過去が邪魔をして、己の想いを告げられない少年。

果たして、この恋は実るのか、否か。

それを決めるのは何者でもない少年である。

番外編

姉弟が姉弟ではなくなった日

これはある姉弟の絆が壊れた日の話である。

一夏が学校で授業を受けていた時のこと……

「はい。じゃあこの問題解ける人はいるかな？」

「はい！」

「はい！織斑君！」

「2548です」

「凄い！よくできたね！何でこうなるかと言うと……」

この時の一夏はまだ純粋で楽しく生活していた。

休み時間――

「あいつうざくねえ？」

「そうだよな。この前のあれ、あいつがちくつたらしいぞ」

「まじかよ！」

「それに、お母さんから聞いたんだけどあいつ、やばいらしいぜ」

「は？どういう意味だよ？」

「あいつ、子供の癖に大人よりも頭いいらしいぜ」

「まじかよ！化け物じゃん！」

「なあ？いい考えがあるんだけど」

この頃から一夏はあまり他人とは話さないでいた。

たとえ、休憩中であっても。

話すと言ってもあいさつくらいである。

それでもまだ、かえしてくれる人がいた。

今日という日まで……

翌日

「おはよう、皆！」

「……………」

誰も一夏の挨拶に反応しなかった。

「どうしたんだろう？」

不思議に思いながらも一夏は座席へと向かうが……

「え？なにこれ？」

一夏の机は落書きだらけであった。

「死んでしまえ！・消える化け物」などひどいものだった。

「誰だよ！こんな事やったの！」

一夏は周りに叫ぶが、周りは一切反応しなかった。

「何で？何で、こんなことされるの？」

結局その後担任が来て緊急にクラス会が開かれて、一応は解決したかに見えたが、

ここからが地獄の始まりだった。

さらに翌日

何度も友達に話しかけるが一切口を聞いてもらえなかった。

「何で、みんな僕を無視するの？」

すると、「おい」

後ろを振り向くと……

「え？」

何が起こったのか分からなかった。

殴られたと気付いたのは頬に痛みを感じてからだった。

「何で？」

「お前、うざいんだよ」

「そつだ、そつだ！怪物はこっちに来るなよ！帰ってしまえ！」

「何で？僕は怪物なんかじゃないよ？」

「うるせえんだよ！」

そう言い何度も一夏の体を蹴り続けた。大勢の人間が・・・

「い、痛い！やめてよ！」

「うるせえ！怪物は正義の味方に倒されるんだよ！」

「おい！先生がそこまで来てるぞ！」

「分かった。おい、この事言っなよ。言ったらもつとしてやるからな」

一夏は泣きじゃくりながら頷いた。

休み時間

「ふうゝ終わった。トイレ行こつと」

一夏が教室から出て行くのを確認すると、数人の男子が教科書を取り出し・・・

「どうする？これ？」

「破ろっぜ！」

「あ！いいね」

ビリビリ。

一夏の教科書を躊躇いもなく破りだした。

それを見ていた周りの生徒は・・・

「ねえ、最近織斑君、うざくない？」

「あ、それ分かる」

周りも同じく一夏をいじめていた。

そして、一夏が帰ってくると・・・

「何してんだよ！」

「ん？怪物が使うものを破いてんだけど？」

「てめえ！」

胸倉を掴むが・・・

「こら！織斑！何をしている！」

「助けて！先生！織斑君が急に殴って来たんです！」

「何？織斑！ちよつと来い！」

「な！違います、先生！こいつらが俺の教科書を破ったんです
そう言い後ろを向くが・・・

「あれ？無い」

「言い逃れはよせ！織斑！職員室まで来い！」

「申し訳ありませんでした！」

そこには先生たちに頭を下げている千冬がいた。

「今回はけが人も出ずに済みましたが、くれぐれも気をつけさせて
下さい」

「はい、申し訳ありませんでした」

「一夏。何故あんなことをしたんだ？」

「違うんだよ。お姉ちゃん、あいつらが僕の教科書を破ったんだ」

「そうか。」

「本当だよ！」

「ああ、分かっている。お前はそんな事をする奴じゃないさ」

「お姉ちゃん」

「帰ろう。一夏」

「うん」

それから一夏に対するいじめはさらにエスカレートしていった。幼馴染は掛け合ってくれなかった。さらに、クラスに収まらず、他クラス、

他学年の生徒にまで、いじめられていた。

しかし、一夏は耐えていた。千冬の約束のために・・・

しかし、ある日のこと・・・

「いい加減にしろよ。てめえら！ぶっ殺してやる！」

遂に一夏の怒りが爆発した。

「ひい！た、助けて！」

「うつせえ！」

「ぎゃあ！」

「おらおら、どうした今までの勢いは何だっただんだ？」

一夏はいじめていた奴らを片っ端から殴り飛ばしていった。

「こら！やめなさい！織斑君！」

「うつせえ！てめえらもあいつらと同じだ！ぶっ殺してやる！」

遂に警備員まで呼ぶ事態にまでなってしまう、当然千冬が呼ばれた。

「あなたの弟のせいでうちの子がケガしたじゃないの！」

どう責任取るのよー！」

「申し訳ありません！」

「謝罪だけで済むと思ったら大間違いよ！」

一時は裁判ごとにまで発展しかけたが、ケガが軽傷だということで裁判にまで行くことはなかった。しかし……

自宅

「一夏、何故あんな事をしたんだ？」

「違うんだ！お姉ちゃん、あいつらが僕をいじめてたんだ！」

「一夏、そろそろ本当の事を言うんだ」

「お、お姉ちゃん？」

「一夏、さつき先生が言っていただろう。そんな事は無かったんだ。いい加減にお姉ちゃんに……」

「もう良いよ！！」

「！！！！」

一夏が怒るところを初めて見た千冬は止まってしまった。

「い、一夏？」

「結局はお姉ちゃんもあいつらと一緒にだったんだ！」

僕の言う事なんか信じないんだ！」

「ち、違う、一夏、私はただ……」

「もう良い！所詮あんたから見た俺はそんなもんだったんだ！」

「一夏、私は、」

「俺にもう関わんな！」

そう言い一夏は部屋に戻ってしまった。

「い、一夏……」

その後、部屋に響いたものは千冬のすすり泣く声だけであった。

この世界で最も失くしてはいけない物は何だろうか？
それは人との絆なのかもしれない。

第18話 さやと答え

臨海学校当日

「はい。皆さん、バスに乗りましたか？」

「せんせーい。おりむーがいませーん」

「ああ、織斑君は諸事情で遅れてくるそうですから大丈夫ですよ」

「そろそろバスを出しますがよろしいでしょうか？」

「はい。よろしく願います」

バスは旅館へと出発した。

一夏 side

俺は今、ある所に向かっていた。

「ふー何年ぶりだ？ここに来るのは……」

一夏がいる場所、それは墓地だった。

花を持つてある人物の墓へと進んで行った。

「久しぶりだな。暇だったろ？さや」

墓には桜木さやと書いてあった。

「ここが今日から3日間お世話になる花月荘だ。くれぐれも迷惑は、
かけないように」

「「「「よろしく願います!!」「」」」

「ふふ、元気がよろしいようで。私はここの女将です。
何か分からなければ聞いて下さいね」

「あ!、おりゝむゝだ。おは、おは」

「おはよう。本音」

「あなたは？」

「申し遅れました。織斑一夏と申します。3日間よろしく願いい
たします」

「ふふ。礼儀正しいですね」

「このくらい常識です」

そう言い荷物を置きに旅館内に入っていった。

「あいつのせいで浴場分けが難しくなって申し訳ありません。」

「いえいえ」

「う・み・だーーーーー」

「はしやぎすぎよ。あんだ。ねえセシリア？」

「いいではありませんか」

「そうそう」

するとそこへ・・・

「わゝお。おりむゝ鍛えてるねゝ」

「まあな。男だからな」

「おおゝ贅肉が全然ないねゝ」

あおのトーナメントの後一夏を見直したのか、女子とはうちとけていた。

その中には謝罪しにきた奴がいるほどである。

まあ、相変わらずの奴もいるが・・・

「織斑君！向こうでビーチバレーしようよ！」

「ああ良いぜ」

「いゝちか」

「ん？シャルロットとラウラか？お前らもするか？」

「うむ。たまにはいいかもしれんな！」

「ラウラがやるなら僕もしよつと」

「じゃあ始めるぞ！」

「」「」「」「」「」

食事会場ゝ

「くゝ鼻がゝ」

「馬鹿！本ワサビをそのまま食う奴がいるか！」

「だつて」

「ほら、これ飲め。水だから」

「ありがとう」

こんな事もあったりなかったり・・・

「あれ？おりむゝこんなところで何してるの？」

「本音か。ちよつとな」

「悩み事？」

「まあ、そんなとこだ」

「もしかしてお嬢様関連？」

「なぜ、分かった？」

「なんとなく」

「この事は誰にも言わないと約束してくれるか？」

「うん」

「分かった。あれは俺が中学二年の時だ・・・」

今から二年前、一夏が中学二年の時

俺はこの時荒れていたんだ。学校にもたまにしか行かずに毎日、そこらの不良とのケンカ三昧だった。

そして、俺がたまに学校に行くといつもあいつが近寄って来た。

「おはよう！織斑君！」

「・・・・・・・・」

「無視？無視なの？」

「何だよ？うるさいぞ」

「やっとしやべってくれた」

そいつの名前は桜木さや。

こいつは全員俺を避けているにも関わらず俺にかかわろうとしてきた。

毎日、毎日うざいくらいに・・・

そのうちに俺はあいつに心を許していた。

毎日、一緒に授業をさぼったり、しゃべったりして笑い合ってたんだ。

俺は幸せだった。

やっと思いたいものが手に入ったような感じだった。

でも、幸せにはなれないのが俺らしい。

それはさやと遊んだ帰り道・・・

「あゝ楽しかった！一夏は？」

「ん？俺も楽しかった」

「ふふ。そっかよかった。よし、あの信号まで競争だ」

「おい、こけるなよ。どじさや」

「むうゝどじじゃないもん！」

さやが信号を渡ろうとした時・・・

「さや！」

「え？」

「さやーーーーー」

さやは車にひかれた。

原因は運転手の飲酒運転だったそうだ。

「さや！さや！しっかりしろ！今、救急車呼ぶから！」

そう言い俺は携帯を取ろうとしたが・・・

「だ・・・め」

「さや？」

「あ・・・たしは・・・もう・・・だ・・・め・・・だから」

「そんな事ない！大丈夫だ！」

「うつん。あ・・・なた・・・はも・・・う、わ・・・かって・・・る、げ
ほっ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

言い返せなかった。

「わ・・・た・・・しは、た・・・のし・・・かった。いち・・・かは？」

「ああ、俺も楽しかった！だからもうしゃべるな！頼むから・・・」

「あ・・・のね。わ・・・たし、いち・・・かのこ・・・とす・・・きだよ」

「さや？おい、さや！しっかりしろよ！さやーーーーー」

「さやは俺のせいで死んだんだ。だから誰かを幸せになんて俺には無理なんだ」

「おりむゝそれはちよつと違うと思うよ」

「え？」

「確かにさやさんはおりむゝの前で死んだけどそれは、

「あなたが殺したわけじゃない」

「でも……」

「だったら一夏が守ればいい」

「え？」

いつものゆつくりとした本音ではなかった。

「あなたの傍にいて傷つくんだったら一夏がその人を守ればいい。
一夏はお嬢様の事どう思ってるの？」

「俺は……楯無が好きだ。」

「だったらもう答えは出ているよ」

「答えが？」

「そう。でもそれを見つけるのはあなたの仕事。
私の仕事じゃない。よく考えてみて」

そう言い本音は自室へと戻って行った。

「俺の答えは……」

少年は答えを見つけた時、真の強さと守るべきものを手にいれ、
真の戦士へと変わりこの世界に变革を与える。

これが意味するものは一体何なのか？

それは今の時点では誰にも分かるはずはない。

例えば神が存在しているようにも・・・

第18話 さやと答え（後書き）

皆さん、こんにちは〜ケンです。

お気に入り件数35件！ありがとうございます！

感謝感激です！これからもがんばっていきますのでよろしく願いします。

如何でしたか？オリキャラが一人出てきましたが特に物語に、影響は及ぼしませんが一夏には多大な影響を与えます。

それでは、また次回〜さよなら〜

第19話 憎しみと助け

千冬side

「失礼します」

「どうぞ」

今、千冬は部屋に山田先生を呼んでいた。

「どうしましたか？」

「ああ、前に言っていた事を言おうと思ってな」

「あれですか」

「あれは一夏が小学生ぐらいの時だ……」

<この話は番外編でやっていますのでカット致します>

「そんな事が……」

「ああ、私はあいつを信じてやる事が出来なかった」

「だから、彼はあんなにも貴方の事を拒絶していたんですか……」
夜は静かに更けていく。

翌日

「ね、眠れなかった」

結局、昨日本音に言われた答えというものを考えていたら、
一睡もできなかった。

「答えて何なんだよ？」

「おはようおりむ」

「ああ、おはよう本音」

「今日は大変だね、一日」

「まあな」

二日目の今日は午前中から夜まで各種装備試験運用とデータ取りが
1日中あるのだ。

特に専用機持ちは大量だから大変である。

「まあ、俺は手伝いだがな」
「そういえゝば、おりむゝはなかったんだっけ？」
「ああ、白式はこれ以上はいらないうって言うてるからな」
白式は雪片二型で拡張領域がマックスなので後付装備が実質存在しないのだ。

「おりむゝはまるで白式を人間みたいに思ってるんだねゝ」

「俺にとって白式は俺の家族同然だからな」

「ふゝん」

「全員集まったな。では、これより準備にかかれ」

「……はい」

「相変わらず軍隊並のチームワークだなゝ」

「ああ、それと篠ノ之はこっちに來い」

「はい」

「今日からお前は専用機……」

「ちーーーーーちゃんーーーーーん」

後ろの砂浜から物凄い勢いで砂ぼこりがこっちへ近づいてきた。

「……束」

「やつほー。ちーちゃん久し振り。さあ愛を確かめーぐぴゃー！」

「うるさいぞ。束。それとここは関係者以外立ち入り禁止だ」

その人物はISの実の生みの親である天才、篠ノ之束だった

「あいもかわらずのアイアンクローだねゝそれよりも……」

そう言う束は急に後ろを向き、そして……

「篝ちゃゝん」

思いっきり抱きついた。

バキッ！

「姉さん、殴りますよ？」

「うゝ既に殴ったゝ」

そう言うもどこか二人は嬉しそうだった。

「それと・・・いつくーん！」

「お久しぶりです。束さん」

「やあやあ、久しぶりだね。大きくなったかな？」

「さあ？」

「そんな事よりも箒ちゃん！贈りものだよ」

「そう言いスイッチを押すと何かが落ちてきた。

「じゃじゃーん。これが今、存在するISの中で最強のIS。

第4世代機、紅椿だよ」

「これが・・・」

そこには全身赤色のISがあつた。

「さあ、箒ちゃん。フィッシングとパーソナライズを済ましちや
おうか？」

「分かりました」

そう言い箒は紅椿に乗り込んだ。

「よし。終了！流石、私だねーもう終わっちゃった。さあ！行つて
みよう。箒ちゃん！」

「はい」

するとものすごい勢いで紅椿が飛んで行つた。

「は、速い。あれが第4世代機」

皆は驚いていたが俺は別に驚かなかつた。

「なあ、俺たちの方が速くね？」

「当たり前だのクッカードよー夏。」

「ひとまず武装を説明するねー。まず右のが雨月、
あまつぎ

左が空裂の二刀流だよ。雨月は打突に合わせて刃部分からエネルギー波を放出、

空裂は斬撃に合わせて帯状の攻性エネルギーを放出するよう試しにやってみる？」

「はい。織斑来い！」

「何で？めんどくさい」

「いいから来い」

「む、あいつ立場が分かっているようだな」

「ラウラが展開をしようとするが・・・」

「ちよつたんま」

「だが！」

「良いの。俺がやるから」

「そう言い一夏は雪片式型と翼だけを部分展開した。」

「そんな物で勝てると思っているのか？」

「雑魚に本気は出さないんだよ。俺は」

「織斑」

二人は戦闘を開始してしまった。

「織斑先生！早く二人を止めないと！」

「構わんよ。山田君。篠ノ之に一夏の強さを知ってもらったいい機会だ」

「そつえば、ちーちゃん。いっくんとは仲直りしたの？」

「・・・」

「まだ何だね」

「ああ」

千冬は悲しそうに空を見上げた

「いつまで、避けるつもりだ、織斑！そんな事では私には勝てんぞ！」

「え？何？勝つていいのこれ？」

「何だと！」

「いやゝだつてさ最強のISが最弱に負けるところを見せたらダメだろ」

「織斑！」

箒は激昂し一夏に切りかかるが・・・

「でも、もう飽きたからいいや」

「な！消えー」

ズバン！

紅椿の装甲が無残に粉碎された。

「な？言っただろ？雑魚だつて」

「お疲れ様。一夏」

「流石だな。一夏」

「ん？まあ、あれでも威力は加減した方だから修理も長くはかからないだろ」

その時・・・

「誰か！助けて！」

「！！！」

「どうしたの？一夏？」

「いや、何でもない」

「白式今のは？」

「うん。空耳じゃないよ。多分この子は暴走してるね。それも人為的に」

「それに、この子から闇の力を感じます。恐らくあいつの仕業かと」
確かに待機形態が光り輝いていた。

「へそつか、分かった」

すると・・・

「織斑先生！大変です」

「どうしましたか？」

「これを！」

「！全員注目！、試験稼働は中止だ！すぐに旅館に戻れ！」

「え？何で？」

「早くしろ！処罰を与えられたいのか！」

「そう言われるとすぐに直して帰ってしまった。」

「専用機持ちはずぐに集合！篠ノ之もだ！」

「はい！」

「状況を説明する。二時間前にハワイ沖で試験稼働中だった軍用I

S・

シルバリオ・ゴスペルが暴走した」

「「「「「！！！！」」」」」

「衛星からの画像によるとこっちに向かっているという。到達予想時間は今から約50分後だ。」

「上からの命令により、我々がこの事態を収拾することになった。」

「今、シルバリオ・ゴスペルは超音速飛行中だ。」

「アプローチは恐らく一回だろう。意見があるものは拳手をしろ！」

「そのISの詳細なスペックデータを要求します。」

「分かった。しかしこれは国家最重要機密だ。漏洩した場合、

委員会による裁判と最低二年の監視がつけられる」

「わかりました」

「これが、スペック・・・無い！」

「え？」

「これの事か？」

「貴様！ふざけてるのか！」

「うるさい。黙ってる。年増。ひとまずは雑魚だな」

「一夏から見ればでしょ！僕らからは強いよ」

「それよりもどうする？」

「決まってるだろ。俺が倒す。それだけだ」

「了解」

「あ、ついでに周りの事も考えて二人は俺から5km離れた場所です
待機。」

何かあれば言ってくれ」

「つまり、我々は周辺海域の監視という訳か。」

「ああ、そうだ。頼むぞ」

「了解」

「じゃあ、各々武装のチェックとエネルギー補充、30分後に砂浜
に、

集合。」

「待て！貴様ら！勝手に決めるな！作戦は私が・・・」

「織斑先生の作戦より一夏の作戦の方が単純で良いと思いますが？」

「私も同感です」

「貴様ら！いい加減にしろ！作戦は紅椿と白式で行く。決定事項だ
！」

「あつそ。勝手にすれば？別に邪魔さえしなければどうでも良い」

「まあいい。織斑と篠ノ之は30分後に海岸に集合しろ。いいな！」

「はい！」

「・・・」

「さうて箒ちゃん紅椿の整備を始めるよ」

「お願いします」

「そんな怖い顔しないで美人が台無しだよ？」

「すみません」

「そんなにいつくんが憎いの？」

「ええ。あいつは何も苦労せずに力を手に入れてきた。

昔も今もずっと。私はそんなあいつを殺したい！」

「箒ちゃん……」

束は悲しそうにメンテを再開した。

第20話 再会と仇

任務開始時間！

「よし、集まったな。ではこれより任務を開始する！」

「来い！紅椿！」

「はあ！白式！」

箒を赤いエネルギーが包みこみ紅椿が現れた。

俺も鞘を抜き白式を呼び出した。

「さつさと私に乗れ！」

「別に俺だけで良いのに……」

「さつさとしろ！」

「へいへい」

任務内容は紅椿が白式を乗せて目標まで行くというものだった。

「織斑、篠ノ之聞こえるか？」

「はい」

オープンチャンネルから千冬の声が聞こえた。

「今回の作戦の要は一撃必殺だ。短時間で済ませ。いいな？」

「はい」

正直俺は聞かずに二人にプライベートチャンネルで話していた。

「悪いな。せっかく準備してくれたのに」

「別にいいよ。頑張っただけ」

「一夏、おそらく篠ノ之は浮かれてるぞ。気をつけてくれ」

「ああ。了解した」

「では！始め！」

作戦が始まった。

物凄い速度で紅椿が動き始めた。

そして、数分後……

「あれか！」

見えたのは真っ白なISだった。

「目標まで残り8秒・・・」

「もういい、結構だ」

そう言い俺は瞬時加速で奴に近づいた。

「おい、貴様！命令違反だぞ！」

「一夏！目標まで残り、3・2・1」

「消えろ」

俺はゴスペルに零月を喰らわせた。

「L a a a a a a a a a a a a a a a a」

甲高い声が聞こえた。

「流石だね」

「まだだ」

ゴスペルはようやく戦闘モードに切り替わり翼が生えた。

「やつとか。さあ！始めようぜ、俺たちの殺し合いを！」

第side

「何なんだ？この戦いは目で追い切れない」

二人は高速で移動しながら、剣で切り、エネルギー弾丸を何発も撃っていた。

「なぜ、あんな奴があそこまでの力を持っているんだ！」

第は二人に近づいて行った。

「弱いな、こんなものか」

既にゴスペルの装甲は所々碎けて、翼もボロボロだった。

「終わりにしよう。」

そう言い一夏が雪片を構えると目の前に10枚、壁が現れた。
「ライト！この攻撃に光を混ぜてあいつの闇は払えるか？」

「大丈夫です！」

「了解！」

「喰らえ！」

一夏が放とうとした時・・・

「はああああ」

「な！邪魔だ！どけ！篠ノ之！」

紅椿を纏った筈が間に入ってきた。

「うるさい！こいつは私が倒す！そこで見ている！」

そう言い筈は福音と戦闘を始めてしまった。

「くそが！」

一夏も慌てて追いかける。

「はああああああ」

筈は雨月と空裂で攻撃するがすべて避けられていた。

「くそ！なぜだ！なぜ、当たらない！」

「どけ！篠ノ之！早くしないとパイロットが死ぬぞ！」

「そんな事はどうでもいい！」

「ふざけんじゃねえぞ！」

一夏は筈に叫ぶ。

「力を手に入れて何様のつもりだ！優先すべきは人の命だ！」

「黙れ！私は奴を倒すそれだけだ！」

「てめえ！それでも専用機持ち・・・」

突然一夏がしゃべるのを止めた。

ゆっくりと視線を下ろすとそこにはゴスペルの腕が一夏の腹部を貫いていた。

「て・・・てめえ・・・がはっ！」

ゴスペルは腕を戻し、一夏に向けて特大のエネルギー弾丸を浴びせた。

「があああああああああ」

「くっ！」

辺りに鮮血が舞った。

「ぐ……ま……だ……だ」

一夏はゴスペルへと手を伸ばすがISが解除し、海へと落ちて行った。

福音は戦線を離脱しどこかへ行ってしまった。

「くそ！織斑！」

箒が一夏を追いかけるが……

突然、一夏を光が包みこみ消え去ってしまった。

「な！何だあれは！」

「篠ノ之！命令だ、いったん戻れ」

「はい」

「福音は現在、調査中だ。次の指示があるまで全員待機だ。」

「……はい」

辺りの空気は冷え冷えとしていた。

そこへ……

「おい。篠ノ之」

「なん……ぐあ！」

ラウラが箒の胸倉を掴み壁に押し付けた。

「なぜ！貴様はあの時一夏の邪魔をした！あのまま攻撃が通っていれば、

作戦は何の被害も出さずに済んだんだぞ！答えろ！」

「離せ！」

「ラウラさん！落ち着いて下さい！」

「黙れ！答えろ！篠ノ之！」

「私は……」

「どうせ、専用機を貰って自分が倒して評価をあげようとしてもしたんだろう？」

「……」

「図星か？」

「もういいよ。彼女と話してても時間の無駄だよ。ラウラ」

「シャルロット。しかし……」

「それよりも福音の居場所を見つけるのが先決じゃない？」

「そうだな。すまない」

「良いよ。行こ？」

一夏side

ここはどこだ？

何だか高い所から落ちているような……

ん？落ちている？

まさかと思い目を開けると……

「またかよー……」

バツシャアアアアアアアアアアアア

盛大に海に突撃した。

「お！来た来た。久しぶりー一夏」

「ゲホッ！しよっぺ！久しぶりじゃねえよ。」

そこは初めて白式とライトに会った場所だった。

「で？俺は死んだのかよ？」

「いいや、死んでいませんよ」

「誰だ？お前」

そこには白く輝く甲冑を纏った女性がいた。

「はじめまして、マスター」

「は？いや、だからあんた誰？」

「ここで問題です。誰でしょう？」

「ライト」

そこには3人の少女がいた。

「誰って言われても知らないぞ？」

「ふふ、知ってるよ？一夏は昔からずつつつつつとね」

「昔から？」

「これを見れば分かるでしょう」

そう言い騎士はある剣を出した。それは……

「それって、雪片？」

「はい」

その剣は先代の雪片だった。

「まさか！いやそんなはずは……」

「そのまさかだと思うよ。一夏」

「お前は……白騎士なのか？」

「はい。そうです」

「シャルロット。出たぞ。場所は30キロ離れた沖合だ」

「流石ドイツ軍特殊部隊だね」

「そっちの準備は？」

「勿論、万全だよ」

「では、行くか。」

「了解」

そう言い二人はISを展開し飛び立った。

「それでね、もう一人お客さんがいるんだよ」
「ん？まだいるのか？」
「ええ。どうぞこちらに」
「うん！ありがとう」
その人物は・・・

「さや。」
「久しぶりだね。一夏」
死んださやがそこにいた。

ラウラ side
「覚悟は出来てるか？シャルロット」

「一生分なら」

「ふ、上等！」

ラウラのレールカノンが火を噴いた。

「L a a a a a a a a」

「初段命中！」

「織斑先生！これは明らかに命令違反です！」

「ちっ！こうなるとは思っていたが本当になるとは……」

戦いは始まった。

親友の仇を討つ者。

そして、死んだ親友に会う者

そして、心優しき戦士は自分の涙を仮面に隠し、友の為そして愛する者の為に

剣をとり立ち上がる。全ては誰かの笑顔の為に。

第20話 再会と仇（後書き）

こんにちはケンです。
如何でしたか？今回の話。
それではさよなら

その時……

ドオオオオオオオオオオ

「な、何？」

「まさか、セカンドシフトか！」

福音の翼が4枚から6枚に増え、

壊れていた装甲も全て回復していた。

「La♪」

楽しそうな音を出しながらエネルギー波を海に向けて放った。

「な！海が割れただと！」

「ほんとにあいつ軍用なの？」

圧倒的な破壊力を秘めた兵器へと進化していた。

「く！行くぞシャルロット！」

「もちろん！」

二人は戦場へと行った。

一夏side

「さや」

「久しぶりだね、一夏。二年ぶりかな？」

「あ、ああ」

「どうしたの？一夏らしくないよ？」

「すまない！」

一夏は急に土下座を شدした。

「一夏？」

「俺のせいでお前を死なせてしまった。俺がお前の人生を奪ったんだ！」

「一夏、顔をあげて？」

「さや」

「あなたのせいで私が死んだわけじゃない。一夏に責任はないよ？」

「でも・・・」

「はあくいつまでそうやって現実から自分を切り離すつもりなの？
だから、弱いんだよ。いつまでたっても」

「・・・・・・・・・・」

「言い返せないの？呆れた。そのままじゃ、また失くすよ？大切な
人をいつまでも守れないよ？」

「俺に守る資格なんか・・・」

「ふざけないでよ！」

「！！！！」

「いつまで、そうしてる気なの？あなたは何がしたいの？」

「俺は・・・・・・守りたい」

「聞こえない」

「俺は！守りたい！楯無をこの手で！でも誰かを愛したら弱くなる
気がするんだ。」

「確かに弱くはなるよ、でもそれを恥ずかしがることはない。
だって、それはあなたの本当の弱さじゃないから。」

「さや。俺、見つけたよ。答えを」

「何？」

「俺は守る。楯無を、ラウラを、シャルロットを
俺に少しでも関係があつた人を守る！」

「どうして？」

「みんなの笑顔のためだ！」

「ふふ。それで良いよ。ようやく君は強さを手に入れた。
目的の無いに強さの行きつく先は獣だからね」

徐々にさやの体が薄くなっていく。

「さや」

「そろそろかな。目的も達成したし成仏するね一夏」

「ああ」

「一夏！好きだったよ！」

「ありがとう」

さやは光となって空へと上って行った。

「さや……」

「一夏、そろそろ行かなきゃ。」

「ああ、あいつらが呼んでるからな」

「うん」

「お前らこれから俺と一緒に戦い続けてくれるか？」

「「もちろんです！」」

「じゃあ、行くか？」

「「はい！」」

俺は鞘を抜き空に高く振り上げると、光が集まって来た。

「おおおおおおおおおおおお」

一夏が光に包まれた。

現実――

「ぐふ！」

「ラウラ、大丈夫？」

「これが大丈夫に見えたら眼科をお勧めする」

「はは、そうだね」

二人の装甲はボロボロで動くことすらままならない状況だった。その二人に福音がエネルギー弾をぶつけようとしていた。

その時……

「え？何これ？」

「これは！」

突然、周りの海が光はじめ、上空に光が集合していく。

「何だろう？何だかあたたかい」

「ああ」

そして、光が降り注いだ。

「うわ！」

「眩しい！」

「待たせたな、二人とも」

懐かしい声が聞こえた。

「一夏！」

そこには白式、第二形態、雪羅を纏った一夏がいた。

「織斑先生！」

「こんな事が・・・」

モニターには一夏が映っていた。

「白式、第二形態、雪羅・・・」

そこには全てを浄化する白が立っていた。

「大丈夫なの！一夏？」

「まあな。待ってろ、すぐに終わらせる」

[illegible]

まるで待ちわびていたように福音から闇が放出された。

「な、何だあれは！」

「大丈夫だ。」

そう言い一夏は手に光を集め始め、それをぶつけた。

```

1 a a a a a a a a a a a a a a a a
a a a a a

```

「よく、耐えてくれたな福音。さあ！かかって来い！」

L
a
a
a
a
a
a
a
a
a
a

「さあ、始めようぜ！俺たちの闘いを！」

最後の戦いが始まった。

「凄いとしか言いようがないな」
「うん。」

眼前には音速で動きながら闘いをしている二人がいた。福音はひたすら進化したシルバーベルから弾丸を散弾銃のように放っていた。

それを一夏は新たな武装、雪羅のシールドモードで防ぎつつ、カノンモードと零月でひたすら攻撃していた。

「何だか、一夏楽しそう」

「そうだな」

二人は一瞬たりとも視線を放さず戦いの行く末を見ていた。

「楽しいなあ！福音！」

La

福音も楽しそうな機械音を奏でていた。

そして、戦いはクライマックスへと向かう。

「せいやああああ」

La a a a a a

二人はお互いの全てを出していた。

「福音、そろそろケリをつけないか？時間の無駄だ」

La 

「潔し！行くぞ！」

一夏は翼を羽ばたかせ空高く飛んだ。

福音も全てのエネルギーを集結した特大の物を作った。

「行くぞ！福音！これが最後だ！」

10枚の壁を通過することに輝きを増していく。

L a a a a a a a a a a a a a a a a
 a a a a a a a a a a a a a a a a a a

「おおおおおおおおおおおおおお」

力は均衡していた。

「いつけー、一夏！」

「うおおおお。せいやあああああ」

福音の弾丸を押し切り蹴りが入れた。

「La・aa」

まだ、手を伸ばそうとする福音に一夏は手を取り……

「よく、やった。眠っていいぞ」

「あ・り・が・と・う」

それを最後に機能を停止した。

「一夏！」

「お疲れさん。」

きれいな夕焼けが3人を祝福していた。

「作戦完了、と言いたのですが命令違反なので反省文と事情聴取です」

「え」

一夏も教師には勝てなかったり……

束side

「ふふん。紅椿の稼働率は30パーセントか。上々だね。それに、

」

束の横にはモニターがあり一夏の戦いが記録されていた。

「僅か数ヶ月でセカンドシフト、それに生体再生、まるで、」

「まるで、白騎士の様な。束」

「やあ、ちーちゃん」

「おう」

「ねえ、ちーちゃん」

「何だ？」

「仲直り出来るといいね。」
「本当にできるだろうか？」
「出来るさ。だってちーちゃんだもん」
「はは、意味が分からん」
「ねえ、ちーちゃん？この世界は楽しい？」
「そこそこにな」
「そっか。私はねー」
そこにはもう束はいなかった。

翌日

「「「「ありがとうございました」」」」
「はい。さよなら」
「おりむ」
「本音」
「見つかつた？」
「ああ。おかげさまでな」
「よかつた。じゃあね」
「ん」
そう言い本音はバスに戻って行つた。
一夏も乗ろうとした時、
「あなたが織斑君？」
「あんたは？」

「ナターシャ・フィルス。あの子のパイロットよ」

「そうか。で？何か？」

「ええ、ありがとう」

「そりゃ、どうも。ああ、それと伝言だ」

「誰から？」

「自分で考える。ナターシャ今までありがとう。

また会えたら一緒に空を飛んでくれる？だとさ」

「それって！」

「ふふふ」

一夏はそのままバスに行った。

少年は過去を受け入れ力と守るべきものを手にいれ真の戦士となった。

第21話 決着と真の光（後書き）

こんばんわ〜ケンです〜

眠たいです。如何でしたか？

ひとまず一段落しましたね

ここまでお読みいただきありがとうございます
感想も待ってます

では、さよなら〜

第22話 愛と楯無

IS学園

「ふゝ終わった」

「皆さん、お疲れ様でした。明日はお休みですのでゆっくり休んでくださいね。」

「それと明後日は終業式ですからそれもお忘れなくくださいね」

「「「はい」」」

「お帰り。一夏！」

「ああ、ただいま、楯無。明日、暇か？」

「え？うん。暇だけど、どうかした？」

「明日、遊びに行こうぜ」

「それってデート・・・な訳ないか」

「何言ってるんだ？デートだぞ」

「ふえ？」

「ん？嫌か？」

「全然！いやじゃない！」

「はは。なら良い、じゃ、明日の11時にここ集合で良いか？」

「うん」

翌日

デート当日の日になった。え？時間を飛ばしすぎだって？それは作

者に言え。

「おまたせ。一夏。待った?」

「いや、全然。」

「今日はどこに行くの?」

「遊園地」

「遊園地?」

「そう、家を整理してたら無料券が出てきてさ。それで、期限がちようど今日まで

だったから誘った」

「そっか、ありがとう!」

「着いたぞ。ここだ」

「ふえええ〜すごい!」

「ひとまずこれ見せてくるからちよつと待ってる」

「うん!」

数分後〜

「おまたせ。これを腕に付けとけ。証明書みたいなものだから」

「了解」

「じゃあ、行くか」

「うん!」

「うわ〜すごい!」

「はしゃぎすぎだろ!初めてじゃあるまいし」

「初めてだよ?遊園地きたの」

「へ?」

「私の家、ちよつと違うからこんなところとかは来た事がないんだ」

「そう言えばそうか。よし！」

「だったら楯無。今日は存分に楽しむぞ！」
「うん！」

「じゃあ、まずどこ行きたい？」

「うーん、ジェットコースター！」

「分かった」

だが、失敗だった事を俺は数分後に思うのであった。

「一夏！もう一回行こ！」

「ちょ、ちよつと待ってくれ、うえ、吐きそう」

かれこれ同じものを10回は乗っている。

「じゃあ、次はあれ行こ！」

「ちょ、だから待ってくれ。吐きそう」

「ふゝ楽しかった」

「.....」

既に一夏はヘトヘトだった。

「次はどこに行こうかな」

「じゃあ、お化け屋敷行こうぜ」

「へ？」

「ん？怖いのか？」

「べ、別に怖くないもん！」

「勝った！これで少しは反撃できる」

しかし、これも間違いであった.....

<ここからは音声のみでお楽しみください>

「きゃああああああ」

「ちょ！待った楯無！俺だ！俺だから攻撃しないで」

「悪霊退散」

「ちょ！待て。部分展開するな！俺に向けて撃つなあああ」

「お化けなんか消えて」

「ぎゃああああああああああ」

「はあはあ、怖かった」

「お前の方が怖いわ！」

何とも不運な一夏であった。

「そろそろ、終わりにしないと門限だぞ。楯無」

「え？もうそんな時間？」

「ああ」

「んーじゃあ、最後にあれが乗りたい」

楯無が指さしたものは・・・

「観覧車？」

「うん」

「分かった。行こうか？」

「勿論！」

「それでは、お楽しみください」

従業員さんの明るい声と共に徐々に登り始めた。

「楽しかったか？ 楯無」

「うん！とても楽しかった！ありがとう一夏！」

「お、おう」

楯無の笑顔につい顔を赤くしてしまった。

「そろそろ言うかな」

一夏は臨海学校で見つけた答えを言うことにした。

「楯無」

「ん？何一夏？」

「この前の返事何だが聞いてくれるか？」

「う、うん」

「俺さ今まで怖かったんだ。大切な人が目の前からいなくなるのが。」

「一夏・・・」

「それでこんな目に遭うんだったら二度と大切な人は作らない。

そう決めてたんだ」

「・・・」

楯無は静かに聞いていた。

「でも、それはただ逃げてただけなんだ。あんな悲しい目には遭いたくないって。」

でも、俺は決めた。大切な人が消えないように俺が守っていけばいいって、だから、楯無」

「何？」

不安そうな顔で一夏を見つめる楯無。

「楯無！」

「は、はい！」

「好きだ！初めて会ったときからずっと好きだ！だから、俺と付き合ってくれ！」

「！！！！」

楯無が急に泣き始めた。

「ど、どうしたんだよ！」

「うっん。嬉しくて涙が勝手に・・・」

「返事は？」

「もう。分かってるくせに、私も好きです！付き合ってください！」

「楯無！」

「きゃ！もういきなり抱きつかないでよ」

「ハハ、悪い。嬉しくてな」

二人はいつまでも抱き合っていた。

「ふふ」

「どうしたんだ？楯無？」

「別に。」

「そっか」

二人は手を繋ぎながら幸せそうに歩いていた。

「ふゝただいま」

「ただいま」

「じゃあ、私はお風呂に入ってくるから」

「ああ、またな」

「一夏、幸せそうだね」

「白式か。ああ、幸せだよ」

「ふふ、良い笑顔ではありませんか。ねえライトさん？」

「そうですね」

俺は最高に幸せだった。

数分後

「ふっゝいい湯だった」

「お帰り、楯無」

「うん、ただいま。ねえ一夏？」

「なんだ？」

「髪の毛乾かしてくれないかな？」

「ああ、いいぞ」

「お願い」

そう言い俺は楯無の髪を乾かし始めた。

「サラサラだな。楯無の髪の毛」

「ふふ、ありがと」

「終わったぞ」

「ありがと」

その時、俺は楯無と目が合った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

何かに引き込まれる様に俺は楯無の顔に近づいていった。

「一夏・・・・」

「楯無・・・・」

どんどん近づいていき、そして二人の唇が重なった。

「一夏・・・・」

「楯無・・・・」

二人はその夜何度もキスをした。

第22話 愛と楯無（後書き）

こんにちは〜ケンです。今日で3連休が終わると思うとめっちゃ憂鬱です。それよりも如何でしたか？

遂に一夏と楯無が過ぎました！

これからはイチャイチャの話も挙げて行こうと思いますので、よろしく願います。

それでは、さよなら〜

番外編 姉弟が姉弟ではなくなった日―後日談―

その後の兄弟について語ろう

一夏

一夏はあれから学校でのいじめはなくなったものの誰とも話さないでいた。

「おい、見ろよあいつ」

「また、やってるよ」

まじめだった一夏はそれまでの素行が嘘のように消え、授業は全ての時間で寝る、さらには先生の言う事も全く聞かなかった。

「ちよつと！織斑君！いつまで寝てるの？早く起きなさい！」

「うるさいです。人が寝てる時に起こさないでください」

「そう言う問題ではないの！授業はキチンと起きて受けなさい！」

「小学生の問題なんか解いても暇だし」

それは中学生になっても変わらなかった。

放課後は他校の生徒と喧嘩の毎日。

学校もほとんど登校せず、たまに行ったとしても授業は、

全部、睡眠状態、校外学習も全て休み、修学旅行すら行かなかった。

普通ならば教師も言うだろうが、

一夏は模試では全国トップの成績を取り、定期考査も全教科満点。

この事により教師達は何も言えずにただただ傍観していた。

千冬について」

「ちーちゃーん」

「ああ、束か。おはよう」

「やあ！おはおはー。何かあったのかな？」

「まあ、ちよつとな」

「ならばその悩み私が解決してしんぜよ」

「……」

「ありやりや、これは本当にやばいかもね」

「いつもならば、何か言い返すのだがその日の千冬は何もしてこなかった。」

「ねえ、私に話してみてよ。」

「束、実はな……」

「あのいつくんが学校で問題を起こした？」

「ああ、昨日、先生に呼ばれて行ってみたらそう言われた」

「でも、あのいつくんがそんな事をする筈は……」

「ああ、私も最初はそう思っていた。だが、私は一夏を疑ってしまっただ」

「それで、いつくんは怒って俺に関わるなって怒って姿を見せなくなっただ」

「ああ、部屋にいる事は分かってるんだがいくら呼び掛けても一向に、」

「返事がないんだ。」

「んーだったら私が調べてあげようか？」

「本当か！束！」

「うん、1週間程待ってもらえば情報は集められるよ」

「分かった。頼む束」
「任せなさい」

1週間後

「ちーちゃん」

「束！どうだった？」

「いっくんの言うとおりいじめはあったみたいだね。
それに確かPTAが調べたんだって？」

「ああ、そう言っていた」

「実はいっくんの同級生にPTA会長の息子がいたんだ。
それで自分の地位が危ないとでも、思ったんだろうね。
事実を隠ぺいしていたみたいだよ」

「ほ、本当か！」

「うん、本当だよ」

「そ、そうか・・・」

だが千冬はあまり嬉しそうではなかった。

「どうかしたの？嬉しそうじゃないけど」

「ああ、だがどれだけ真実が分かっても私が一夏を疑ったのには変わりはない」

「馬鹿じゃないの！」

「！！！！！！」

束が怒ったのはこの日が初めてだった。

「た、束？」

「ちーちゃんはそれで良いの？いっくんとまた笑って過ごしたくないの？」

「私は・・・過ごしたい！また、一夏と笑って過ごしたい」

「目が覚めた？ちーちゃん」

「ああ、ありがとう。御蔭で目が覚めた」

「ふふふ、私も出来る事は手伝うよ。」

「ああ、ありがとう束」

「どういたしまして」

千冬は真実を知り、一夏との関係の修復を目指していく。
この行動が後に英雄を生むキッカケになるとは思わずに。

第23話 生徒会と副会長

一夏の部屋にて〜

「う〜ん？朝？ん〜よく寝た〜」

初めましてかしら？私はIS学園生徒会長の更識楯無よ。
隣で寝ているのは誰かって？

え、えっと

私のか、彼氏、きゃー、言っちゃった。

ゴホン、彼は私の彼氏の織斑一夏。

世界で唯一男性でISを動かせる人。

「やっぱりいつ見ても良い寝顔。最高！」

私の日課は朝、一夏より早く起きて一夏の寝顔を拝むこと。

え？そんな毎日見てたら飽きるんじゃないかって？

ちっち、甘いよ。シュークリームよりも甘いわ。

毎日見ても飽きないのが一夏なの！

「にしても、キレイな顔ね〜」

一夏の顔を見ていると昨日の事を思い出すわね

「昨日、キスしたんだよね？」

思い出すだけでも顔が赤くなるわね。

だって！好きな人とのファーストキスだよ？

赤くならない方がおかしいわよ。

ねえ？作者さん。

『え？僕ですか？』

そつよ、あなた以外にだれがいるのよ。

『え〜っと普通は話しかけられないんですけど〜』

関係ないわよ！で？どうなの？

『作者はそう言う経験が皆無なので分からないです』

え〜？高校生ならあるでしょう？

『無いんですよ。あなた達とは違つて』

そう。なら良いわ。じゃあ、さよなら

『え？ちよつと！』

あれ？私、誰と喋つてたんだろ？まあいいか。

「キスしちやおっかな？」

今、一夏は昨日、遅かったのかまだ寝ている。

<ちなみに今の時間は午前9時です>

「良いよね？うん良い。だつて恋人同士なんだから」
顔を徐々に近づかせていく楯無。

後、2cm、1cm、0になりかけた瞬間・・・

「んん！」

後ろから何かに抑えつけられた。

「まさか朝から寝込みを襲われるとは思わかつたよ。楯無」

「い、一夏！いつから起きてたの？」

「ん？寝顔がどうちゃらこうちゃらからかな？」

「最初からじゃない！」

「ん、まあそうだな」

不覚だわ。まさか起きていることに気付かない何て・・・

数分後

「なあ、楯無！いい加減機嫌直せよ」

「ふん！知らないもん！」

楯無が何故か不機嫌になっていた。全く分からない。

こんな時は作者を呼ぶか？

『おい、作者』

『ZZZZZZZZZZ』

『さつさと起きろ！オタク！』

『んぎゃ！何でしょうか？眠いんですけど？』

『ネットのしすぎだ！それよりも楯無の機嫌が悪いんだ。どうにかしてくれ』

『ひとまず、状況説明を』

『ああ、そうだな』

<説明中〜>

『と、言うことなんだが』

『はあ〜一言いいすか？』

『何だ？』

『リア充死ね！自分で考えろ！馬鹿野郎！』

『あ、どっか行っちゃった』

「楯無」

「・・・」

「はあ」

俺は最後の手段を使うことにした。

「ちよっ！一夏！」

最後の手段とは後ろから抱き締めるである。

「い、一夏」

「好きだ」

「！！！！」

「ごめんな？楯無。嫌だったか？」

「違う。だってキスしたのに一夏、恥ずかしそうじゃなかったから・

・

「はあ〜ほら」

そう言い一夏は楯無の手を取り自分の心臓にあてた。

ドクドクドク

「分かるか？さっきのキスからだいぶたつのにまだドキドキしてる
だろ？」

「うん・・・」

「どれだけ楯無とのキスが恥ずかしいか分かったろ？」

「ふふふ、一夏」

「うお！どうしたんだよ」

「ふふふ、別に、少し甘えたくなっただけ？」

「そうか」

それから二人は少しの間抱きしめあっていた。

数分後、

「ねえ、一夏」

「ん、どうした？」

「ちよっと、お願いがあるんだけどいいかな？」

「別に良いが」

「なら少し生徒会室まで来てくれる？」

「分かった」

生徒会室、

「失礼します」

「は、いつて、おりむ」

「ん？本音何でここにいるんだ？」

「だって私も生徒会役員だもん」

「まじで？」

「まじで」

「こら、本音、お客様に失礼でしょ」

「はい」

「初めまして、私は・・・」

「布仏家、長女の布仏虚のほとけつつほ、だろ？」

「どうして、それを！」

「もう一夏つたら驚かしちゃダメでしょ」

「別に俺はそんな気は・・・」

「あの〳会長この方は？」

「ああ、この人は私の彼氏の一夏よ」

「はあ、彼氏ですか。でもどうして私たちのことを？」

「禁則事項よ？」

「で？楯無、用件てのは何なんだ？」

「ああ、そうだったわね。一夏。生徒会に入って頂戴」

「・・・一応聞くが何故だ？」

「それはねみんなからの苦情がありすぎるのよ」

「苦情？」

「本来、学園の生徒はクラブに入っていますが今のところ

織斑君は無所属なので、いい加減にどこに所属しているのかをハッ

キリ、

しろと言つ苦情が多いのです」

「はあ」

「だからお願い！一夏。生徒会に入って頂戴」

「いいぞ」

「本当に？」

「ああ」

「ありがと！一夏！」

「お、おい、いきなり抱きつくな！」

「嫌なの？」

「嫌じゃない」

「ふふ、ならいいじゃない」

「本音」

「な～に？お姉ちゃん？」

「お嬢様、変ったわね」

「そうだね～おりむ～のお蔭かな？」

「そうね」

「ということで一夏は副会長に任命するわ」

「了解」

「じゃあ～任命パーティーでもしましょうよ」

「そうね。虚ちゃん。ケーキと紅茶をお願い」

「分かりました」

「ってことで一夏、副会長就任おめでと～かんぱ～い」

「「かんぱ～い！」」

「ふ～楽しかった」

「騒ぎすぎだろ。もう夕方だぞ？」

「一夏は楽しくなかった？」

「・・・久々にあそこまで笑ったよ」

「ふふ、そうでしょ」

「なあ、楯無」

「ん？何？いち、んん！」

「楯無・・・」

「どうしたの？急に」

「俺から離れないでくれ」

「へ？」

「もうこれ以上大切な人が離れていくのはコリゴリだ」

「一夏……」

「ずっと、一緒にいてくれるか？」

「勿論！ずっと一緒だよ！一夏」

「ありがとう、楯無」

もう一度二人はキスをした。

永遠の誓いを立てるようにずっと

<余談>

その現場を新聞部の薫子かおるこに写真を撮られ、翌日に掲示板に張り出され恥ずかしい、

一日を過ごしたとか過ごさなかったりとか

第23話 生徒会と副会長（後書き）

こんばんわ〜ケンです。

今日は遅めの更新ですみません。

今回はラウラとシャルロットの話をします。

夏休み編は次回で終わります。

では、さよなら〜

第24話 模擬戦と証明

「んー朝？ふああー」

「ようやく起きたか。シャルロット」

「相変わらず起きるのが早いね」

「当たり前だ。軍人たるもの日々の生活を疎かにしては戦闘に支障が出るからな」

今、喋っているのはラウラ・ボーデヴィツヒ。ドイツの代表候補生。現役軍人でありながら15歳にして隊の隊長をしている。

「流石、軍人だね」

金髪碧眼の少女はシャルロット・デュノア、フランス代表候補生である。

実はある事情により男装していたが一夏のお陰でその必要もなくなり、

こうして本来の性別で在籍している。

「それよりも、シャルロット、今日暇か？」

「うん。今日は暇だけど、どうかした？」

「まあな、少し模擬戦をしないかと思ってな。夏休みで体が訛^{なま}っては困るからな」

「そうだね。良いよ。いつからする？」

「ふむ、ひとまずは朝ごはんの後にでもと考えているが大丈夫か？」

「うん、良いよ。じゃあ行こうか」

「うむ」

食堂

「あー！一夏おはよう！」

「ん？シャルロットか。おはようさん」

「私もいるぞ」

「ラウラもおはようさん」

「おはよう」

「あれ？今日は会長さんは一緒じゃないの？」

「ああ、楯無は今、事情でロシアに行ってるんだ」

「ふゝん。あ！一夏、今日暇かな？」

「ん、まあ暇だがどうかしたか？」

「実はねこの後ラウラと模擬戦するんだけど一夏もどう？」

「そうだなゝいいぜ。やろつか模擬戦」

「オツケゝラウラも良いよね？」

「勿論だ。むしろ大歓迎だ」

「はは、そりやどうも」

「じゃあ、僕たちも食べようか？」

「そうだな」

10分後ゝ

「「「ごちそうさまでした」」」

「お前たちは仕事は無いのか？」

「うん。僕はもうこの前に終わっちゃったし。ラウラは？」

「私も、先日に終わらせた」

「ふゝん、そうか。じゃあ行くか？」

「そうだね」

「分かった」

第二アリーナ」

「準備はいいか？二人とも」

「うん、オッケ」だよ」

「私もだ」

「分かった。じゃあ勝敗の決め方はどちらかのエネルギーを0にすること。では、始め！」

先手はシャルロットだった。

まずはショットガンを展開しラウラに牽制として撃ち始めた。

それをラウラは避け、プラズマ手刀を使いシャルロットへ当てようとするが、

一瞬時加速 イグニッションブースト で大きくラウラとの距離を取り、

再びショットガンをコールしラウラへ撃っていく。

「やるな！シャルロット！流石わ高速切替だラビットスイッチな！」

「そつちこそ！相変わらず1対1は反則的に強いね！」

「やっぱり二人とも代表候補生だな。動きに無駄が無い。そう思う

だろ？白式、白騎士、ライト」

「そうですね」

「だね」

「二人と同感です」

数十分後」

「そこまで！勝者はラウラだな」

「ふ」疲れた。流石わラウラだね」

「それはこつちのセリフだ。シャルロット」

「」

「ぷはははははははははは」

「大丈夫か？暑さにでもやられたか？」

「ふふ。別に」

「そうだな」

「よく分からん」

「一夏はどっちとする？」

「そうだな」

その時・・・

「あゝやつと終わった」

「お疲れ様ですわ。鈴さん」

「やはり代表候補生は忙しいものだな」

いつもの3人組がやってきた。

「ん？一夏じゃない。こんな所で何してるの？」

「ほつとけ。そんな奴」

「そうですわ。こんな奴と話す価値もありませんわ」

「まあまあ、そう言わないで。もう気づいてるでしょ？」

一夏は私たちよりも強い。それにこいつのしてる事って全部正しいと思わない？」

「そ、それは・・・」

実際、一夏の行ったことには何も口出しができなかった。

それに二人は一度、一夏に助けてもらっているので尚更言えない。

一方、箒は・・・

「私は認めん！織斑！私と闘え！」

「ちよつと！箒！」

「ああ、良いぜ。やろうか？」

「では、ルールはさっき説明したとおりだ。では、始め！」
「はああああああ」

剣がぶつかり合う。

「本気でしてるのか？」

「黙れ！貴様に負けるわけにはいかない！」

「何で箒さんはあそこまで織斑さんに執着心があるというか、憎んでいらつしゃるんでしょうか？」

「さあ、知らない」

「はあ、はあ、はあ」

「ん？何だ？降参か？別に良いぞ？」

「！！！！」

箒の中で何かが音をたてて切れた。

「貴様ーーーーーーー」

その時、紅椿が輝き始めた。

「単一仕様能力か」
ワンオフアピリテイー

「あああああああ、織斑一夏ーーーーー」

バキィイーン！

何かが割れる音がした。

「まあ、いいっちゃ良いが興奮しすぎだ。ばーか」

紅椿の2本の刀が粉々に碎けて地面へと落ちていった。

「・・・何故、勝てない？」

「自分で考える」

箒のエネルギーが尽きた。この瞬間一夏の勝利が確定した。

「夏の部屋」

「はあ、それで派手にドンパチしちゃったと？」

「そうですね」

「うむ」

「何で二人がここにいる？」

「「なんとなく」」

「まあ、いいけど。楯無は用事は終わったのか？」

「まあね、それよりも早く帰りなさいよ、時間よ？」

「それもそうだな。シャルロット帰ろうか？」

「そうだね。御休み一夏！」

「ああ、御休み」

「じゃあ、私たちも寝ようか」

「そうだな。御休み」

「御休み」

こうして二人は夢へと落ちていった。

第24話 模擬戦と証明（後書き）

こんばんわ〜ケンです。眠〜いです。
如何でしたか？少し長めですが・・・
感想も待ってます。
それでは、さよなら〜

第25話

文化祭と亡国企業

第二アリーナ、始業式会場

「以上で校長先生のお話を終わります」

『じゃあ、一夏、準備お願いね?』

『了解』

「続いては生徒会からのお知らせです」

「皆、おはよう。夏休みはどうだったかしら?」

「「「会長」」」」

「一年生は初めてね。私は貴方達生徒の長の生徒会長、更識楯無よ。よろしくね?」

『初対面』と書かれた扇子を持った楯無がいた。

「それより皆にお知らせがあるわ。」

「「「「?????」」」」

「紹介したい人物がいるの、どうぞ」

今まで騒がしかったのが嘘のように静かになっていた。

「生徒会副会長に任命された織斑一夏です。俺が副会長つてのに反論があるなら、

俺とISで戦え。俺が負けたら辞めてやるよ。以上」

「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」

「えーっとこれで生徒会からの諸連絡を終わります」

「ありがとうございました。これで二学期の始業式を終わります」

一組教室内

「全く、一夏ったら相変わらずだね」

「そうか？俺としては普通だが？」

「まあ、あれくらいが良い具合だろう。それに最近、

一夏に対する態度も徐々に治ってきている。」

「どうでもいいがな」

「ところで一夏は文化祭の日はどうするの？よかったら一緒にまわらない？」

「悪い。その日は楯無とまわることになってるんだ」

「そうかゝわかった。じゃあ僕はラウラとまわっておくよ」

「ああ、悪いな」

文化祭当日

IS学園は大勢の人でごったかえしていた。

この日は一般公開される滅多にない日なのだ。一目見ようとかなりのお客さんが来る。

とはいっても大部分は立ち入り禁止だが。

「一夏」

「遅かったな。楯無」

「ごめん、ごめん。クラスの催し物の交代時間が延びちゃってね、ごめんね？」

「別にいいさ。行こうぜ」

「うん！」

「何から行くんだ？楯無。」

「んゝまずはあそこにも行ってみない？」

看板には爆弾解体ゲームと書いてあった。

「別に良いけど」

「じゃあ、レッツ・ゴー！」

「いらつしゃいませ〜お二人ですか？」

「はいそうです」

「ではまず難易度を選択してください」

「ハード、イージー、アルティメット・・・最後のは何なんだ？」

「最後のは超難しいモードと言うことです」

「じゃあ私はハード、一夏はアルティメットで」

「かしこまりました」

「おいおい、勝手に決めるなよ」

「だって、一夏、天才だからそれぐらいじゃないとね」

「それでは、お願いします！」

「え〜とここを切つて、これは外して後は起爆装置をoffにしてつと出来た！」

「おお！さすがは会長！景品としてこの箱の中から好きなものを選んでください」

「はい。一夏はどう？」

「ん〜あと少しだよ」

「ふふふ、残念だけどアルティメットは絶対に起爆するように設定してあるのよ」

「ちなみに爆弾が爆発すると小麦粉が辺りにまき散らせれる事になっている。」

しかし、天才の一夏はとうにそんな事は気づいていた。

「なかなか、巧妙に作られてるな。こう言うときは」

「ん。出来たぞ」

「え？嘘！絶対に爆発するようにしたのに！」

「そう言い爆弾の中身を確認しようと覗き込むと・・・
ボン！！」

「ゲホッ！ゲホッ！」

「絶対に爆発するように設定してあったみたいだが、プログラムを書き換えれば意味はない」

「そうきたか、ゲホッ！はあゝ好きなものをどうぞ。うう赤字だ」

「楯無決めたのか？」

「ちょっと待って。うゝんどっちにしよう？」

「何迷ってんだ？」

楯無は指輪とネックレスで迷っていた。

「指輪もいいけどネックレスも良いし、うゝん。指輪で良いかな。これ貰うね」

「はい。ありがとうございます」

「一夏は決めたの？」

「ああ、まあな。行こうか？」

「うん！」

「ちょっとトイレ行ってくる」

「ああ、分かった」

楯無を待っていると一人の女性が近づいてきた。

「あのゝ織斑さんですね？」

「はい？」

「わたくし、IS装備開発企業『みつるぎ』涉外担当・巻紙と申します」

「聞かない会社だなゝ本当にあるのか？」

「え、ええありますとも。最近出来たものでして……」

「へあり得ないな。新しい企業が出来たならば俺の情報網に引つかかる筈だし、

それより殺気を抑えきれないダダ漏れだ。」

「それですね是非わが社の装備を使っただけなかなと」

「すみませんが白式は嫌だと言ってるのでお断りさせていただきます」

す」

「まあ！そう言わずに！」

「はあくだったら条件がある」

「何でしょうか？」

「感情を押し殺す訓練をもっとしろよ。殺気がダダ漏れだぞ」

「・・・」

「ま、いいや興味無いし。さよなら」

「あ、一夏！おまたせ。さっきの人誰なの？」

「その事について話がある」

「へ？」

「実はな・・・」

「分かったわ。誘導はお願いね」

「勿論。で？次はどこに行く？」

「じゃあ〜あっち！」

数時間後〜

「じゃあ一夏私は仕事があるから。またね」

「ああ、またな」

俺は楯無と別れた後、滅多に人が来ない場所にまでやってきた。

「は〜さっさと出て来いよ。亡国企業」
ファントムタスク

「！！なぜ、それを！」

「さあ？」

「まあいい。白式を渡してもらおうか？」

「馬鹿か。断る」

「そうか、なら！」

そついい一夏に何か液体をかけた。

「がああああああああ」

「はははははははは！どうだ、リムーバーの威力は！」

「とでも言うと思った？」

「な、そんなバカな！」

「確かに優れたものだが欠陥が多すぎるし既に俺は対策を当ててるし、当ててなかったとしてもそんな者で俺たちを引き離すのは不可能だ」

「ちっ！だったら、殺すまでだ！」

そう言いISK<アラクネ>を展開させた。

「私の名はオータム！」

「知るかよ。」

「死ねええええええええええ！」

「相手が俺だけだと思っなよ？」

「がはっ！」

オータムが何かに吹き飛ばされた。

「誰だ！お前は！」

「一夏に触つていいのはラウラちゃんとシャルロットちゃんと私だけよ」

水を纏いし女神がそこにいた。

第25話

文化祭と亡国企業（後書き）

こんばんわ〜ケンです。

今日は中途半端でしたがいかがでしたか？

それでは、さよなら〜

第26話 戦闘

倉庫

「誰だつてんだよ！お前！」

「そう言えば言ってなかったわね。生徒会長の更識楯無よ。よろしくね？」

「死ねえええええ」

「もう少し品格を持ちなさいよ。美人が台無しよ？」

「そう言いながら楯無はオータムの攻撃を全て避けていた。」

「くそ！何で当たらねえんだ！」

「当たり前じゃない。そんな大雑把な攻撃喰らうとも思っつ？」

「くそがああああ」

「オータムは8本の足で攻撃することくかわされていた。」

「ねえ、それにしても暑くない？ここ。」

「何？」

「いや、違うわね湿度が高くない？ここ」

「！！！！！！」

「ふふ、その顔が見たかったのよ。その失策した顔がねパチン。」

楯無が指を鳴らすと爆発が起こった。

「げぼげぼ！もう少し加減しろよなゝ楯無」

「あら、そう言いながらちゃっかり翼で守ってるじゃない」

「てめえら！殺してやる！」

「あらら、まだやるの？」

「待て、俺がやる。下がってろ」

「了解」

「は！てめえごときで勝てると思ってるのか？」
「当たり前だろ？」

そう言い一夏は翼と雪片だけを展開した。

「てめえ、なめてんのか？」

「なめてもまずいだろ？」

「くそがああああ」

オータムが8本の足を同時に攻撃にまわすが・・・

「な！」

アラクネの足が全で一撃で切り落とされた。

ファントムタスク

「な〜んだ。亡国企業の幹部だから強いかと思ったけど、
雑魚だな。残念。」

「だから、言っただじやないの〜」

「てめえらあああああああ！」

「「邪魔だ〜よ」。零月！〜クリアパッション〜」
ドカアアアアアン！

倉庫が大爆発を起こし大破してしまった。

「やりすぎたか？」

「いいわよ別に。取り壊す予定だったし」

「まあ、いいか。それよりも・・・」

「それは？」

「えつと、ちよつとかけてつと」

オータムの体が痙攣した。

「ふ〜コアの摘出完了。装備も装甲も完全大破、上出来かな？」

「すごいわね。相変わらず」

「そりゃ俺だもん・・・楯無！」

「え？」

突如、上空からレーザーが降り注いだ

「雪羅シルードモード」

「これは？」

「それは後だ。コアが盗まれた」

「え？誰に！」

「上だよ」

「上？」

見上げるとそこには青いISを展開し、オータムを抱えた少女がいた。

「一夏！大丈夫か？」

「ラウラか。よく分かったな」

「あれだけの爆発は気づくよ」

「それよりも、誰だお前？」

「・・・・・・」

「言う気なしか。上等！」

ラウラが瞬間加速で近づくが・・・
イグニッションブースト

「ラウラ！目をつむれ！」

「な！しまっ！」

閃光弾が何発も輝きだした。

「逃げられたか？」

「そうみたいね。でもコアを馴染ませるのに時間がかかるから結果オーライね」

「そうだな」

「大丈夫？ラウラ？」

「ああ、大丈夫だ」

「戻ろうか」

「ええ」

理事長室へ

「報告は以上です。理事長」

「お疲れ様です。更識さん」

「いえ、それ程でも」

「やはり更識さんは人気者ですね。取られちゃいましたが・・・」

「そ、それよりも、お茶でもいかがですか？」

「おお！虚さんのですか！」

「ええ、そうですよ」

「あの子のは素晴らしいですからね」

「ちようどお菓子もあるのでお茶会でもしましょう」

「ええ」

年甲斐もなくはしゃぐ姿はとても、70近くには見えない。

友達同士がするような光景である。

その光景を見て、学園の真のトップと生徒たちの長とは

だれも思わないだろう。

とあるマンションにて

「てめえ！どういうことだよ！」

高級マンションの最上階は一部の富豪が住める場所だった。

「・・・・・・・・」

「何とか言いやがれ！少女^{がき}が！」

オータムは少女を壁に押し付けとなり散らす^がそれでも怒りは収まらなかった。

「ぶっ殺してやる。」

「やめなさい。オータム」

「スコール・・・」

バスルームから女性が現れた。

「怒ってばつかだと老けちゃうわよ？」

「だが・・・」

「それにエムもまだ未完成品だ^がって言^ってたじゃない。

この世に無い発明には、失敗はつきものよ？」

「だが！織斑一夏は対策を立てていた。つまり、

あいつは完成品を完成させたんじゃないのか！」

「何？」

初めて少女が口を開いた。

「それは本当か？」

「ああ、そうだ！てめえが初めて作^ったんだよな？ど^ういう意味だ

！」

「ああ、そう言えば」

「何だ？」

「何年か前に言われてたのよ。篠ノ之束と同格かそれ以上の天才がいる^って、

でも、所詮噂だから真実は知らないけど」

「お前はそれを知^ってたのか！」

「ええ」

「何で！私はお前の・・・」

「恋人でしょ？」

「ああ・・・」

「ふふふ、髪を洗ってあげるわ。疲れたでしょ？」
「ああ、頼む」

少女は一人、胸のロケットを握りしめていた。

「もうすぐだ。もうすぐで私の復讐が始まる」

「織斑千冬」
ねえさん

少女の口元は人知れず邪悪に歪んでいた。

徐々に始まる復讐。最後に残るのは平和か、それとも破滅か。

第26話 戦闘（後書き）

こんにちは〜ケンです。

如何でしたか〜？それでは、さようなら〜

第27話

戦闘と異常

一夏の部屋

「ああ、忘れてた。ほらこれやるよ。」

「え？これって」

それは楯無がどちらかにするか迷っていたネックレスだった。

「お前は指輪を選んだろ？その指輪を俺に出来ないか？」

「良いけど、何で？」

「お前が選んだものと俺が選んだものの交換すればずっと一緒だろ？」

「馬鹿」

そういうも嬉しそうに楯無は交換した。

「ねえ、一夏が着けてよ」

「ああ、分かった」

「近くから見るとキレイ♡カッコいい♡なあ♡」

「出来たぞ」

「ありがとう」

気づくと二人の距離はキスが出来るほどの距離にまで縮まっていた。

「一夏・・・」

「楯無。愛してる」

浅いキスではなく、深いキスだった。

チュ、クチュ、クチュ、

「ん、はあ」

楯無の口からどちらのものか分からない唾液が垂れてきた。

「楯無」

一夏が楯無をベッドに押し倒した。

「初めてだから優しくして」

「ああ、愛してる」

「私も愛してる。一夏」

二人の唇が重なるうとした瞬間・・・
ガチャッ

「「「・・・・・・・・・・」」」

「あわわわわわわわわわわわ、すみませんでした」
「ううううう」

顔を真っ赤にして楯無は布団にくるまってしまった。

廊下

「山田先生？何の用でしょうか？」

「あわわわ、破廉恥です」

「せめてノックして下さい」

「・・・・・・・・すみません」

「別に良いですけど、何の用ですか？」

「ああ、そうでした！実は倉持技研から白式のデータが欲しいから、明日の日曜に模擬戦をして欲しいとのことですよ」

「相手は誰でも良いんですね？」

「ええ、まあ指定はありませんが・・・」

「分かりました。考えておきます」

翌日

はあ、結局楯無は機嫌は直ったものの恥ずかしくて出られないとか言っ

て、部屋から出ないし。はあ、今日の相手どうしよ。はあ、

一夏が憂鬱になっているとそこへ・・・

「ねえ、織斑君」

「はい、何ですか？」

そこには二年生の生徒が数人いた。

「模擬戦で負けたら副会長を辞めるんだったわよね？」

「ええ、そうですが？」

「だったら私と闘いなさい。織斑一夏！」

「ちよ、ちよつと！止めときなつて！瑞樹！」

「何でよ、薫子？」

「織斑君は会長と同じかそれ以上に強いんだって！」

「そんな訳ないでしょ！こんな奴と会長が同等なわけないでしょ！」

「だから」

「良いですよ？ちょうど今日は白式のデータ取りだからやりましようか」

「分かったわ。でも、こんな奴が弟だなんて最悪ね千冬様も」

「馬鹿！今すぐ謝って！」

「何でよ？薫子。」

「良いから！そうしないと・・・」

バキィィィ！

「！！！！！！！！！！」

「遅かったか」

一夏が雪片を展開してテーブルを粉々にしていた。

「第二アリーナに來い。ぶっ殺してやる」

「上等よ！」

第二アリーナ

「え、えつと。それではデータ取りを始めますがよろしいですか？」

「ええ、いいですよ」

一夏から発せられてる殺気で研究員は半泣きである。

「で、ではなるべく長く戦って下さい。」

泣いているのと大差なくらいの涙目で去っていった。

「女を泣かせるなんて最悪ね」

「・・・・・・・・」

「無視？あつそ良いわ。ボコボコにしてあげる」

ビット内

「で？山田先生。何があつたんですか？」

そこには楯無、シャルロット、ラウラ、山田先生がいた。

「何やら、一悶着あつたみたいですよ？」

「でも、あそこまで怒ってるのは初めて見たよ？」

すると、そこへ・・・

「たっちゃん！」

「あれ、薫子。どうしたの？」

「実はね・・・・・・・・」

「え！それ本当なの薫子！」

「本当よ！だから注意してないと大変なことに・・・・・・・・」

「あ、始まった」

瑞樹はまずショットガンをコールし、距離を取りながら一夏に向け発砲した。

「あれ、外れた？座標はあつてるのに、計算ミス？」

もう一度座標を計算し発砲するが・・・

「まただ、何で？」

「不思議に思ってたんだろ？何で当たらないか。教えてやろうか？」

「結構よ！」

そう言い瑞樹は威力のあるスナイパーライフルを両手にコールし、

乱射し始めた。

「これなら、どうよ！」

しかし、それも全てかわされた。

「何で！当たらないのよ！」

「教えてやるよ！これは俺が考え出した、
イグニッションブーストタイブースト
新しい瞬時加速、小規模加速だ。」

「ペティーブースト？」

「こいつは通常の半分以下までチャージして、ごく僅かだけ移動し弾丸を避ける。簡単だろ？」

「なら近距離で攻めるだけよ！」

ブレードをコールし、一夏に切りかかる。

「はあああああ」

「うざい！」

そう言い一夏は翼を展開しブレードを粉碎した。

「嘘！」

「そら！もういつちょ！」

「きゃあ！」

一夏は翼で風を起こし砂ぼこりをたてた。

「ああもつ、見えないじゃない！いったん上に行くしかないわね」
そう言い風から逃れるために上昇するが・・・

「あぐ！」

強烈な衝撃が頭に直撃し、地面に叩きつけられた。

「何で、シールドを突き破って衝撃が来るのよ！」

「そろそろ終わりにする？」

「くっ！」

物理シールドをコールするが・・・

「邪魔だ！」

「バキイイイイイイン！」

「そんな！」

「さあ、行くぜ！」

一夏は物理シールドを砕くと次々と打撃を与えていった。

「そらそらそら！どうしたこんなもんかよ！」

「あぐ！ぎゃう！」

「そらよつと！」

「きやああああ」

瑞樹は壁にまで蹴り飛ばされてしまった。

「終わりかよ？あっけないなあ」

一夏は帰ろうとするが・・・

「私では絶対に勝てない、だけど諦めたくない！」

ポロボロになりながらも立ち上がった。

「そうこなくちなあ！」

「これで最後よ！喰らえええええ！」

全ての武器をコールし、一気に乱射し始めた。

「ひやははははははははははは！」

それでも、一夏は雪羅をチャージしながら徐々に近づいていった。

「ああああああ！」

「ひやはははははは！雪羅カノンゼロオオオオ」

「きやああああああ」

ラファール・リヴァイブのエネルギーが尽き、瑞樹は気を失ってしまった。

「はあゝやりすぎよ。一夏。」

「ああ、悪い。少しやりすぎたか」

「お灸をすえるには十分だがな」

「鈴木さんは幸い軽症でしたがやりすぎですよ？」

「すみません」

「ふゝ帰りましょ？一夏。」

「ああ、それではさよなら」
「はい、さよなら」

東side

「ふんふん。凄いなあ〜いつくんは」
モニターには先程の戦闘が映されていた。

「昔からいつ君はケンカとかしてるし、武道もしてたから強いねでも、武道は辞めたのにブランクを全然感じないね〜」
ピピピピッ！

「お！出た出た。結果はどうだったかな？」
そこには白式について記されていた。

「ふむふむ、へえ〜凄い凄い・・・え？」
東はもう一度その項目を見直した。

「そんな！こんな筈は！」
その項目にはこう記されていた。

稼働率：99.9%

ISランク：SSS

搭乗者との適合率：測定不能

「ちーちゃんでも90%、ランクSがやっとなのに、それ以上って異常すぎだよ」

結果に驚きながらも東は解析に意識を移した。

天才すら予想外の結果。この結果がどのような影響を与えるかは、一夏自身が決める事である。

第27話

戦闘と異常（後書き）

こんばんわ〜本日二度目です〜
如何でしたか？少し長めです。

雪羅カノンゼロと言うものはゼロ距離で撃つからこうしました。
ちなみにペティーとは小規模の、と言う意味です。
それでは、御休みなさい

第28話 侵入者とアクセルと一夏

IS学園

「え！一夏の誕生日って今月なの？」

「ああ、9月の27日。」

寮での夕食、楯無と楽しく食べていると急に驚きだした。

「じゃ、じゃあその日！一夏の家に行っても良い？」

「ああ、いいぞ」

「やった！」

楯無は嬉しそうに喜んだ。

「そういえば、27日ってキャノンボール・ファストだよな？」

「うん、まあね。忙しくなるわよ」

キャノンボール・ファストとは、簡単に言うとレースである。

「めんどくさいだけだろ？」

「よく言うわね。高機動用のパッケージじゃなくていいじゃない」

「まあ、それもそうかな」

第四世代機にはパッケージが不要なので整備の必要が無いのだ。すると、そこへ……

「えーと、あ、いました！織斑君」

「山田先生、どうしましたか？」

「織斑君に届物です！」

「俺に？」

箱を受け取り中を見ようとすると……

「何だろ？これ？」

「ふむ」

両隣りにシャルロットとラウラがいつの間にかいた。

「いつからいたんだ？お前ら？」

「そんな事より早く見ようよ！」

「そうだぞ、一夏」

「へいへい」

箱の中にあつたものは・・・

「ん？ストップウォッチかしら？」

「カードが三枚あるぞ？」

「えっと、アクセルとブラスター、それにアクセルブラスターだつて」

「だが、アクセルブラスターのカードは色が付いていないぞ」

「ほんとだ」

「何だこれ？差出人は不明だし、訳わかんね」

「ひとまず、もらっておきなさいよ。一夏」

「そうだな」

そう言い三枚のカードとストップウォッチをポケットに入れた。

翌日

「はい、皆さん。今から高機動についての授業を始めます
相変わらずロリ先生だな」と思っていると・・・

「この第六アリーナについては先週言いましたね？では、まずは専用機持ちの人に、

実演してもらいましょう！」

先生が手を向けた先には俺とセシリアがいた。

「では、この二人にアリーナを一周してもらいましょう！」

「準備できましたか？」

「ええ」

「はい」

「では・・・3・2・1・ゴー！」

開始の合図とともに動きだした。

「ふふ、あれが相手では私とブルーティーズには勝てませんわね。」

「そう思っている後ろから何かに抜かれた。」

「え？」

それは翼を展開した白式だった。

「はな、何ですの！あの速度は！おかしいでしょ！」
「あつという間に差が半周にまで開けられた。」

「お疲れ様でした！順位は見ての通りです。」

「いいか、今年は異例の一年参加だがやる以上は各自結果を出すように。」

「それでは訓練機組の選出を行うので各自割り振られた機体に取り込め。」

「ぼやばやするな。開始！」

「相変わらずの鬼教官。いつも通りの日常だった。」

「男子更衣室」

「あゝ疲れた」

「一夏が更衣室で着替えていると・・・」

「い、一夏」

「！！！！織斑千冬！」

「そこには千冬がいた。」

「何の用だ！俺に関わるなと言った筈だ！」

「ま、待ってくれ！お前と話がしたいんだ！」

「黙れ！お前と話す事などない！」

「い、一夏！」

そのまま、千冬を無視し出て行ってしまった。

「い、一夏……」

千冬をつぶやきがひどく響いた。

キャノンボール・ファスト当日、

「さ、遂にこの日が来ました！最速を決めるこの勝負を制するのは
一体誰なんでしょうか！」

アリーナは全席満席の大盛況である。

「あゝめんどくせゝ帰りてえゝ」

「まあまあ、そう言わないの」

隣には既に展開したラウラとシャルロットがいた。

「そうは言っても意味ないだろこれ」

「まあ、そうだが仕方がない」

「はあゝさつさとやって終わろ」

カウントが始められた。

3・2・1・ゴー！

「先に行くね。一夏」

「させるかよ！」

そう言い雪羅カノンモードと銃の乱射が始まった。

しかし、異変は二周目に入ったとたんに始まった。
ズドオオオオオオオン！

「シャルロット！ラウラ！大丈夫か！」

「微妙かな？そっちは？」

「こっちもだな、それよりも誰だ？」

「久しぶりだな。サイレント・ゼフィルス」
そこには青色のISがあつた。

「あ、あのISは!」

「ちよつと!セシリア、落ち着きなさい!」

「離してください!鈴さん!」

「茶番にも程があるな」

「俺も同感だ」

二人は上空でにらみ合っていた。

「何か用でも?」

「どうでも良い!死ね!」

そう言いビツトから大量に撃ち始めた。

「はあゝシールドモ...!!」

突然、レーザーが曲がり始めた。

フレキシブル
「偏向射撃か。やるね」

「どけ、邪魔だ」

「じゃあ、俺もやってみようかな?」

「馬鹿か?貴様、見よう見まねで出来るものか」

「どうか」

一夏が一発放ったがかわされてしまった

「どうした?出来ないのか?」

「余所見厳禁だぞ?」

「何?」

突然、一つのレーザーが複数に分裂し侵入者に襲いかかった。

「バ、バカな!」

スプレッド
「拡散射撃とでも名づけようか」

「くそ!」

次々に襲いかかってくるのをかわしていくが徐々に壁際に追い詰められていった。

「しまっ！」

「残念。終わりだ」
ドオオオオオオン

複数の雪羅、全てが着弾した。

「こんなものかよ」

「まだに決まっているだろうがあああああ」

突如、全ての発射口から一斉に発射された。

「うお！危なえなあゝおい！」

「大丈夫か一夏！」

「ん、まあな。あ！そうだ」

「どうかした？」

「新しい力を試してやる。」

そう言い右腕にストップウォッチを取り付けた。

「何だ？それは。」

「見てろ。これが新たな力だ！」

そう言いアクセルのカードをスキャンした。すると・・・

『白式、グレード・アップ。アクセル！』

白式の装甲が徐々に開いていった。

「それは？」

「白式・アクセルフォームとでも名付けようか。何者にも追隨を許さない速度を得る」

「ほざけ！」

一夏がスタートボタンを押した。すると・・・

『スタートアップ』

突如、一夏が消えた。

「あ、あれ？」

そして、気づくと隣にいた。

『タイムアウト。デIFOメーション』

元の白式に戻ってしまった。

「え？ いったい何が？」

すると・・・

ズガアアアアアン

「「「「！！！！！！」」」」

気づくと侵入者が壁にめり込んでいた。

「がはっ！ いったい何が？」

「アクセルは10秒間だけ全てを凌駕する速度をくれる。つまり・・・

」

「10秒で私に攻撃したというのか？」

「正解だ、お前を拘束する」

侵入者を拘束しようと近づくが・・・

「一夏！ 上だ！ 避ける！」

「な！」

ズドオオオン

突如、上空から光が降り注いだ。

「ちっ！ 奴は？」

「ダメだ。逃げられた」

「残念。みんな怪我は無いか？」

「ああ、大丈夫だ」

「サイレント・ゼフィルス。次こそは・・・」

一人だけ違う方向を見て意気込んでいた。

??? side

「全く、相手をなめるからこうなるのよ？ エム？」

エムと呼ばれる少女を抱えながら女性が言った。

「貴様に言われる筋合いはないが？ スコール」

「ふふ、それもそうね」
スコールと呼ばれた女性は楽しそうにほほ笑んだ。まるで女神の様に・・

「ふふふ、なかなか面白いじゃないの？織斑一夏君」
しかし、その後の笑みは邪悪に歪んでいた。

第28話 侵入者とアクセルと一夏（後書き）

こんにちは〜ケンです。

如何でしたか？今回はオリジナル装備が出てきましたが、

基本的には仮面ライダーですので知っている人は知ってます。
作者は仮面ライダー大好きですから。

それでは、さよなら〜

第29話　マドカと初めてと一夏

とある人物の家の前

「ふーようやく着いた。ここよね？えつとインターホンは・・・え？無い！何でないのよ？あーもうこれじゃあ水の泡じゃない！」
「何してんだ？お前？」

「ひ！つて一夏か。驚かさないでよー」

「驚かすも何も俺の家の前で何してんだ？」

そう実は今日は一夏の誕生日なので祝おうという事で来ているのである。

「インターホン無いの？ここ」

「ああ、無いんだよ」

「何で？」

「ん？車がぶつかってグチャグチャになったから。インターホンだけ」

「ある意味それ凄いわよ」

「そうか？まあ立ち話も何だし入れよ」

「あ、うん。お邪魔しまーす」

「やっつと、ようやく入れたー後は夜まで待ったらー」

しかし、そのはかない希望は打ち砕かれる。

「あ、お帰り。一夏、遅かったね」

「まあな」

「何で、貴方達がここにいるの？」

「ああ、呼んだんだよ。少ないより多い方がいいだろ？」

「それに友達の誕生日くらい祝いたいしね？ラウラ」

「うむ。その通りだ」

「まあ、ちょっと待ってろ。すぐにご飯作るから」

「分かったー」

「で？どうなんですか？会長さん？」

「な、何がかしら？」

「もう！惚けなくても良いじゃないですか！一夏との事ですよ！」

「え？」

「どこまで行ったんですか？最後まで行っちゃいましたか？」

「べ、別にそこまでは……」

「ふむ、これがガールズトークと言うものか」

それから数分後

「ううう」

「ふふふ、顔が真っ赤ですよ？会長」

こつてり赤裸々トークを絞られトマトの様に真っ赤になった楯無の
出来上がり」

「おゝい、出来たぞ！ってどうしたんだ？」

「べ、別に何もない！」

「なら、いいけど……」

「で、何を作ってくれたの？」

「ん、ああ今日はスパゲティーでもどうかと思ってな、」

「……す、凄い……」

「そうか？慣れれば簡単だぞ？」

テーブルにはレストランで出されるようなスパゲティーがあつた。

「……いただきまゝす……」

「はい」

「ん！おいしい！」

「本当ね。ここまで出来ると逆に悔しいわね」

「確かにウマイ」

「そりゃ、どうも。じゃあ俺は少し飲み物買ってくるから」

「あ、良いよ一夏！今日は一夏が主役なのに……」

「良いってことよ日頃の感謝だよ。じゃあ、行ってくる」

「じゃあ、そろそろ準備しましょうか？」
「そうですね」
「ふむ、分かった」
着々と誕生日会の準備が進められていた。

「ただいま」
「パァン！パァン！」

「誕生日おめでとう！一夏」
「は？」

「もう！忘れたの？今日は一夏の誕生日だよ！」
「あ、ああ。そうだったな」

「ほらほら、こっちにきて。ケーキもあるから」

「はは、ありがとう！お前ら！」

「さあ、盛り上げるわよ！」

「「「お〜」」」

「じゃあ、一夏。僕たちは帰るね？」

「ああ、また明後日。御休み」

「「おやすみ」」

「ふ〜楽しかった」

「そうね」

「.....」

「てっ！何でお前がここにいるんだよ？」

「え？私も今日、ここに泊るよ？」

／／／

突然、ゆでダコのように一気に真っ赤になってしまった。

「大丈夫かよ！楯無」

心配になり顔に手をあてると・・・

「ふあああぁん」

「・・・・・・・・」

辺りに妙な空気が流れた。

「じゃあ、俺は入ってくるから」

ボタン！

「ん、何これ？体が暑いし、疼く。それにさっきの声、私の声じゃないみたいだった」

「ふゝいい湯だった。さゝて寝るかな？楯無ゝ入るぞゝ」

「い、一夏」

「た、楯無」

お互いに見つめあったまま動かなくなってしまった。

「一夏ゝ何だか体が暑くて疼くのゝどうにかして？」

「わ、馬鹿！そんな目で見えるな、理性が崩れる！」

「一夏ゝ聞いてるゝ？」

そう言いながら楯無は腕に胸を押し当ててきた。

プツン！

一夏の中で何かが切れた。

「楯無！」

「きゃ！一夏？」

「もう我慢の限界だ」

「私も限界なの、一夏ゝ」

「何だ？」

「私の初めてを貰ってくれる？」

「当たり前」

そう言い一夏は楯無の耳たぶを甘噛みしながら服を脱がせ始めた。
「んーやん！ふああ」

この日の夜、二人は繋がりさらに二人の愛が深まった。

「ふー涼しいな。もうすぐ秋だな」

今俺は楯無との諸事を終えて飲み物を買いに来ていた。

「そうだね」

「ですね」

「紅葉が楽しみです」

「紅葉か今度みんな誘って行くな」

「賛成」

「それにしても、凄かったねーさっきのベッドシーン」

「そうですね」

「うるせ」

自販機に千円札を入れ込みいくつかジュースを買って向こうから人影が見えてきた。

「ん？珍しいな。この時間帯、ここは人気が少ないんだがな」

「織斑一夏」

自分の名前を呼ばれその人に視線を移すと・・

「お前、あの時の！」

「そうだ。織斑一夏。私が私たる為に・・・死ね」

相手の顔が電灯の光によって映し出された。

「な！お前、織斑千冬！」

「違う。私は織斑マドカだ」

パァンツ！と、乾いた銃声が響いた。

第29話 マドカと初めてと一夏（後書き）

こんばんわ〜ケンです〜
如何でしたか〜ではまた次回。
さよなら〜

第30話 楯無と妹と一夏

「おいおい！まじかよ！ここ日本だぞ。発砲するか？普通。」
「そう皮肉りながらも翼を展開し弾丸をはじき返した。」

「これなら避けるだろ！」

しかし、マド力は素手でその弾丸を受け止めた。

「普通、素手で弾丸を受け止めるか？」

「さあな？」

マド力の手からは大量の血が流れていた。

「で？何の用だよ？」

「さっき言っただろう？貴様を殺す、それだけだ。」

「いいぜ。来いよ。」

二人は臨戦態勢に入るが・・・

「今日はこの辺にしておこう」

マド力は暗闇へと消えていった。

一夏の家

その後、世界中にハッキングして亡国企業^{ファントムタスク}について、
調べたがあまり出てこなかった。もちろん、マド力の事も。

「はあー一体何なんだよ？」

まだ、ベッドで眠っている楯無を見ながら呟いた。

「楯無、お前だけは何があっても俺が守ってやる。何があってもな・・・」

青色の髪を撫でながら呟いた。

「ふあああー俺も少し眠るかな？おやすみ・・・」

一夏も楯無の隣で眠りについた。

「うん。よく寝た」。あ

隣の一夏を見て昨日の事を思い出し顔を赤くしてしまった。

「そういえば昨日、一夏としちゃったんだよね？」

幸せそうに顔を緩めていた。

「ん？起きたか、楯無。腰は大丈夫か？」

「うん。まだちよつと痛いけどうれしい痛みだよ」

「そ、そうか、ならいいや」

「ねえ、一夏」

「ん？」

「私を傷物にしたんだから責任とってくれるよね？」

「当たり前だろ？一生一緒だ！」

「嬉しい！一夏」

「うおっ！急に抱き着くなよ」

「ふふ、いいじゃない」

二人は幸せそうに抱き合った。いつまでも、いつまでも・・・

この約束が後々に楯無を苦しめる事になるとも知らずに・・・

翌日、IS学園生徒会室

生徒会室でいつもの放課後の仕事をしていると・・・

「へ？タッグトーナメント？」

「そう！専用機持ちの技術向上を図る為に専用機持ちだけでタッグを、組んで行われるの。」

「でも、何で今更？」

「それは、ほとんどの行事ごとがトラブル続きで流れてるからですよ」

「あゝそういうこと・・・」

確かに行事ごとであまりいい思い出がない。

「その事でお願いがあるんだけどいいかな？」

「べつにいいけど？」

「私の妹を助けてあげて！」

急に頭を下げそう言った。

「お、お嬢様！」

「いいの。このぐらいしなないといけない事だから」

「えゝと意味があまり分からないんだが？」

「私に妹がいるのが知ってるでしょ？」

「ああ、まあな」

「その子ね、ちょっと性格が暗いというか・・・」

「つまり、その子とタッグを組んで少しは改善してほしいと？」

「うん。いいかな？」

「ああ、良いぜ。彼女の頼みだからな」

「もう！」

翌日

「ここか？四組ってのは」

今、一夏は四組の教室の前にいた。

「まあ、入るか。」

そう言い教室のドアを開けると・・・

「・・・・・・」

賑やかだったのが一瞬、静かになりまた騒がしくなった。

「え〜と、青髪、青髪・・・見つけ!」

列の最高尾に青い髪をした女の子がいたが・・・

「うわ〜確かにあれは根暗だな」

その様子は空中投影ディスプレイを凝視し、指を忙しく動かしながらキーボードを叩いていた。

「ああいうタイプは苦手なんだがな〜仕方無い!」

「なあ、更識簪だよな?」

「・・・」

一度視線をこちらに移すがまたすぐに画面に戻ってしまった。

「ふ〜ん。自分の専用機を自作してんのか」

「!!!!!!」

簪は驚きすぐさま一夏の方を向いた。

「ああ、悪い、驚かしたな。やるね〜自作の専用機か」

「何の用・・・」

「ようやく喋った。まあいいや、タッグマッチのタッグ組もうぜ!」

「嫌だ」

すぐさま切り捨てられた。

「ふ〜ん。お前さあ〜馬鹿だろう?」

「!!!!!!」

驚いたようにこちらを向いた。

「そうだろ?自分一人で専用機を作ってるみたいだがさっきから失敗ばかりか?」

「・・・」

「肯定したと取るが、何でだか分かるか?」

「・・・」

「それは、お前がひとりだからだ」

「どういう意味?」

少し怒ったように言葉を強めた。

「それは自分で考えろよ。でも、一つ言っておくが誰の手も借りないって事は、

強いわけじゃねえぞ。それだけは覚えておけ」
その言葉を残し一夏は帰っていった。
「誰の手も借りないって事は、強いわけじゃない……………」
その言葉が簪の心の中で反響していた。
「あんなセリフ俺が言う資格は無いか」

放課後〱整備室〱

簪が一人で大型のディスプレイと睨めっこしていると……

「おお、ここにいた」

「また……」

「そんなつれない顔するなよ〱ほらコーラやるから」

「炭酸は飲まない」

「じゃあ、リンゴジュース？」

「…………頂戴」

「はいよ」

一夏はリンゴジュースを渡し簪の隣に座った。

「悪いな」

「え？」

突然一夏が謝りだした。

「俺のせいでお前の専用機の打鉄式は中途半端に放置されたんだろ？」

「うん、まあ」

「だから、そのお詫びとして俺が手伝ってやる。異論は認めねえぞ。」

そう言い、ちゃっちゃと作業を始めた。

「貴方、分かるの？」

「当たり前だ。ISの事はほとんど学習した」

「…………ありがとう」

その後の部屋に響いたのはキーボードを叩く音だけだった。

「ふゝ今日のところはお終い！」

「うん」

二人とも疲れたように体を動かし始めた。

「じゃ、また明日」

「えっと、その、今日はありがとう」

「どういたしまして」

そう言い二人は分かれた。

ふいつもよりも速くにノルマが超えれた。

ひとりよりも二人か・・・・・・・・・・

ちよつと進歩した簪ちゃんでした。チャンチャン！

第30話 楯無と妹と一夏（後書き）

こんばんわ〜ケンです。

如何でしたか？今回は少し短めです。

もうすぐ中間考査ですので更新が遅くなります。
では、さよなら〜

第31話 完成とファウストと一夏

第六アリーナ」

一夏は簪に呼ばれて来ていた。

「出来たのか？」

「うん、調整するだけだから手伝ってくれる？」

「ああ、分かった」

そう言いお互いISを展開した。

「何だか一夏のISの待機形態って他とは違うね。」

「そうか？」

「そうだよ。普通はアクセサリーとかになるんだけど一夏のって何だろ？」

「さあ？どうでもいいしな。着いたぞ」

第六アリーナのタワーの頂上まで来た。

「ひとまず飛行しようか？」

「うん、分かった」

そう言い、簪はタワーから飛行し始めた。

「うん、スラスターもちゃんと動いてる。特に異常は……ん？」

一夏は一つのスラスターが弱まってきていることに気付き、

簪に言おうとした時、突如スラスターが破裂しバランスを崩し始めた。

「まずい！」

「何で？何で、出来ないの？やっぱりあの人には追い付けないの？」

「簪！前！前見ろ！」

「え？」

一夏に叫ばれ前を見ると目の前には壁が近くにあった。

「ああ、間に合わない」

そう思い衝撃を覚悟したとき……

「ぐうつ・・・！」

ISの操縦者保護があるとは言え衝撃を全て殺し切れきれずに一夏は、

苦痛に顔を歪めた。

「お・・・おりむら・・・くん」

「ふゝ大丈夫か？」

「うん。おりむらくんが・・・」

「ああ、俺は大丈夫だよ、もう慣れてるから」

「ちよっと！どうしたの？こっちは事故って出てんだけど」

管理者の先生から連絡が入った。

「大丈夫です。少し事故っただけですから」

「分かったわ。でも書いてもらうものがあるからこっち来てくれるかしら？」

「分かりました。行こうか簪？」

「う・・・うん」

あの後、始末書とフィジカルチェックをして今回は帰された。

「大丈夫？・・・」

「あのくらいで怪我するほど軟じゃねえよ」

「でも・・・」

簪は申し訳なさそうに一夏を見るが・・・

「だから、大丈夫だって心配するな」

「うん・・・」

「でも、当日までには間に合わないからちよつとあいつらを呼ぶか？」

「あいつらつて？」

「俺の彼女のお友達」

そう言い誰かに電話し始めた。

「あ！もしもし織斑ですけど今暇ですか？

暇なら第二アリーナに来てくれませんか？え？無理って？

じゃあ、楯無の秘蔵写真あげますから、え？もうちょっと？

じゃあ、取材応じてあげますよ。あ、マジですか！じゃあ今すぐ来てください。

お願いしまゝす」

「あのゝ織斑君？」

「一夏でいいぞ。で？なんだ？」

「い・・・一夏の彼女つてもしかして・・・」

「お前の姉の楯無だよ」

「・・・そう」

十分後ゝ

「やつほゝ織斑君！例のものは？」

「これです」

「ふふふ、織斑やお主もワルよのう」

「いえいえ、薰子様ほどでは」

「ふふふふふふ」

「・・・」

冷やかな目線が二人に降り注いでいた。

「まあ、ここまでにして手伝ってくださいますよね？」

「もちろん！じゃあ、早速取り掛かるう！」

「・・・おー」

簪の打鉄式は着々と進んでいった。

「織斑くゝん。ここはどうしようか？」

「そこは出力を下げて武装にまわしましょう」

「織斑くゝん。ここはここでもいいかな？」

「そうですね。後はこれを……」

二十分後

「……出来た」

アリーナの中央には打鉄式を纏った簪がいた。

「ありがとうございました。お礼は後にしますので」

「マルチアンロックシステムは未完成だけどね」

「そこら辺はまた今度でいいんじゃない？」

「そうね。帰りましょうか？」

「賛成」

「一夏？」

「ん？どうした？簪？」

「どうしてみんな、私なんかの為に手伝ってくれるの？」

「さあな？自分で考えろ」

「でも、私はあの人のように強くなんか……」

「はあ。じゃあ、あいつは最初から強かったのか？」

「……」

「違うだろ？楯無も周りの人に教えてもらい支えてもらってようやく、

あの強さを手に入れた。そうだろ？」

「うん」

「そうやって皆に支えてもらう事は恥ずかしい事じゃないんだよ」

「私も強くなれるかな？あの人には追いつけなくても、私なりに強くなれるかな？」

「当たり前だろ。俺だってそうやって強くなっていった」

誰も最初から強いわけではない。誰かに教えを乞い、支えてもらい、時には叱ってもらふ。そうする事によって力というものは手にいれる。

「うん、分かった。今日、お姉ちゃんに会えるかな？」

「ああ、今日は確か非番だった筈だ。行って来いよ」

「うん、ありがとう」

簪は楯無のもとへと走って行った。

「はあ、出てこいよ。隠れてんのは分かってんだぞ。闇」

何も無いところから突然、闇が現れ一人の少女が現れた。

「その名前じゃ呼びづらいでしょ？ 今日から影^{ファウスト}と呼んで？」

「で？ 何の用だよ。ファウスト」

「別に、ただお知らせかな？」

「お知らせだと？」

ファウストと呼ばれる少女が楽しそうに顔を緩めながら言った。

「明日、生き残ってね？」

「は？ どういう意味だよ？」

「それは自分で考えなさい。じゃあね」

ファウストは闇に包まれ消えていった。

「明日に何が起こるってんだよ。全く。」

そう言いながらも一夏も部屋へと帰っていった。

第31話 完成とファウストと一夏（後書き）

こんばんわ〜ケンです。

如何でしたか？最近はず文字数を少なめにして投稿していますが、
どうでしょうか？出来たら感想でアドバイスなどをくれるとありがたいです。

明日は早いめに更新します。

それでは、さよなら〜

第32話 襲撃の始まりと集合

専用機持ちタッグマッチトーナメント当日

「おはよう、一夏!」

「ああ、おはよう。楯無」

「その・・・えつと・・・」

「ん?どうした?」

「簪ちゃんの事ありがとう!」

昨日、急に生徒会室に簪が来たと思ったら急に謝りだし、

何年かぶりにお姉ちゃんと呼ばれ、二人の仲はやわらかくなったら
しい。

「ああ、その事か。別にいいさ。楯無の頼みだったら何でもやるし。」

「

「もう!それでね?お礼がしたいんだけど、何が良い?」

顔を赤くしながら聞いた。

「何でも良いのか?」

「まあ、限度は考えてね?」

「ああ、じゃあこつち来て」

突然、楯無を人気のない場所にまで連れて行った。

「い、一夏?」

「何でも良いんだったよな?」

「うん、何でも・・・んん!」

突然、楯無の唇が一夏に塞がれた。

所望キスである。それも深いのを。

チュッ、クチュッ、クチュッ、チュッ

「んん、はあゝいちひゃあゝ」

その場所には舌と舌がねじりあう音しか無かった。

「はあゝ一夏?」

「最近、楯無成分が不足しているからな。補給させてもらった」

「もう！馬鹿、行くよ！」

「はは、そうだな」

二人は開会式が行われる会場へと向かっていった。

会場

「校長先生、ありがとうございました。続いて生徒会長からのお話です。」

「はい、皆さん。おはようございます」

「「「「「「おはようございます」「「「「「「」

「ふふ、皆さん元気ですね。今日、行われるタッグマッチトーナメントは、

専用機持ちが主役ですが、皆さんが得る物はとても大きいと思います。

この機に是非、それを確かめてみてください。あと……」

「ふああああ～ネムネム」

「本音。俺もネムネムだよ」

「お～奇遇だね～」

「そうだな。ふああああ～」

「「ネムネム」」

あくびをしている二人に鉄拳が降り注いだ。

「「痛～い」」

「ネムネムじゃないですよ！二人とも！先生方が睨んでいますよ！」

「「だって、ネムネムだしね？」」

「はあ～もう少しで終わるから我慢しなさい！」

「「はい」」

「ということで、皆さんも今日の試合を見て何かを感じてもらったと思います。」

しかーーーーーし！」

「は？」

思わず口に出してしまった。

「それだけでは皆は暇すぎて何も面白くないわよね？」

「……そうですね！」

「そこで！こんなものを考えてみました。聞きたいかしら？」

「……聞きたーい！」

「ふふ、名づけて！タッグトーナメント博打を開催するわ！」

「……おおおおおおおおお！」

「ルールは簡単よ！今から配布する用紙に名前を書いて、どのタッグが優勝するかを、予想する。簡単でしょ？」

「……かんだーん！！！」

「そして見事当てた人たちには学食デザート3か月分を贈呈よ！」

「……うおおおおおおお！」

「欲しいかしら？」

「……欲しーーーー！」

「ふふ、当てたらねあげるわ」

「はあーお嬢様……」

「仕方ありませんよ、虚さ……！！！」

「どうしましたか？織斑君？」

突然、白式が輝きだした。白式が輝くという事は近くにISがいるという事になる。

つまり……

「……夏！上だよ！」

「何！」

白式に言われ上を見るとそこには……

「……無人機！しかも数が多い！」

「……主人！一体が発射態勢に入ってます！」

「ちっ！くそが！」

一夏が翼を展開し上空に飛び上がったと同時に発射された。

「くそが！雪羅シールドモード！」

「な、何なの！」

生徒たちが騒ぎ始めた。教師達、そして楯無も呆気に取られていた。

「全員聞け！避難しろ！先生達は生徒の避難を手伝ってくれ！」

「一夏！」

「ラウラ、シャル！」

「状況は！」

「数は全部で8だ。それぞれ別の場所にまでおびき寄せてタッグで1機ずつ潰せ！」

「後コアも破壊しろ！」

「了解！」

「全専用機持ちに告ぐ！それぞれ別のアリーナに誘導しタッグで1機ずつ潰し、コアも破壊しろ！」

「分かったわ！行くわよ！セシリア！」

「分かりましたわ！」

「はあ、しゃあねえなあ、行きますか。先輩？」

「はあ、めんどい」

「さっさと行け！」

「えい」

学園に存在するすべての専用機持ちが勢ぞろいした。

「くそが！ファウストの言ってた事はこれか。行くぞ簪！」

「うん！」

「私たちも行くのかしら？簪ちゃん。」

「ええ！」

本来は集まることがない力が一人の少年によって束ねられた。

それぞれの内に秘めたる正義を振りかざし侵入者に向かっていく。

第32話 襲撃の始まりと集合（後書き）

こんばんわ〜本日二度目です〜

如何でしたか？このストーリーが終わったら、

過去編と日常を数話出してオリジナルへと向かいます。

一応、オリジナル辺はいくつか案がありますが恐らくいくつかする
と思います。

では、おやすみなさ〜い

第33話 戦いの始まり

シャルロット・ラウラペア

二人は今、目の前にたたずむ黒いISと対面していた。

「ねえ、もしかして無人機かな？」

『ゴ……ーレ……ム……？』

「ゴーレム？と言わらしいが無人機だな」

「つまり、手加減しなくても」

「良い訳だ。行くぞ！シャルロット！」

「うん！」

二人が動くと同時にゴーレム？も動き出した。

「シャルロット！お前は遠距離で行け！私が近距離で叩く！」

「了解！」

シャルロットがショットガンでゴーレム？の動きを制限しラウラがビームサーベルで、斬る。

これがいつものパターンだが……

『パ……ターンに相当。最……善の……回避を行う。』

そう言い放つと四肢を人間では不可能な角度に曲げ、

全ての弾丸とエネルギー手刀を避けていった。

「な！馬鹿な！」

「くっ！ラウラ一旦こっちに戻ってきて！」

「どうする？シャルロット？」

「なら、ラウラがA I Cで動きを止めて僕がシールドピアスで貫く
！」

「了解！」

ラウラがA I Cで動きを止めようとするがゴーレム？は捕まりまいと高速で動いて行く。

「逃がすか！」

ラウラはそれをさらに追いかけていく。

「捕まえたぞ！シャルロット！やれ！」

「うん！わかった！」

シールドピアスをぶつけようとするが、

突然、ゴーレム？からエネルギー波が広範囲に放たれた。

「「な！」」

「くっ！何だこれは？」

「エネルギー波が・・・ラウラ、避けて！」

「しまっ！」

ゴーレム？の大剣がラウラを切り裂いた。

「ラウラー！！」

「くっ！はあはあ」

「大丈夫？ラウラ！」

「まあ、ぎりぎりに瞬間加速イグニッションブーストでずらしたが、

長くは持たないな。どうする？」

ラウラの体からは少し血液が流れ出ていた。

「奥の手を使うしかないね」

「奥の手があるのか？」

「まあね、ラウラ見ててね？」

すると、シャルロットのISから大量の銃器が出てきた。

「じゃ〜ん！名づけてバー。デイ！」

「・・・パクリはだめだぞ。シャルロット」

「じゃあ、ウエポン・デイ！」

「そのまんまだな」

「これで終わらせる！喰らえ！」

全ての銃器から一斉に銃弾が放たれていく。

その全てがゴーレム？に向かっていく。

凄まじい火花と爆音が鳴り響く。

「これで最後だあああ！」

最後にミサイルが10発放たれ大爆発を起こした。

「ふう終わった。」

「ああ、これであいつも……!!」

砂ぼこりの中から影が現れた。

「これを喰らってまだ立つてるって言うの？」

「いや、よく見る」

その姿は腕がほとんど無く、体もぼろぼろな姿だった。

「な！逃げた！」

「後は任せる！」

ラウラのESからワイヤーが射出されゴーレム？を縛った。

「これで終わりにする！」

縛ったゴーレム？を自分側に引きよせエネルギー手刀を伸ばした。

「貫けーーーーー！」

ラウラの伸ばしたエネルギー手刀が貫いた。

「貫いたああああああ!!」

その中からコアが空中に放出された。

「これがコアか！」

コアを掴み地面へと降り立った。

「やったね！ラウラ！」

「ああ、ひとまずこのコアを潰さなければな」

「そうだね。」

手刀でコアを貫き粉碎した。

「終わったね。ラウラ」

「ああ、そ・うだ・な」

「おっと！大丈夫？ラウラ？」

「すまないな、肩を借りるぞ」

「良いよ。皆は大丈夫かな？」

「当たり前だろ。あいつらが負けるはずがないだろう？特に一夏はな」

「確かに」

シャルロット・ラウラペア勝利。
残り七機。

第33話 戦いの始まり（後書き）

おはようございます。ケンです。

この後に学校の芸術鑑賞があるので早めに投稿しました。

如何でしたか？原作では全員分の戦闘描写が無いので、

オリジナルで書いてみました。下手くそで短めですが・・・

では、また次回、さよなら

第34話 終結と裏

セシリア・鈴ペア

「あゝもう！何なのよ！こいつは？さっきから攻撃避けられてんじやないのよ！」

「落ち着いて下さい！鈴さん！」

「そうだけど・・・」

今の状況は鈴の衝撃砲とセシリアのピットで同時に攻撃しているが、余り当たっていなかった。

「どうする？ちまちまとやっててもラチ明かないわよ？」

「それでも、やりますわよ！」

「了解！」

ダリル・フォルテペア

「あゝどうすっかな」

やる気のない声を出したのは三年生のダリルだった。

「御先にどうぞっす！先輩！」

そう言っただけでガッツポーズしたのは二年生のフォルテだった。

「てめゝフォルテ、それが先輩に対する態度か」

「なんですと？それが後輩に対する優しさっすか」

やる気のない二人にもゴーレム？は超高密度圧縮熱線で攻撃していたが、

二人は話しながらかわしていた。

「あれ、熱そうだな。お前試してきてくれよ」

「嫌っすよ！先輩こそ試して下さいよ」

そう言いながらも鉄壁の防御で攻撃を全て防いでいた。

「でもさあゝこれ攻撃しねえと終わらねえよな？」

「そうっすね。じゃあ、いっちょ反撃と行きますか。」
バシン！

二人はトマホークの様なハイキックを命中させた。

「行くぞ！簪！」

「うん！」

二人はそれぞれの敵へと向かっていった。

「はああ！」

簪は刀を使い1対1で戦っていた。

一夏はと言うと……

「ウオオオオオ！」

雪片式型を使い5機を同時に相手をしていた。

「遅いんだよ！ノロマが！」

一機の攻撃を防ぎ別の奴に攻撃を加える。その繰り返し。

「一夏！」

「大丈夫だ！先に自分のを片づけろ！」

「分かった」

楯無・箒ペア

「はああああああああああ」

箒が2本の剣でゴーレム？を切っていた。

「箒ちゃん！交代よ！」

「はい！」

一定時間、片方が攻撃し途中で交代、隙を与えずもう片方が攻撃していく。

「もう少しよ！箒ちゃん！踏ん張りなさい！」

「はい！おおおおお！」

ズバァァァン！

箒が片方の腕を刀で切断した。

「やれる！この紅椿とならもつと先に行ける。」

その時、突然紅椿からウィンドウが現れた。

『一定の戦闘経験値が蓄積されました。新武装が構築完了しました。出力可変型ブラスターライフル穿千は一点突破型の・・・』

「ええい！訳の分からん説明は良い！」

ウィンドウをかき消した箒は何故か一瞬で武装を理解し腰を屈めた。

「もう片方の腕を貰うぞ！」

ビシュウウツウン！

両肩二門から放たれた真紅のレーザーによって腕が吹き飛ばされた。

「楯無さん！」

「ええ！任せなさい！」

後ろから楯無が蒼流旋を構えゴーレム？へと向かっていった。

「これで終わりよ！ミストルティンの槍、全力バージョン！」

蒼流旋がゴーレム？を貫きコアごと爆発四散した

「後は・・・あいつらか」

箒と一夏がまだ戦っていた。

「はあああああああ！！！」

箒が夢現ゆめうつを使いゴーレム？に切りかかっていた。

「もう時間をかけない。これで終わりにする」

箒は打鉄式式の主力武器の山嵐を発動させた。

「大気の状態、良し・・・システムも問題ない。終わらせる！」

打鉄式式から大量のミサイルが発射されていく。

その全てをかわしきれないゴーレム？が爆発に巻き込まれた。

「終わった」

箒が後ろを向き、去ろうとした時・

「油断はだめよ？ 簪ちゃん。」

「お、お姉ちゃん」

そこには蒼流旋に貫かれたゴーレム？と楯無がいた。

「最後まで見ないのは昔からの癖よ？」

「あ、ありがとう」

「ふふ、どういたしまして」

「あ！一夏を手伝わないと・・・」

「その必要は無いわ」

「え？でも」

「見ていなさい。簪ちゃん。あれが真の学園最強よ」

「雪羅シールドモード！！」

複数から同時に放たれた熱線も雪羅には無意味だった。

「一夏！そろそろ終わりにしよう」

「ああ！とっておきを見せてやる」

ブラスターと書かれたカードを取り出しスキャンさせた。

『白式、ハイパーアップ。ブラスター』

白式が徐々に装甲が多くなっていった。

「姿が変わった？」

「す、凄い」

「この姿はスピードを殺す代わりに全てを粉碎する力を10秒間だけ得る」

『スタートアップ』

「行くぞ！」

ゴーレム？を次々に一刀両断していった。

「1匹目・2匹目・3・4・ラスト」

「一夏？どうかした？」

「あ、いや別に何でもない。もう一戦だ！」

「えゝまたゝ？」

かれこれ10回程していたのだった。

とある基地にて

そこでは5人の女性が話していた。

「計画はさっき言った通りよ。分かった？」

「ああ、分かった」

「okだよゝこの私に任せなさゝい！！」

「ふふ、気を付けてね。みんな。」

「ええ。全員分かつてると思うけど我々の目的はただ一つ」

「亡国企業われわれが世界を支配する！！！！」

誰も知らないところで進められている物。

それは、まだ誰も知らない事。

これは、あれが起こる僅か数か月前の事である。

第34話 終結と裏（後書き）

こんばんわ〜ケンです。

如何でしたか？

このお話で原作編は終わりにさせていただきます。

次回からは何話か番外編を出してオリジナルへと向かいます。
これからも、よろしくお願いします。

第35話　イチヤイチヤなカップルの一日

とある部屋での朝の一部始終

「ふあああ。よく寝た」

「ああ、起きたかシャルロット」

「あ、おはよう。ラウラ」

「ああ、おはよう。さつさと朝ごはんを食べに行こうか。」

「そうだね。着替えるからちよつと待ってくれる？」

「勿論だ。」

数分後

「おまたせ。じゃあ行こうか？」

「うむ」

二人仲良く並んで食堂へと歩いていった。

これがごくごく普通の朝の場面である。対外の人はこちらだろう。しかし、一組だけまったく異なる朝の迎え方をしているのがいた。今度はそつちを見てみよう。

「ふあああ。よく寝た」

「ん。楯無」

「きゃ！」

隣の住人が突然、抱きついてきた。

「ふふ、もう、朝から甘えん坊さんね？」

一夏であった。実はとても寝相が悪く、さらには朝にも弱い。たいがい、寝ぼけて抱きついてくるのである。

「ん？ふあああ。おはよう楯無。」

「おはよう！一夏！」

二人の日常はさらに続いて行く。

「ねえ、一夏」

「ん？」

「何か忘れてない？」

「ああ！、忘れてた」

「もう！早くしてよ」

そう言い目をつむった。

「了解。」

それを合図に一夏が顔を近づけて行き、そして・・・
チュッ

唇が重なった。

「ふふ、おはよう一夏！」

「ああ、おはよう楯無！」

これが毎朝恒例のおはようのキスである。

「じゃあ、食堂に行こうか？」

「ええ、そうね」

楯無が一夏の腕に抱きつき鍵を閉めて出ていった。

廊下に出てもそれは一緒。

しかし、これだけではない。

「はい、一夏！ あゝん！」

「あゝん」

食堂でもイチャイチャしていた。周りにはかなりの数の生徒がいるのにも拘らず。

「相変わらずお熱い二人だな。」

「ふふ、でも幸せそうじゃない、二人とも」

シャルロットとラウラは見慣れた様子でそれを見ていた。

今度は一般生徒を見てみよう。

「ねえねえ、見てゝまたやってるよ。あの二人」

「いいなあ、いいなあ私も彼氏欲しいな」

「はあゝ何か忘れてない？貴方たち。」

「ようやく忘れかけてたのに」

「それを言ったらだめだよゝかなりん」

「はあゝ胸やけがしてきた」

「あたしも」

「ゝゝゝはあゝ」

彼女たちが胸やけを起こす原因は何なのだろうか？

今度は教室に視点を変えてみよう。

「で、ここがこうなるので・・・」

キンコンカーンコン

「あ！終わっちゃいましたね。この続きは次回にまわしましょう。
号令お願いしまゝす」

「起立！礼！」

「ゝゝゝありがとうございます」

すると、物凄い勢いでドアが開けられた。

「一夏」

楯無であつた。

「うお！いきなり抱きつくなよ」

「嬉しいくせに」

「まあ、それもそうだな」

「ねえ、いつものして？」

「ああ、楯無。愛してる」

「私もだよ。一夏」

チュッ

ゝゝゝゝゝまたしてるよゝゝゝゝ

全員の心が一つになった。

いつも授業が終わると楯無が1組まで来るのだ。
校舎が離れているのにも関わらず。

「ふふ、だ〜い好き！一夏！」

「俺は愛してる」

「もう！ ば〜か」

「天才だし」

「ねえ、もう行くからもう1回して？」

「勿論」

チュッ

ハハハハ頼むから余所でしてくれ〜〜

また心が一致した。

「またね！ 一夏」

「ああ、またな」

これが1日中、毎日続くのである。

部屋にて〜

「一夏〜もう寝よ〜」

「ああ、そうだな」

そう言い二人一緒のベッドに入り楯無を抱きしめた。

「温かいね。一夏は」

「お前はいい匂いがする」

そう言い首元に鼻を近づけていった。

「ん！」

「感じてるのか？淫乱だな〜」

「べ、別に感じてなんか無いもん！」

「誘ってるのか？」

「へ？い、いや別に誘ってなんか」

すると・・・

「きゃ！い、一夏？」

突然、楯無に馬乗りになった。

「それが誘ってるって言うんだよ。楯無」
チユツ。

「んん！ や、いちか」

「我慢できない。愛してる。楯無」

「私も、んひゃあ！ 愛してるよ、ひゃん！」

その夜は一夏の部屋の前を通った生徒たちは顔を赤くして、前を通ったとか。

え？なぜかって？それはね・・・

「ああ！ら、らめ！いちか！はげひい！いちか！あたひもう！」

こんな声を聞いて平常心で貴方は通れますか？
そう言う事ですよ。

第35話 イチャイチャなカップルの一日（後書き）

こんにちわ〜ケンです。

今日、MFのメルマガが来たんですが11月分にも、IS新刊が予定されてませんでした。

それはさておき如何でしたか？

今回はイチャイチャ回でした。

オリジナルの方ですが結構頭の中では出来てんですが、文章化がむずいです。

それでは、また次回！

第36話 一夏と王女の約束

とある場所での一部始終
パンパン！

森の一角から銃声が何発も聞こえてきた。

「はあ、はあ」

一人の少女が追手から必死に逃げていた。

「何で追いかけられるんですか！」

少女は身に覚えの無い事で追いかけられていた。

「誰か、誰か助けて！」

日本へ

「ん？」

「どうかしたの？一夏？」

「誰かに呼ばれたような気がする」

「気のせいじゃないの？まだ夜中だよ？」

「それもそうだな」

再び一夏は眼を閉じた。

翌日へ

「おはよ」

「あ！おはよ！ねえ、見た？今日のニュース？」

「うん！見た見た。イギリスの王女様が日本にいるかもしれないってニュースだよな？」

「そうそう。でね、その人は国を裏切ったらしいよ？」

「えへ本当？」

「うん、でね・・・」

「おはよ」

「あ！おはよ織斑君。」

「さっきの話って本当か？」

「みたいだよ」

「まさかな」

キンコーン、カーンコーン

「座れ！小娘ども。SHRを始めるぞ。号令！」

「起立！礼！」

「「「おはようございます」」」

「おはよう。皆もニュースで知っていると思うが一国の王女が日本にいるらしいが、

その事については何も詮索しないように。いいな！」

「「「は、はい！」」」

放課後

「「「ありがとうございます」」」

「はーい、さよなら」

「一夏帰ろう？」

「悪い！今日、用があるから先に帰つていてくれ。」

「もしかして、……浮気？」

「違う違う」

「ならいいけどあまり遅くならないでね？」

「ああ、悪いな！」

「ありがとうございます」

「ふゝ危なかった。すっかり忘れとこだったぜ」

それは家に届く予定になっていた仮面ライダーのDVDセットだった。

「これがないとねゝさてと帰ろつと」

上機嫌に帰り道に着こうとすると・・・

「助けて下さい！」

「ん？どうした？って大丈夫かその傷！」

その女の子は全身にひどい怪我をしていた。

「助けて下さい！追われてるんです！き、来た！」

すると後ろから大勢の男たちが追いかけてきた。

「おい、坊主。その子をこっちに渡してもらおうか？」

少女は全身を大きく振るわせていた。

「断る。何で追いかけてんだよ？」

「それは言えないなゝ殺せ」

「ゝゝはい」

後ろから武器を持った男が近づいてきた。

「ちっ！下がってろ。」

「で、でも！」

「いいから。邪魔だから」

「は、はい！」

「ひゅゝカッコいいねゝ女の子には見せたくないのかい？」

「何がだ？」

「自分がやられるとこだ、ぐべ！」

「な！やりやがったな、てめえ！」

「良いから来いよ。お説教だ。」

「調子に乗ってんじゃねえぞ！コラ！」

数分後

「痛え」

「うう！すみませんでした。」

「言葉の割には弱いな」

物の数分で決着は着いた。

「な！何だてめえは！」

「答えろ。何であの子を追いかけていたんだ？」

「言うかよ。ボケ」

ボキッ！

「ギヤアアアアアアアアアア」

「ほらほら言わないと全部の骨が折れちゃうぞ」

「ヒィ！言います！言いますから！」

「で？何で追いかけてたんだ？」

「雇われたんです。」

「誰にだよ」

「知らない」

ボキッ！

「あ
” あ
” あ
” あ
” あ
” あ
” あ
” あ
” あ
”

「もう一度聞くぞ？誰に雇われた？」

「し、知らない！本当なんだ！」

「あつそ」

「う、これで許して・・・」

「**とも思っか？**」

ボキッ、ボキッ、ボキッ！

「ぎゃあ ああ ああ ああ ああ ああ」

「あゝあ気絶しちゃった。もう良いぞ」

「す、す、すい……」

「まあ、ひとまず家に来いよ。怪我の手当てだ」

家にて」

「しみるううううううう！」

「我慢しろ！これくらい。はい、終わったぞ！」

「うう、お嫁にいけない」

「な訳あるか。で？お前は誰なんだ？」

「言いませんか？」

「ああ、言わねえよ」

「ジーーーーー」

「言わない。言ったら死んでやるよ。」

「・・・分かりました。貴方は信じても良さそうです」

少女は重い口を開き始めた。

「私はイギリス王女のライト・エリンと申します。」

「あつそ。それで、その王女様が何でここに？」

「はい、実は・・・」

20分後

「はあ、つまりはエリンのお母さん、つまり女王様が病気で亡くなり、

しきたりで行くとエリンが継ぐはずだったのにそれを気に食わない、奴らがあんたに無実の罪を着せてやめさせようという訳か。」

「はい」

「そして、あんたは今や反逆者だという訳か」

「はい。だからお願いです！私を匿って下さい！」

「と言われてもなあ」

「無理なお願いだと承知の上での事です。お願いします」

「・・・・・・・・」

「無理ですよね。すみません」

「そう言い出口に向かおうとするが・・・」

「誰が嫌だなんて言っただ？」

「え？」

「やってやるよ。お前の無実を証明してやる。」

「ありが、ひつく！とうございます。ううう」

「泣くなよ！王女だろ？」

「はい。ひつく！」

こうして一夏の無実を証明するための戦いが始まった。

??? side

「××様。」

「何だ？見つかったのか？」

「はい、ですが少し厄介な場所にいます」

「どこだ」

「IS学園でございます」

「ほう。何故そんな所に？」

「どうやら織斑一夏に拾われたかと。」

「ふははははは！面白い！だが、あいつは必要だ。すぐにここに連れて来い！良いな！」

「はっ！」

戦いはもうそこまで近づいていた。

第36話 一夏と王女の約束（後書き）

こんばんわ〜ケンです。ようやくオリジナル編です！
下手くそですがよろしくお願いします！

感想も待ってます！

では、御休みなさい。

第37話 IS学園分裂！！

IS学園

「で？つまりはこの王女様を匿って濡れ衣を晴らすつと言つ訳」
「ああ、頼む！手伝ってくれ！」

一夏は今、楯無を説得している所だった。

「んゝいいよ」

「本当か？」

「うん、一夏がその子を助けるつて言つんなら私も手伝つよ。」

「ありがとうございます！えっと・・・」

「楯無で良いわよ？」

「は、はい。楯無さん」

「それで、私は今こちらではどうなってるのですか？」

「今はね、エリンはこっちではまだ、捕まえてくれとしか、
言われてないけど、徐々に噂として国家反逆者だって流れてる」

「んゝやばいな」

「どうしましょう」

「ひとまず、今日のところは寝ましょ？疲れてるはずだし」

「そうだな。寝るか」

「はい、御休みなさい」

翌日

「ひとまず、エリンは教室には連れていけないからこの部屋で、
待っていてくれ。誰が来ても開けるなよ？」

「はい、分かりました」

「じゃあ、行ってくるわね」

「どうする楯無？」

「んゝ見つかるのも時間の問題だしねゝ」

「どうすれば良いんだ？」

悩みながら過ごした日だった。

それから数日後事態は急変した。

「どこに行つたんだ？エリン！」

放課後、帰ってくるとエリンが部屋からいなくなっていたのだ。

「まさか、もう追手が？いやないなゝ」

「一夏！いた？」

「いや、まだ見つかつてねえ。そっちは？」

「こつちもよ」

「くそ、どこ行つたんだ！」

その頃、エリンはというと・・・

「少しぐらいいいですよね？」

部屋から外に出てしまっていた。

「ふえゝなかなか広いですね。屋敷よりは狭いですけど」

ブルジョワ発言をしながら学園中を廻っていた。

「ここが、アリーナですかゝ」

ここでは専用機持ち達が特訓をしている最中だった。

「ふゝお疲れですわ。皆さん」

「そうねゝ結構したからね。でも相変わらず第のは性能が凄いはね。」

「

「いや、性能が良くても私はまだ未熟者だ」

「まあ、そう謙遜なさらずに。」

「ん？あの子って」

「へ？どこですか？」

「ほらあの子よ。あれ」

そこには観客席を歩いているエリンの姿があった。

「おい、あの子はもしかやニュースの子ではないのか？セシリア？」

「！！そうですわね。捕まえますわよ！皆さん！」

「ちょ、ちょっと！どうしたのよ！セシリア！」

「あの少女はイギリス王女ですが今では国家反逆者ですわ！」

「そうか、分かった。捕まえるぞ！」

エリン side

「ここが観客席ですね？」

気づきもしないで遊んでいた。

すると・・・

「見つけたぞ！国家反逆者、ライト・エリン！」

「！！！！！」

「捕まえるよ！ラウラ」

「ああ」

「こんな所で捕まるわけにはいかない！」

追いかけてくる二人から必死に逃げていた。

「ここなら、すこしは・・・！！！！！」

エリンの隣に一筋の青い光が落ちてきた。

「止まりなさい。国家反逆者」

「セ、セシリア・オルコット」

「追い詰めたぞ。さあ、もう観念しろ。」

「こんな所で捕まらない！！！！！」

エリンが逃げ出そうとすると・・・

「ひっ！」

「次は外しませんわ。」

「セシリア・オルコット！どうして貴方までもが私を！」

「私も撃ちたくはありません。ですから王女、捕まってください」

「イヤです！」

再び逃走を図ろうとし後ろへと逃げだした。

「待ちなさい！」

「待て！セシリア！殺すな！」

「殺しはしません」

一筋の青い光がエリンに向けて放たれた。

「ひい！」

もう無理だと悟り目を瞑った。

すると、突然突風が吹き荒れた。

「きゃあ！」

「あゝもう何なのよ！」

「くっ！」

あまりの強風に全員が目を瞑ってしまった。

「おいおい、幼い少女に向けて撃つとはどういう量見だ？」

「な！貴様は、」

「織斑」

「一夏」

そこにはアクセルフォームの白式を纏った一夏がいた。

「なぜ、一夏はそいつを守る？」

「その子は国家反逆者として手配中の人物だよ？」

「そうだぞ！堕ちるとこまで堕ちたか！」

「はあゝ何も知らない哀れな奴ら」

「い、一夏さん！」

するとそこに・・・

「捕まえたか、お前たち！」

「皆さん大丈夫ですか！」

教師達が数人来た。

「おゝおゝこれは勢ぞろいで」

「お、織斑君？何でそっちにいるんですか？」

「織斑、そいつをこちらに渡せ。そうすれば処分は考えてやる」
「嫌だ」

「何故だ！お前もそいつが誰か知っているんだろう！

そいつは手配中の、国家反逆者だぞ！」

「そうだ、一夏！考え直せ！」

「織斑君！」

「一夏！」

全員が一夏を説得しようとするが……

「うるさい！」

「「「！！！！！！」」」

「俺はこいつを守る。そして証明してやる！こいつが反逆者じゃないって事を」

「なぜ、そんな奴を守る必要がある？」

「こいつと約束したからだ」

「ふん！話にならないな。一人で何ができる？」

「一夏は一人じゃない！」

上空からミステリアス・レイディを纏った楯無が降りてきた。

「更識！貴様もか！」

「ええ、私は一夏と共にあります。それに世界よりも一夏の方が信じれますから」

「お前たちはどうする？俺につくか、つかないか。どっちだ？」

「「「「………」」」」

「私は一夏につくよ。」

「簪ちゃん」

「更識妹！なぜだ？」

「一夏のやる事は正しいと思う。それに恩返しをしたいし」

「簪……」

「私も一夏につこう」

「な！ラウラ！」

「僕も行こうつと」

「シャルロットまで、何で！」

「簪と同じだ。一夏のやることは正しい。それに少し疑問を感じていたからな。」

「僕も同感かな。」

「貴様ら！それでも代表候補生か！」

「教官。私は一夏に会って知りました。この世には国よりも大切な物があると」

「私も一夏に出会えたからここにいる。私は一夏を信じます！」

「こんなけか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「私も織斑君につきます。」

その人物は・・・・・・・・

「や、山田先生？」

「なぜだ！山田君！」

「生徒を信じるのも先生の役目ですから」

「決まりだな。行くぞ！」

「「了解！」」「」

「行かせるか！」

「そうですね！」

セシリア・鈴・箒が捕まえようと追いかけるが・・・

「邪魔だ。零月！」

「「「キヤアアアアア！」」「」

「今だ！山田先生はすぐに打鉄を、お前らは俺と来い！」

「「分かった！！！」」

「捕まっとけよ。エリン。」

「はい」

「お待たせしました！織斑君！」

「よし行くぞ！」

「「了解！！！」」

一人の少女を救うために行動する者。
それを捕まえる者。
そして裏で動く者。

これがあの大事件の序章だとはだれも知る由もなく進んで行く。

第37話 IS学園分裂！！（後書き）

こんばんわ〜ケンです。

中間審査がもう残りわずかです。作者も来年で受験生なので、更新が遅れますがご承知ください。
では、また次回！！さよなら〜

第38話 二人の襲撃者

「ひとまず、どこに行こうか？」

「考えてなかったの!？」

「うん。まあ流れで言ったといつかなんといつか・・・」

「では、ひとまずわが軍に行こう。場所的にも近いからな」

「ああ、すまないラウラ」

一夏一行はラウラの所属するドイツ軍へと向かった。

その頃IS学園では・・・

「織斑先生!どうしますか!」

「ひとまず、全員待機だ。作戦ができしだい連絡する」

「分かりました」

へまさか、山田先生までもが向こうにつくのは誤算だった。御蔭でこっちの戦力は、

かなり減った。あれの準備が出来しだい使うか？」

「大丈夫か?セシリア?」

「え、ええまあ」

「でも、なんであいつ犯罪者をかくまう訳？」

「分かりません。これはイギリスの問題です。私が国を裏切るわけには・・・」

「真意はともかく今は、奴らを捕まえる、それだけだ」

ドイツ軍基地へ

「た、隊長!どうなさったんですか？」

「ああ、少し野暮用だな。少しこいつらを匿う。」

「わかりました。って隊長!」

「どうしたクラリッサ？」

「その子は確か・・・」

「何だ？お前もこいつを反逆者とでもいうのか？」

「一夏！」

一夏がクラリツサに雪片を向けるが・・・

「ち、違います！その子はライト・エリン。」

今、イギリスで行方不明中の王女です。わが軍にも搜索指令が出されています」

「ちょっと待て。そっちではどういう風に聞いてるんだ？」

「こちらではイギリス政府直々の指令で行方不明中のライト・エリンを、

探してくれと言われているんです。」

「それは本当か！クラリツサ。」

「はい、こちらにはそう来ていますが？」

「おかしいよね？一夏。」

「ああ、こっちには捕獲しろ、

と言われてましたよね？山田先生」

「は、はい、職員会議ではそう言われています」

「それは本当ですか！」

「え、ええ」

ドイツ軍には政府直々の搜索指令が出されているのに、日本では国家反逆者として発表されている。

「クラリツサ！今すぐイギリスの内部情勢を細かく調べろ！

全隊員総員でだ！」

「「「はい！！」」」

ラウラの一声でさっきまで集まっていた者たちが蜘蛛の子を散らすように、

動き出した。

「エリン。一つ聞かせてくれないか？」

「なんででしょうか？」

「お前はイギリスで誰に追われていたんだ？」

「誰につてそれは国の人たちにです」

「言い方を変えよう。お前はお前の部下に追いかけられたか？」

「そう言えば・・・」

「どうかしたんですか？織斑君？」

「不思議に思っていたんです。こいつと初めて会った日もこいつは、日本人に追いかけられていたんです」

「えーっと」

「つまり、どうしてイギリスの人が追いかけてこないかって事でしょ」

「あゝ確かに国家反逆者が逃げたら普通は追いかけますよね」

「なのに全く追手が来ていなかった」

「つまりは誰かが日本に嘘の情報を流し込んだってこと？」

「だが、こちらには搜索者として国から直々に指令が届いているんだぞ。」

「これはどう説明するんだ？」

「恐らく地位が高い人物が図ったんだろう」

その時・・・

ウーーーーー

『未確認ISがこちらに接近中！繰り返す！未確認ISがこちらに接近中！』

「何だ！どうした！」

「この基地にISが一機こちらに向かっています！」

「国籍は！」

「国籍は・・・イギリスです！」

「遂に来たか！どうする一夏！」

「ひとまず、ぶっ倒して事情聴取だ」

「分かった！」

「エリンちゃんはここにいてね？」

「は、はい」

ドイツ軍基地上空へ

「ここが言われていた場所ね。全くあの方もめんどくさい事を言うてくれるわね」

そこにはセシリアのブルーティアーズによく似たISが立っていた。
『そう言わずにさっさと始めろ』

「はいはい。じゃあ一発お見舞いよ」

基地に向けて青い光が一筋落ちていった。

「させるかよボケ」

「！！あら、貴方は織斑君じゃない」

「そりゃどうも。で？何の用だ。」

「ふふ、分かてるでしょ？王女を貰いにきたの。いや、今は反逆者か」

「よく言うな。お前らがそう仕向けたくせに」

「へえへ気づいたの？」

「まあな、まあエリンは渡さねえよ」

「そうはいかないわ。あの方が王になるには必要だからね！！」
すると相手はビットを起動させ一夏に向け放ち始めた。

「うざい。シールドモード」

しかし一夏はその全てをシールドモードで防いだ。

「ちっ！」

「行くぜ？」

二人の攻防が始まった。

基地内部へ

「今の状況は！」

「現在、織村殿が敵機と交戦を始めました！」

「分かった。」

「隊長！」

一人の隊員が慌てて走ってきた。

「どうした！」

「先程のイギリスについての調査結果ができました！」

「見せる！」

報告書を取り見ていくと・・・

「こいつか」

「はい、恐らくこの人物が一連の首謀者かと」

「何か分かったの？ラウラちゃん」

「ああ、首謀者が分かった。名前はエドワード・クロック。エリンの姉だ」

「そんな！姉さまがこんな事をする筈がありません！何かの間違いです！」

「だが、事実だ」

「そんな・・・」

「エリンちゃん・・・」

すると・・・

「ふふふ、意外でしょ？」

「「「「！！！！！！！！」」」」

「きゃ！」

「エリン！貴様！どこから入って来た！」

「さあ、自分で考えるのも戦闘の醍醐味よ？」

「エリンちゃんを離しなさい！」

「嫌よ。せっかく捕まえたのに、離す訳がないじゃない。さよなら」

「逃がすか！」

全員が専用機を起動させ攻撃に移るが・・・

「ふふふ」

「しまっ！」

バン！

「眩しい！」

「何も見えない！」

「エリン！」

閃光弾を投げられ視界が潰されてしまった。

『任務達成よ。離脱しなさい』

「了解。遅いわよ」

「逃げる気か？」

「まあね、目的のものは取れたし」

「まさか！」

「そのまさかよ。じゃあね。」

すると目の前にエリンを背負ったもう一人が来ていた。

「エリン！」

「じゃあね。哀れなナイトさん」

「逃がすかああああああ！！！」

エリンを取り戻そうと近づくが・・・

「一夏！目を瞑って！」

「な！」

「遅いわよ」

閃光弾が破裂にまばゆい光に包まれた。

「くそ！どこだ！エリン！エリンーーーーー」

第38話 二人の襲撃者（後書き）

こんばんわ〜ケンです。

明日で中間考査1週間前なので更新が遅くなります。
それでは、さよなら〜

信じる理由

「エリン！くそ！どこだ！まさか、イギリスか？」

「一夏！すぐに戻ってきて！」

「うるせえ！黙ってる！」

オープンチャンネルから簪の音が聞こえても一夏は止まろうとしなかった。

エリンが連れ去られたことにより冷静さを失っていた。

「すぐに行つてやるからなエリン。」

イゲニッションブースト
一夏が瞬時加速を發動しようとした時……

「一夏！早く戻ってきなさい！」

楯無の怒号が響いた。

「ちっ！一旦そっちに戻る」

基地内部

「お、お帰り一夏」

「ああ、ただいま」

辺りは微妙な雰囲気だった。すると、

「一夏」

「何だ？ 楯・」

楯無が一夏の頬をはたいた。

「！！！！！！」

「楯無？」

「貴方何様のつもりなの？貴方一人で取り戻せるとでも思ってるの！」

•

1
 2
 3
 4
 5
 6
 7
 8
 9
 10
 11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100
 101
 102
 103
 104
 105
 106
 107
 108
 109
 110
 111
 112
 113
 114
 115
 116
 117
 118
 119
 120
 121
 122
 123
 124
 125
 126
 127
 128
 129
 130
 131
 132
 133
 134
 135
 136
 137
 138
 139
 140
 141
 142
 143
 144
 145
 146
 147
 148
 149
 150
 151
 152
 153
 154
 155
 156
 157
 158
 159
 160
 161
 162
 163
 164
 165
 166
 167
 168
 169
 170
 171
 172
 173
 174
 175
 176
 177
 178
 179
 180
 181
 182
 183
 184
 185
 186
 187
 188
 189
 190
 191
 192
 193
 194
 195
 196
 197
 198
 199
 200
 201
 202
 203
 204
 205
 206
 207
 208
 209
 210
 211
 212
 213
 214
 215
 216
 217
 218
 219
 220
 221
 222
 223
 224
 225
 226
 227
 228
 229
 230
 231
 232
 233
 234
 235
 236
 237
 238
 239
 240
 241
 242
 243
 244
 245
 246
 247
 248
 249
 250
 251
 252
 253
 254
 255
 256
 257
 258
 259
 260
 261
 262
 263
 264
 265
 266
 267
 268
 269
 270
 271
 272
 273
 274
 275
 276
 277
 278
 279
 280
 281
 282
 283
 284
 285
 286
 287
 288
 289
 290
 291
 292
 293
 294
 295
 296
 297
 298
 299
 300
 301
 302
 303
 304
 305
 306
 307
 308
 309
 310
 311
 312
 313
 314
 315
 316
 317
 318
 319
 320
 321
 322
 323
 324
 325
 326
 327
 328
 329
 330
 331
 332
 333
 334
 335
 336
 337
 338
 339
 340
 341
 342
 343
 344
 345
 346
 347
 348
 349
 350
 351
 352
 353
 354
 355
 356
 357
 358
 359
 360
 361
 362
 363
 364
 365
 366
 367
 368
 369
 370
 371
 372
 373
 374
 375
 376
 377
 378
 379
 380
 381
 382
 383
 384
 385
 386
 387
 388
 389
 390
 391
 392
 393
 394
 395
 396
 397
 398
 399
 400
 401
 402
 403
 404
 405
 406
 407
 408
 409
 410
 411
 412
 413
 414
 415
 416
 417
 418
 419
 420
 421
 422
 423
 424
 425
 426
 427
 428
 429
 430
 431
 432
 433
 434
 435
 436
 437
 438
 439
 440
 441
 442
 443
 444
 445
 446
 447
 448
 449
 450
 451
 452
 453
 454
 455
 456
 457
 458
 459
 460
 461
 462
 463
 464
 465
 466
 467
 468
 469
 470
 471
 472
 473
 474
 475
 476
 477
 478
 479
 480
 481
 482
 483
 484
 485
 486
 487
 488
 489
 490
 491
 492
 493
 494
 495
 496
 497
 498
 499
 500
 501
 502
 503
 504
 505
 506
 507
 508
 509
 510
 511
 512
 513
 514
 515
 516
 517
 518
 519
 520
 521
 522
 523
 524
 525

初めて楯無の怒りを見て、全員固まってしまった。

「確かに貴方は強い。強いけど自己中心的になつたら誰も守れないわよ！」

「悪い。少し興奮してた」

「頭冷えた？」

「ああ、もう大丈夫だ。それでエリンはどこに？」

「今、調べているから少し待ってくれ。それと黒幕が分かったぞ」

「――誰なんだ？」

「ライト・クロック。エリンの姉だ」

「でも、何で姉がこんな事を？」

「エリンが生まれてから継承権の争いをしていたんだが、クロックの政策の考え方が酷かった為エリンに移ったんだ」

「つまり、自分が女王になる為にエリンを反逆者に仕立て上げたの？」

「ああ、そうみたいだ。どうする一夏」

「決まってんだろ。エリンの濡れ衣を晴らす。後はエリン自身に任せる」

「決まりね。専用機の整備が終わり次第イギリスに向かいましょう」

「――ああ――！！」

その頃、イギリスでは・・・

「只今、戻りました。クロック様」

「帰ってきましたか。それで例のものは？」

「はい、こちらです」

女性は気を失っているエリンを見せた。

「ふふふ、よくやった。二人とも。もう戻っていいぞ」

「は――！！」

「ん？ここは？」

「ようやく目が覚めたか？ エリン。」

「お、お姉さま！ どうしてこんな事を！」

「どうして？ 決まってるでしょ？ あんたを殺すためよ」

「！！な、何で？」

「そんなの決まってるでしょが！」

パチイン

「痛い！ どうして！」

「あんたの所為で私は女王になれなくなった。あんたさえ生まれてこなければ、

今頃、私がこの国を支配できたのに！ それをあんたが潰したのよ！
何度もエリンの頬をはたいた。

「うう！」

「あんたの所為で、あんたの所為で！ あんたの所為で！」

「あぐ！ うぎゃ！」

「はあ、はあ」

「わ、私は貴方が女王にならずに済んで嬉しいですよ。」

「何ですって！」

「貴方は全く国民の事を考えていない！」

「その何が悪い！ 本来、国民どもは王によって支配されてきた！」

「確かに昔はそうかもしれませんが。ですが今は国民がいて初めて国
と言つものは、

成り立つんです！ 我々がこうやって裕福に、

暮らせるのも彼らがこの国に、いてくれているからです！」

「うるさい！ うるさい！ うるさい！ 貴様は何もわかっていない！」

「何もわかっていないのはあなたの方です！」

「ふん！ まあ良い。そんなに威張れるのも今だけだ」

「どういう意味ですか」

「まだ愚民どもにはこの事は伝えていない。もしこの事を言えば貴
様は、

この国から消え去り私が王となる！」

「あんたはまた俺を疑うのか？」

「そ、それとこれとは関係ない！」

千冬が瞬間加速と雪片で切りかかってきた瞬間。
イグニッションブースト

「ここは私に任せて織斑君達は早くエリンちゃんのところへー！」

「一夏！」

「ああ！ここは任せます！先生！」

「はい！」

山田先生を残し全員がイギリスへと向かっていった。

「山田君・・・」

「織斑先生始めましょうか。」

しかし、千冬が武器を下ろしてしまった。

「お、織斑先生？」

「山田君は一夏を信じているのか？」

「はい、彼の今までの行動は誰かの為に行われてきました。
それを私は信じます！」

「そうか・・・だが今はそんな事を言ってる間ではない！
私は教師としてあいつらを止める！」

「ならば、私は教師として貴方を止めます！」

二人の戦いが始まった。

第39話 信じる理由（後書き）

注意：ドイツからイギリスまで距離もつのか？
という疑問を抱いた方もおられるとは思いますが、
そこら辺はスルーして下さい。
お願いします

第40話
秘めたる想い

「山田先生大丈夫かな？」

「あの人も元代表候補生だから行くとこまでは行くさ。さあ、急ぐぞ」

「
「
「
了解」
」
」

専用機持ちたちがイギリスに向けて速度を速めた。

その頃、イギリスでは……

「失礼します!!」

「どうした！何事だ！」

「こちらに複数のISが向かっております。恐らくIS学園の者たちかと」

「ちっ！もう来たか」

「どうなさいますか?！」

へもう少して愚民どもも広場に集まる。それまで時間を稼がせておくか }

「お前たちで演説が始まるまで奴らを足止めしている。」

絶対にイギリスに、入らせるな！」

「は！！」

二人は慌てて部屋から出ていった。

「もう少しだ。もう少しで私の欲望は満たされる。ふはははははははははは！」

その頃、山田先生は・・・

「こんなものか？ 貴様の實力は？」

「はあ、はあ、はあ」

剣を片手に持ちながら肩で息をしていた。

遠距離武器も既に弾丸が底をついており、さらに元々自身が剣術にも精通していないため、

苦戦を強いられていた。

「流石、ブリュンヒルデですね」

「その名で呼ぶな。それに私は弱い」

「え？」

「私は世間からはブリュンヒルデなんかと呼ばれているが、奴らは本当の私を知らないだけだ」

「本当のですか？」

「ああ、私は唯一の弟すら信じることも守ることも出来ない」

「どういう意味ですか？」

「前に話しただろう？ 信じれなかったとはそう言う意味だ」

「じゃ、じゃあ守れなかったとは？」

「あれは2回目のモンドグロッソの時だ」

その日、私は決勝戦を控えていたんだ。

世間は二連覇だとか、何だとか言っているが正直私にはどうでもよかった。

それよりも、一夏とどうすればまた笑って過ごせるかそれだけを考えてきた。

あの日から、一夏は私とは眼を合わそうとはしなかった。

例え、一緒の部屋にいたとしても何もしゃべらず、

私がしゃべりに行こうとしてもあいつは振り向いてすらしてくれなかった。

それからと言うもののあまり家に帰ることもできずに

一夏とはさらに溝が深まったような感じがしてたまらなかった。

「一夏・・・」

「織斑さん！大変です！」

「どうしましたか？」

「弟さんがさらわれたそうです！」

「な！」

それを聞いたとき私は頭の中が真っ白になってしまった。

「どこのどいつだ！」

「分かりません！」

それからドイツ軍から居場所を見つけたという連絡が入った。

明らかに私に借りを作らせるためだとは思ったものの、

そんな事はどうでも良かった。

私は一夏の無事さえ確認できればそれでよかった。

「待っている、一夏。すぐに行つてやる」

「ここか」

私はドイツからの報告があつた場所にまで来た。

「ここに一夏が。待ってる」

そして、私は潜伏していると思われる建物の壁を蹴り壊した。

「だ、誰だ！」

そこには構成員と思われる何人かの人物と氣を失っている一夏がいた。

「貴様ら、ただでは済まさんぞ！」

「お、織斑千冬か！」

「ちっ！撃て！」

何発もの対IS用の武器が放たれたがそんな事はどうでも良かった。

「おおおおおおおお」

「ひ！」

「終わったか？」

そこに残ったのは気絶した構成員が倒れていた。

「まだ、終わってねえよ！」

「まだ、残っていたか。貴様も倒す」

二人の戦いが始まった。

「はあ、はあ」

「こんなものか？ 貴様の實力は？」

「くそが！ 化け物かよ」

「化けものか、弟を守るのならば化け物だろうが

魔物だろうが何でも構わん！ とどめだ！」

そう言い私は雪片を相手に叩きこむはずだった。

そう相手に

「良いもんがあんじゃねえか！」

そう言い奴は何かを引きよせ私の前に置いたが、

私は構成員だと思い、そのまま振り下ろしてしまった。

「い、一夏？」

切られたのは構成員ではなく、一夏だった。

一夏 side

俺は今、第二回モンド・グロツソの会場にいる。

理由は織斑千冬に会う為だった。

あの時、俺はあいつを頭ごなしに拒絶していたが、

日を重ねるごとに俺の考えは変わっていった。

何故、俺はあの時あんなにも拒絶してしまったのか？

何故、もっと冷静に奴に話をしなかったのか？

何故、あの時疑われても仕方がない状況だと気付かなかったのか？
考えれば考えるほど俺の中に後悔が募り始めていた。
そして、今に至る。

俺は今日、奴と、姉さんと話をする為にここに来た。
しかし、かなりの数の観客がいた為に探すのはかなり骨が折れた。
ならば、試合が終わった後、姉さんに会いに行こう。

そこで、姉さんともう一度話をしよう。
そう、思い俺は観客席に戻ろうとした時・・・

「うぐ！」

「騒ぐな。殺されたいか。」

「やば！力が・・・」

その思考を最後に俺は気を失った。

次に目を覚ますと何かが壊される音が聞こえた。

「何だ？何が起こってる？誰か闘ってるのか？」

辺りには剣と何かがぶつかり合う音が響いていた。

「化けものか、それで弟が守れるなら化け物でも、魔物でも何でも構わん！」

一番、聞いたかった声が耳に届いた。

「姉さんの声が聞こえる。そうか俺は誘拐されて」

しかし、次の瞬間に何かに引っ張られる感じがした。

「何だ？何が？」

目をうつすら開けると目の前に剣をこちらに振るおうとしている、
千冬が見えた。

「え？姉さん？」

そして、次に感じたのは剣で引き裂かれた激痛だった。

「い、一夏？」

千冬の目の前には大量の血を流している弟がいた。

「ひやははははははははは！まさか、あのブリュンヒルデが弟を切るとはな！」

「ね・え・さん」

「あ、あ、あ、あああああああああああああ！！」

千冬は頭を抱え叫びだした。

「ひやはははは！今のうちに帰るか？」

ボロボロの体を引きずり相手は去っていった。

病院内

手術中のランプが消え、先生が出てきた。

「先生！一夏は！一夏は無事ですか！？」

「はい、一命は取りとめました。傷も決って浅いとは、言えない状態でしたが、大丈夫ですよ」

「そ、そうですか。ありがとうございます」

「今は麻酔がまだ残ってるので今日一日は眠ったままですが、明日には目を覚ますでしょう」

「そ、そうですか。本当にありがとうございます！」

「いえいえ」

翌日

一夏が目を覚ましたとの連絡が入りすぐさま病室へと走っていった。

「一夏！」

「何の用だよ」

「一夏！すまなかった！私の所為でお前を傷つけてしまった！すまない！一夏！」

「家族だからって許されるとでも思ってたのか！？」

「そ、それは……」

「出ていけ」

「え？」

「出ていけつつてんだよ！」

「い、一夏？」

「良いから、さっさと出ていけ！2度と顔なんか見たくねえ！」

「……！」

私はその場から逃げ去ってしまった。

「くそ！何で、何で！あの時一夏だと分からなかったんだ！」

千冬は何度も壁に自分の拳を叩きつけた。

血まみれになるのも構わずに。

「うう、ひつく！すまない一夏、一夏。」

何度も一夏の名を呼びながら泣いていた。

その頃一夏は……

「くそっ！こんな筈じゃないのに、謝りたいのに！」

憎しみが止まらない！あいつを憎むことしか浮かばない！

ひつく！うう！姉さん、ごめん姉さん！」

彼も何度も千冬の名を呼びながら泣いていた。

「これが私の犯した過ちだ」

「だから、織斑君はあんなにも貴方のことを」

「ああ、私はもうあいつに家族として見られていない」

「そうでしょうか？」

「何？」

「だってそうでしょう！もしも彼が貴方を憎んでいるだけだったら、貴方と同室になるのはどんな事があっても断った筈です！」

「!!!!!!」

「それなのに彼は貴方と数週間だけとはいえ一緒に過ごした！
まだ彼の中には貴方を想う気持ちがあるんですよ！」

「私はやり直せるだろうか？」

「貴方がそれを願うならきっとできます！」

「・・・そうか、山田君もうやめにしよう」

「はい、学園に帰って皆さんを待ちましょう」

「ああ」

山田先生VS織斑千冬

千冬の改心のため勝敗なし。

第40話 秘めたる想い（後書き）

こんばんわ〜ケンです!!

如何でしたか？

もうすぐ定期考査なので更新時間は大体、夜になりますので。
それでは、御休みなさい。

第41話 候補生「SVSテストパイロット」

「みんな！もうすぐ着くぞ」

「「了解！！」」

一夏たちはイギリスまで残り数キロと言ったところまで来ていた。

「待ってる、エリン今行ってやる」

一夏たちが動き出そうとした時・

「はい。そこまでよ」

「お前はあの時の！」

目の前にドイツ軍基地で一夏と闘った女性がいた。

「久しぶりね。一応聞くけどこの先に行くのかしら？」

「yesと言ったら？」

「潰すまでよ」

「そうか、だったらあの時の続きをしようか？」

「待て、一夏！」

「どうした、ラウラ？」

「今、クラリツサから連絡があった。イギリスでもうすぐ演説がある。」

そこでエリンについて言われれば私達は一切関与出来なくなる」

「なら、どうすればいい？」

「お前と会長とで先にアクセルで行け。奴は私たちが止める」

「分かった、頼んだぞ」

「任せろ」

「楯無、さっきのは聞いたか？」

「ええ、聞いたわ。お願いね？」

「任せろ」

そして一夏は一枚のカードをスキャンした。

「白式、アップグレード。アクセル！」

「それは何なのかしら？面白そうね。」

「悪いが教える気はない」

「そう、じゃあ続きをしましょ？」

「悪いが貴様の相手は私たちだ！！」

「！！！！」

ラウラ、シャルロット、簪が同時に動き出した。

「一夏！」

「ああ、楯無、掴まれ！」

「うん！」

『スタート・アップ！』

あつという間に楯無と一夏が消えてしまった。

「あゝあ、行っちゃった」

「さあ、始めようか？ 私たちの戦いを！」

「ふふふ、テストパイロットをなめないでね？」

3対1の戦いが始まった。

『3・2・1・タイムアウト。ディフォメーション』

「だいぶ、進んだわね」

「ああ、後は数百メートルだ。行くぞ！」

「そうはいかないわよ？」

「！！！！」

「まだいたの？」

「ここから先はあの方の命令によりとす訳にはいかないわ」

「あの方ってライト・クロックか？」

「！！なぜ、それを」

「こつちの情報力をなめんな」

「そう、なら死ね！」

「な！」

「一夏！ここは、あたしに任せて先に行つて！」

「頼んだ」

一夏は急いでイギリスへと向かっていった。

「行かせるか！」

そう言い一夏に向かおうとするが、

「させるもんですか！」

「あゝもう！なら、あなたを倒して奴を潰す！イギリス代表として！」

「なら、私は……一夏の代表よ！」

お互いの剣がぶつかり合い火花が散った。

シャル・ラウラ・簪 side

「はあああああ」

「3対1の状態によく攻撃できるな」

「それは嬉しいわね」

お互いに均衡していた。

近距離からの攻撃と遠距離からの攻撃を同時にさばく。

「でも、そろそろ終わりにしましょうか。行きなさい！」

すると、背中から10機もののビットが射出された。

「な！この数は！」

「一斉射撃よ」

10機のビットから青い光が一斉に3人を包みこんだ。

「あら、まだやるのかしら？」

「当たり前だ」

「こんな所で倒れたら笑われたくない人に笑われちゃうから」

三人とも大丈夫そうに言うが、三人のISは所々、装甲にヒビなどが入っていた。

『どうする、シャル、簪』

『どうするって言っても僕たちのエネルギーももう残り少ないし』

『私に考えがあるんだけど……』
『考え?』

『うん、実はさっきのビットによる一斉射撃は数が多い分、排熱作業で長くなる』

だから、その間に一斉に攻撃すれば……』

『簀、その排熱作業の時間は?』

『およそ、10秒』

『10秒か』

『どうしたの、黙りこくっちゃって。作戦会議かしら?』

『さあな』

『でも、これで終わりよ。行きなさい!』

再び全てのビットから一斉射撃された。

『終わったわね、さあてと向こうを手伝いに……!』

そこにはAICでいくつかのレーザーを防いだラウラが立っていた。

『ラウラ!』

『今だ!やれ二人とも!』

『分かった!!簀、行くよ!!』

『うん!!』

二人は山嵐とウエポン・デイを発動した。

『やばい!まだ排熱作業が!避けないと!!』

回避行動に移ろうとした時……

『な、何よこれ!』

『悪いが貴様逃がす訳にはいかん。やれ!!』

ラウラがロープのようなもので縛っていた。

『く!離せ!離せええええええ!!』

『離すか!』

『準備できたよ!』

『うん!』

『喰らえええええええ!!』

山嵐とウエポンズ・デイが発動し、膨大な数の弾丸とミサイルが発射された。

「くそおおおおおおおおおおお！！！」

凄まじい爆音とともに

相手は爆発に巻き込まれた。

「終わったね」

「ああ」

「うん」

三人が安堵していると・・

「や・・・るじゃないの」

「「「！！！！！！」」」

そこにはボロボロの姿をした相手が立っていた。

「ま、まだ立てるとわな」

「残念だけど、私の負けよ。貴方達名前は？」

「ラウラ・ボーデヴィツヒ」

「シャルロット・デュノア」

「更識簪」

「ふふふ、良い名前ね。私の名はアイリス・フリー。貴方達良い代表になれるわよ」

その言葉を最後にアイリスは気を失った。

「強かったね。アイリスさん」

「ああ、私達はまだまだだな」

「これから、強くなっていけば良い」

「そうだな」

簪・シャルロット・ラウラVSアイリス・フリー

勝者、簪・シャルロット・ラウラ

物語は最終局面へと突入していく。

第41話 候補生「SVSテストパイロット（後書き）」

こんばんわ〜ケンです。

如何でしたか？

女王編も大詰めに入ってきました。

実は次回の話であることが起こります。

お楽しみに！

感想も待ってます！

それでは、さよなら〜

お知らせ2

皆さん、こんにちは。ケンです。

昨日に言ったとおり全ての話の修正が完了しました。
修正点は主にこちらです。

1、千冬と一夏の過去

修正前は千冬が一夏をぼこぼこにして、
そのまま出ていくというものでしたが、
これについて批判がありましたので変更しました。

2、束と千冬

修正前は束が嘘の報告をするというものでしたが、
これも変更しました。

3、キャラの言動

修正前の言動で批判がありましたので、
ほとんどの言動を修正いたしました。

後は色々細かい修正を致しました。

もしも、まだ矛盾点やこれは無いんじゃないかと言う言動が、
ありましたら送ってきてください。修正いたします。

自分の小説で気分を害された方々。

顔も見えない信用もできないネットでの謝罪となりましたが、
おゆるし下さい。

本当に申し訳ありませんでした。

これからも改変物語をよろしく願います。

平成23年、10月10日

作者、
ケン。

第42話 進化する水を纏いし女神

凄まじい爆音が鳴り響いた。

「あら、向こうは終わったみたいね？」

「そうみたいね」

「こつちも始めましょうか？」

「そのつもりよ！」

お互いの剣がぶつかり火花が散った。

「はあああああ！」

「ふふ、やるじゃないの？お譲ちゃん」

「子供扱いしないでくれるかしら？！」

「別にそのつもりはないんだけどな」

皮肉りながらも攻撃をかわしていた。

「じゃあ、そろそろこの子の力を見せてあげるわ」

すると突然、相手が動きを止めた。

「隙、大ありよ！」

その隙を見逃さずに攻撃を当てようとするが・・・

「う、嘘?!」

「ふふふ」

楯無の攻撃が文字通り相手を貫いてしまった。

「残念、こつちよ」

「あゝもう！何なのよ？」

もう一度攻撃を当てるが・・・

「また、すり抜けた？」

「こつちよ」

「きゃあ！」

今度は後ろから切られた。

「どうなってるの？」

「それを考えるのも戦闘の醍醐味よ？」
「くっ！」

「やっと着いたぜ。イギリスに」

一夏はようやく、イギリスにたどり着きエリンを探していた。

「エリンって王族の人物だから宮殿とかお城に住んでんのか？」

「たぶん、そうだと思うけど」

「屋敷がありすぎてわかんねえ」

イギリスでは貴族と言うものが残っているので

大きな屋敷が結構あったりする。

「しらみつぶしに探すか？」

「そうじゃなくて、人が集まってる所に行けばいいんじゃないかな？」
「？」

「何で？」

「だって今日、演説があるんでしょ？だったら普通はお城とかの、前で行わない？」

「なるほど、その手があったか。」

一夏は翼を展開し空から探すことにした。

「あ！見つけた。あそこか？」

「そうみたいだね。人が集合しているからね」

「よし、行くぞ！」

「勿論！」

一夏は降下していった。

「ははは、もうすぐだ。もうすぐで私が王となる」

「きつと彼らが助けに来てくれます！」

「まだ、言ってるのか？ 奴らはここには来ることはできません。奴らも所詮は候補生、代表とテストパイロットが相手では、何もできません。」

「そんな事はありません！」

「ふん、まあほざいている。これから演説が始まる。それさえ始まれば、

奴らごときでは国家の問題に個人で手が出せるほど権利はない」

「そうだな。国家の問題に個人で手を出せるほど俺も偉くわねえかな」

「……！！！！」

後ろから一夏が現れた。

「い、一夏さん！」

「はあ、はあ」

「あら？ こんなものかしら？ ロシアの代表さん。」

楯無のISの装甲は所々ヒビが入っておりボロボロだった。

ワンオフアビリティ

「あの能力は恐らく単一使用能力とは思えない」

「さあ、これでお終いよ！」

「くっ！」

「右！」

「え？」

右に剣を振るうと剣と剣がぶつかった音がした。

「偶然ね。さっきまで当たってたんだから」

もう一度、切りにかかるが……

「また！ 何で？」

その頃、楯無は……

「貴方は誰なの？」

「私に名前は無いけど貴方は私をよく知っているよ」

「私を知っている？」

「そう、よく知ってるよ」

「もしかしてミステリアス・レイディ？」

「そうだよ。やっと答えてくれた」

「でも、何で？」

「そんな事よりも貴方は力が欲しい？」

「私は欲しい！」

「何のために？」

「一夏の隣に立って、一緒に戦いたい！大切なものを守りたい！」

「ふふ、合格かな。じゃあ行こうか？」

「ええ、そうね」

「さらなる高みに！」

突然、周りにある海水が楯無のもとに集まっていった。

「な、何なのよ！これは？！」

徐々に海水が形を変えていった。

「ま、まさか第二移行？」

セカンドシフト

そして、海水が周りに弾けた。

「くっ！」

そこに現れたのは・・・

「ミステリアス・レイディ 第二形態」

アクアプリンス

水の王女つてとこかしらそのまんまだけど」

「へえ、凄いじゃないの？でも、結局は攻撃が当てられなかったら同じよ！」

再び、楯無を切りかかろうとすると・・・

「きゃあ！何なのよ、あれは！」

「この子はね、そうね、レイとでも名付けようかな？」

私の可愛い龍よ。」

楯無の周りには水の龍が巻きついてた。

「だったら！」

相手は近距離から遠距離に変えて射撃をしようとするが水に阻まれてしまった。

「な、そんなバカな！」

「この子はねさっきのよりも、水を操る能力が強化されたの。だから、周りに海水があるところでは最強よ？」

「だったら！」

もう一度、能力を使い距離を取ろうとするが彼女を膨大な海水が包みこんだ。

「こ、これは！」

「やっと、分かったの。貴方のその能力。」

それは相手のISに干渉して敵の居場所を錯覚させるんでしょ？」

「それがどうした！」

「だったら答えは簡単よ。見なければいい」

「は？」

「ISが騙されるんだったら、海面に映る貴方を探せばそれで解決よ」

「ちっ！」

「そろそろ終わりにしましょうか。行くわよ、レイちゃん！」

「うん、行こう！」

楯無と龍は飛び上がり、蹴りの態勢に入った。

「はやばい、あれだけは避けないと」

本能的にそう感じた相手は逃げようとするが水によって動けなかった。

「残念だけど終わりよ！はあああああ！」

龍が楯無に水をぶつけ速度を高めた。

「くそおおおお！」

蹴りが入った瞬間、水蒸気が爆発するように爆音が響いた。

「ふう終わった。」

「凄い…わね」

「！まだ、立てるの？」

「エネルギーが尽きたからもう無理よ。貴方、名前は？」

「更識楯無」

「そう、私はアルト・メリーよ。さあ、行きなさい。愛する人がいるんですよ。」

「ええ、ありがとう」

楯無はイギリスへと向かった。

「はゝそろそろ世代交代かな？」

更識楯無VSアルト・メリー
勝者、楯無

第42話 進化する水を纏いし女神（後書き）

こんばんわ〜ケンです。

修正作業を急ピッチで終わらせ、何とか読めるようになりました。
これからも頑張っていきますのでよろしくお願いします。

第43話 事の実実（前書き）

注意：この物語の終わり方が現実ではありえなくね？と言う最後ですが

出来ればその辺をスルーしてお読みいただければ感謝です。

第43話 事の実

「さあ、もう終わりにしようぜ？ライト・クロック！」

一夏は今、クロックと対峙していた。

「断る！何のためにここまで来たと思っている？今さら諦められるか！」

「何でお前はそこまで地位に拘る？」

「何？」

「そうだろう？だって例え王にはなれなくても地位の高い役職には、就けたはずだ。なのになぜそれを捨てる？」

「黙れ！貴様などには分からね！」

「お前がやっている事はただの嫉妬からの嫌がらせだぞ？」

「ああ、分かっているさ！だが、

今のそいつらの生ぬるい政治ではこの国はさらに発展はしない！

ISもそうだ。そのうち他の国家に追い抜かされる」

「ああ、そうだろうな」

「い、一夏さん？」

「でもな、人は縛られて生きたらただの操り人形だ。

この飽和し伸び悩む世界も俺たち人間の欲望で一気に進化する。

人形みたいに過ごしていたら欲望もなくなり、

それこそ、国は滅びるぞ？」

「そうですよ！クロック！」

「「「！！！！」」」

後ろから女性の声が聞こえた。

「な、なぜ貴方が生きている！？」

「お、お母様！？」

その女性とはエリンの母のライト・ラインだった。

「な、なぜお母様が？」

「ん？まあ、二人がどうなるのかなと思って試しにやってみたのよ。

女王が死んだら少なくともこの国全体には広がるはずでしょ？
まあ、ここまで広がるとは思わなかったけど」

「で？なぜ貴方はこのような事を？」

「まあ、どちらが王にふさわしいかの最終試験のような物よ。
結局、エリンが王に今のところはふさわしいかしらね？」

「な、ならば貴方は今までの全ての事を知っていたのか！」

「ええ、知っていたわ。貴方が王となつて彼ら国民を統制し、
イギリスをさらに発展させる。それは確かに素晴らしい志だわ。
でもね、少年がいったみたいに人間はただただ与えられる、
生活をしていても何も変わらないわ。」

人それぞれの生活をして初めて何かを変えようという、
欲望が生まれる。それによつて全てが成長していくのよ？」

「わ、私は・・・」

「貴方もこの国をさらに発展させようとする素晴らしい志がある。
でも、それをしようとする考えが極端すぎるんです。」

王になつても国民からの支持がなければもちませんよ？」

「・・・そうか。私は視野が狭すぎたのか。エリンは、
何故そのような広い思考を持っている？」

「私は彼らと共に外の国を見てきたからです。」

その期間は短いものでしたが今までの考え方が、
がらつと変わりました」

「そうか・・・」

「さあ！そんな事よりも演説よ！演説！」

「え？」

「元々、この演説は前から決まっていたものだ。貴様が初めて国民
の前に、

出る、言えばお披露目会みたいなようなものだ」

「し、しかし私はまだ・・・」

「言つて来いよ」

「い、一夏さん？」

「確かにまだ、お前は甘甘のお子ちゃまだ。」

「簡単な事で泣いたり、」

「うつ・・・」

「暗い所が怖かったり、一人で夜、トイレに行けなかったり・・・」

「あー！もう、今言わなくてもいいじゃないですか！」

エリンは今までの恥ずかしい事を連呼され思わず顔を赤くした。

「あら？本当なの？それは、ぜひ詳しく聞きたいわね」

「お母様も！」

「でも、」

「???」

「お前はこの国から一人で外にでて、一人で日本まで逃亡して、一人で追手からも逃げ切れた。そう言う経験のある国家元首は、今さらなかないぞ？」

「・・・」

「お前がその経験をどう活かすかによってこの先の人生も変わる。だから、これから勉強に励んで言い女王になれ」

「なれるでしょうか？私に・・・」

「最初から諦めてたら出来るもんも出来なくなる。俺みたいにな」

「一夏・・・」

「だから、努力しろ！どれだけ辛い事があっても進み続ける。」

そうすればおのずと見えてくる」

「はい！」

「さあ、大急ぎで準備するわよ！クロックも手伝って頂戴！」

「ええ、分かりました」

三人は大急ぎで準備に取り掛かった。

「一夏？」

「おお、来たか。お疲れさん。皆は？」

「みんなには外で待ってもらってる。終わったの？」

「ああ、終わった。もうこの場所に俺がいる意味はない」

「じゃあ、帰ろうか？」

「ああ、帰ろうか学園に」

こうして、一夏たちの王女を救う物語はお終い。
最後にちょこっとだけエリンの演説を聞いてみよう。

「皆様、お集まりいただいて誠にありがとうございます。

それでは、これより王女、ライト・エリン様の演説を始めさせていただきます」

おおおおおおおおおお！

「ううう、人がいっぱいです・・・」

「まあ、そうでしょうね。この国の大半ぐらいは来てるんじゃないの？」

「もう、言いすぎよ。テレビを考えると全国民かしらね」

「な、ぜ、全国民？」

「はあ、昔から貴方はとどめをさすことがお上手で」

「へ？何かいったかしら？」

「で、では言ってきます！」

「ふふふ、行つてらっしゃい」

「おおーあれが王女様」

「美しい」

「み、皆さんこの度はお集まりいただきありがとうございます」

エリンは事前に準備していたカンペを見ていた。

「え、えっと、その」

ふと空を見上げるとそこには、いくつかのISらしきものが、見えたが遠すぎてよくは見えなかった。

しかし、エリンは一夏たちだと思い、再びスピーチに戻った。

「私は今まで狭いかごの中で生きてきました」

「あんなセリフあったかしら？」

「さあ？あの子のアドリブでしょう、きつと」

「もし、このまま狭いかごの中で生きて女王を継いでいたらきつと、お母様の様にはなれませんでした。」

しかし、私はある人物と出会いました。

その人は私にいろいろな事を教えてくれました。

世界の事、仲間、そして人が持つ温かな心を

私に教えてくれました。

それを今度は私が貴方達に教える番です！

ですから、もし私が女王となった日には私についてきてくれますか
！？」

人々の喧騒が静かになった。

すると・・・

「王女様、万歳！」

「王女様、万歳！」

「王女様、万歳！」

その叫び声はとどまるところを知らず次々と広がっていった。

「これが、本来あるべき姿なのかもしれないわね」

「そうですね。国民、全てに慕われ支えられる王。それが、

王になる条件なのかもしれない」

その叫び声はいつまでもイギリスに響き渡っていった。

「がんばれよ。エリン」

女王編、完結。

第43話 事の真実（後書き）

こんばんわ。ケンです。

明日から20日まで更新停止期間に入ります。

これから、定期考査ごとにこうなると思いますので、

自分も学生の身みですので勉強を優先しなければならぬ、
時期は勉強を優先させていただきます。

それより如何でしたか？

感想などは見ますので。

それでは、20日にお会いしましょう。
さよなら。

第44話 大騒ぎな部屋

「こんなものか」

一夏は今までの事について報告書を作っていた。

もちろん、コア人格覚醒に関する事など、全てを書いてあるわけではないが。

しかし、この作業は本来生徒会長の楯無の役目なのだが……

「はあ、まったくお陰で家族が増えた気が……」

盛大に一夏に水がかかった

「誰だ！俺に水かけた奴！」

「きやはははは！面白ーい！」

「ちょ、ちよつとレイ！もう止めなさい！」

「うううう」

「や、やつぱりもうちよつと遊ぼうか」

「やったーお姉ちゃん、だーい好き！」

この様にレイを叱り止めさせようとしても涙目でこちらを見ってくるので

楯無はつい甘やかしてしまう。

おかげで一夏の部屋は今、水で濡れている所が何か所もあった。

「は、もともとは楯無と相部屋だったのに、今では6人部屋だよ」
溜息をついていると今度は一夏の目に海水がかけられた。

「おおおおー！目が、目があああああああー！」

「きやははははー！」

「あ、こら海水はダメでしょー！」

「一夏も大変だね」

「そう、思うならお前たちでレイをどうにかしてくれ」

「はいはい、行こうか？白騎士、ライト」

「ええ」

「そうですね」

「さゝ今度はお姉ちゃんたちとお外で遊ぼうか？」
「お外？やったー」

四人は外へと出ていった。

「うゝまだ、目がしみる」

「だ、大丈夫？」

「まあな」

「でも良いじゃない。賑やかで」

「そうだな、まるで夫婦みたいだな」

「ふえ？ふ、夫婦？」

楯無は夫婦という単語に思わず顔を赤らめた。

「ん？どうかしたか？」

「べ、別に何でもない！」

「????？」

「夫婦かゝじゃあ、あの子たちが子、子供。それもいいかも」

「ねえ、一夏？」

「ん、何だ？」

「子、子供は何人欲しい？」

「は？」

一夏は思わず子供という単語で顔を赤くした。

「た、例えばよ？例えば私たちが結婚して子供が

欲しいってなった時、何人欲しい？」

「子、子供って早くないかい、いやでも俺も１８になったら結婚できる、」

年齢だし楯無とも別れる気はないし……」

「そ、その話はまた今度な？」

「う、うん」

コンコン

「ん？誰だろう？」

「ああ、俺が出るよ」

ドアを開けたその先には……

「セシリア・オルコット」

「こんばんわですわ」

セシリアがいた。

「あら、どうしたのセシリアちゃん」

「え、ええまあ少しこの方にお話があつて・・・」

「俺にか？まあ、立ち話も何だし入れよ」

「い、いえすぐに終わりますので」

「そうか、で？何だ？」

「その・・・申し訳ありませんでした！」

突然、頭を下げ出した。

「は？」

「今までの事ですわ。私は今まで貴方に大変無礼な事をしてきました」

「別に俺は思つてねえよ。今の風潮から考えるとそういうのもある」

「し、しかし今回の事で私は危うく罪を犯すところでした」

「エリンの事か？」

「はい」

実は一度、エリンに威嚇射撃として撃ってしまったのである。

「ですから、今回の事をすべてひつくるめてお詫びに」

「良いよ、別に。気にしてないし」

「で、ですが」

「まあまあ、良いじゃない。一夏が良いって言ってるんだから」

「それでは今までの事とつりあいませんわ」

「だったら俺よりも強くなれよ」

「え？」

「申し訳なく思つてんだろ？だったら俺より強くなっていつか叩きのめせよ」

「そんな事で良いんでしょうか？」

「まあできればだけど」

「やって見せますわ！必ず！」

「ハハ、楽しみにしてる」

「ええ、首を長くして待っていなさい。絶対に私は超えてみますわ」
「楽しみにしてる」

そのまま、セシリアは去っていった。

「でも、良かったの？」

「何がだ？」

「だって今までの事を謝りにきたんだから普通だったら、簡単に許さないと思うけど？」

「別にどうでもいいんだよ。あんな事。当の本人が良いって言うたらしいの」

「一夏らしいけど」

「もう寝ようぜ？眠い」

「うん、そうね」

二人は一緒の布団に入り仲良く眠った。

第44話　大騒ぎな部屋（後書き）

どうも、ケンです。

改変ではお久しぶりです。

白黒の方はこんにちは。

如何でしたか？

感想も待っています。

それでは。

第45話 壮絶な痴話喧嘩。PART 1

「何よ！あなたが悪いんでしょ！」

「何でそうなるんだよ！大体お前もだろが！」

その日の夜は怒鳴り声がよく聞こえる夜だった。

そして、夜も明け生徒たちが徐々に起き始める時間に悲劇が起こった。

「一夏の馬鹿……」

今日の一夏の部屋での第一声はこれだった。

この叫びはかなりの生徒の部屋にまで届いたとか。

これはIS学園唯一のカップルのお話である。

「は」

おはよう、シャルロットだよ。

今、食堂で朝ごはんを食べてるけど一夏は何だか元気が無かった。

一夏の頬に手形も薄らと残ってるし、隣に楯無さんがいなかった。

いつもなら朝からイチヤイチヤしてるのに

今日は一夏一人で、朝ごはんを取っていた。

「ねえ、ラウラ」

「ああ、分かっている。一夏の事だろう？」

「うん、そうだけど何かあったのかな？」

「周りの生徒によるとあの女と喧嘩をしたらしい」

「ふん、でも何で？」

「さあな、そこまで知らん」

どうやら、ラウラもこんな事があったという事を知っているだけで、事件の原因までは知らないみたい。

その時、本音がトテトテと一夏に近づき聞いた。

「ねえ、おりむ、何かあった？」

「は、どうせ俺なんか」

「お、おりむ〜？」

「は〜どうせ俺なんか……」

そのまま、本音が帰ってきてしまった。

「どうだった？ 布仏さん」

「デュツチー、あれはもう末期だよ〜」

「ほう、ならば私が行こう」

ラウラが立ち上がり近づいていった。

その間に僕は朝ごはんを取りに行き、戻ってくると……

「ラ、ラウラ？」

ラウラが分かりやすいぐらいに凹んでいた。

「あれはダメだ。布仏の言うとおり何を言っても返さず、ただただ、後悔しかしていない」

「ははは……ひとまず会長さんに聞きに行こうか？」

「そうだね〜」

「うむ、基本は情報収集だな」

こうして、僕たちの長い戦いが始まった。

ひとまず、僕たちは授業があるので昼休みに行くことにし、一夏を引きずるように教室まで連れてきた。

「ほら行くよ！」

「離してくれ〜俺なんか授業を受けても何もできねえよ〜」

「完全に壊れてるな」

「て言うよりも〜お嬢様に依存しすぎちゃってるのかな〜？」

「だが、たまにはこういう禁欲生活も必要だぞ」

そして時間は流れて昼休み〜

「ここかな？」

「そうだよ〜」

「うむ、では入るか」

そのまま僕たちは会長さんがいる教室へと行きました。

「会長」

「あら皆して、どうしたのかしら？」

「えっとーおりむーとなにかあったのかなーって」

一夏の名前を聞いたとたんに怒り始めた。

「別に何も無いわよ！あんな人とは！」

「い、いやどう見てもあったようなんですが」

「と・に・か・く、あの人とは何も無かったの！」

「はい」

そのまま僕たちは会長とともに食堂に行った。

しかし、これがいけなかった。

まだこれが二年生寮にある食堂なら良かった。

でも、会長も僕たちも普段は一年生寮の食堂で食べてるから

気付かずについて、一年生寮の食堂に来てしまい、

気づいたのは食べている時だった。

「ここそつえば一年生の食堂じゃない？」

「「あ」」

「た、楯無」

「ふん！」

後ろから一夏が声をかけるがあからさまに目を逸らしてしまった。

「そ、その悪かった！この前の事は・・・」

「何の話をしてるのかな？織斑君」

「「「！！！！」」」

普段はあんなにも嬉しそうに名前を呼んでるのに今日は名字で呼んだ。

「た、楯無？」

「あら、いつから私の名前を呼び捨てするようになったのかしら？」

「え、いや、えっと」

「まだ私が許したのなら良いけど許可も、

もらってないのに呼び捨ては、いけないんじゃないのかな？」

話している顔はとても可愛い笑顔なのだが、絶対零度の冷たさを感じさせる笑顔である。

「楯無、だから、あれは・・・」

「先輩は？」

「え？」

「年上なんだからせめて楯無先輩でしょ？織斑君」

「・・・楯無先輩」

「最初からそう言えばいいのに。ごちそうさま。

じゃあね、シャルちゃん、ラウラちゃん、本音ちゃん」

「はい、さよなら」

「は、は」

「・・・」

そのまま、会長さんは帰っていった。

一人の少年にとどめを刺して。

「わゝお、おりむーの魂が見えそうだよ」

「そんなばか・・・しっかりしろ一夏！」

冗談かと思うけど本当に例えるならそんな感じ。

一夏は会長さんの余りにもよそよそしい態度に、シヨックを受けて保健室に運ばれることになった。

「ん、んゝここは？」

「保健室だよ」

「本音。いつから？」

「放課後からかな？もう直皆も来るよ？」

「そうか」

予告通りいつものメンバーに薫子さんも加わり理由を説明した。

あれは昨日の放課後の事だ。

いつも通りアリーナでISを少し動かして、整備室で確認した後、部屋に戻っていたんだ。そうしたら・・

「あの〱織斑君、ちょっと良いかな？」

「はい、何ですか？」

そこには2年生が参考書を持って俺の前にいた。

「どうかしましたか？」

「確か織斑君で天才とか言われてたよね？」

「ええ、まあ。昔の話ですがね」

「今でも頭いいんでしょう？」

「まあ」

「お願い！勉強教えて！」

「へ？」

「実はもうすぐ考查があるでしょ？」

実技の方は単位は問題ないんだけど一般教科がやばいの」

それは分かる。何せこの前の考查なんか最後の問題で、

難関大学の過去問も出たぐらいなのだ。

まあ、一夏からすれば既に大学の知識もあるので簡単に解ける。

どうやって勉強したかは不明だが

しかし、それは一夏の話。

普通は当然詰まる。

「いいですけど何で俺なんかに？」

「いや〱職員室に行く途中にちょうど織斑君がいたから」

「単元はどこです？」

「対数と微分なんだけど、大丈夫かな？」

「ええ、大丈夫ですよ。どこでしますか？」

「よかった。だったら私の教室に行こう。近いし」

「分かりました」

という事で俺は今、先輩に教えていた。

「ここはどうするの？」

「ここはですね……」

何問かを解説し参考書の類題を何問か解いて今日は終わった。

「ありがとう！織斑君、分かりやすかったよ！」

「そりゃ、どうも」

「じゃあ、帰ろう……きゃ！」

「どうしました？」

そこにはゴキブリがいた。

IS学園の教室でゴキブリはレアである。

「いやああ！ゴキブリはいやああ！」

「お、落ち着いて……うお！」

「きゃあ！」

机の脚に引っかかり倒れてしまった。

「誰がいるの？」

「え？」

「な！」

そこには、先輩を押し倒した俺をにらむ楯無がいた。

「た、楯無」

「会長」

「へー一夏は私という彼女がいるのにも関わらず押し倒すんだ？」

「ち、違う！これは事故であって断じて疾しい気があったわけでは」

「そ、そうです！」

「もう良いもん！」

そのまま、楯無は出ていった。

そして部屋へ

一夏の部屋では物が倒れる音が響いた。

「最低！彼女がいるのに押し倒すなんて！」

「だから、さつきから違うって言ってるだろ！」

「あのどこが違うのよ！どう見ても押し倒してたじゃない！」

「だから、あれは事故でああなったんだ！」

「違うでしょ！一夏、鼻伸ばしてたくせに！」

「伸ばしてねえよ！」

「それにあの子の叫び声が廊下にまで響いてたけど？」

「いやあああ！って言うのが響いてたけどどういう意味かしら？」

「もしかしてゴキブリの時の叫び声か！」

「黙ってるって言う事はもしかして、無理やりだったんでしょ？」

「な！ち、ちが」

「うるさい！変態！最低！けだもの！」

「！！！！」

一夏の堪忍袋の緒が切れた。

「さつきから言いたい放題言いやがって！」

お前だつてこの前、男と抱き合っていただろうが！」

「はあ？何の事よ！」

「ほほ」とぼけるのか？前にロシアの人が来たときにしてたくせに？」

「もしかして一夏、あの時の事を？」

「確かにそうだけど、あれは・・・」

「ほら、認めた！お前の方がよっぽど最低だろうが！」

「な、何ですって！」

そのまま、口論は朝まで続いた。

「一夏のバカ！」

いつもなら「天才だし」といつて返すのだが、

興奮していたため言うてはならない事を言うてしまった。

「だったら楯無のブス！」

「！！！！！！」

一夏は状況に気付かずにそのままのしる。

「お前みたいなのがママ娘と付き合っている俺の身にもな」
「バチイイイイイン！」

「な、なにすん」

一夏はそれ以上何も言えなかった。
楯無が泣いていたからである。

「た、たて」

「一夏の、」

「え？」

「一夏のバーーーーーカ！」

そのまま部屋から出て行ってしまった。

「という事なんだ」

「「は」」

「みんな？」

「「それはダメだよ」」

「うう！」

「いくら怒ってても、ましてや彼女にブスは無いよ」

「・・・」

「知ってる？今日、朝一番で私の部屋に来てわんわん泣かれたのよ？
慰めるのにどれだけかかったか」

「・・・」

「はー一夏は悪いと思ってるの？」

「あ、当たり前だろ」

「だったら手伝ってあげる」

「え？」

「名づけて、おりむーとお嬢様の仲直り大作戦！」

「「「いえーーーー！！」」」

少年と少女達の戦いが始まった。

第45話

壮絶な痴話喧嘩。

PART 1

(後書き)

こんばんわ
連続更新です。
如何でしたか？
それでは

第46話 壮絶な痴話喧嘩PART2

私達の作戦はこうだ。

会長さんと親しい薫子さんが一夏が隠れてる部屋へ誘導しそれを聞く。

それで、仲直りする、それが計画。

薫子さんが部屋に連れるところまでは無事に成功した。

「で、何があつたのさ？」

「別に何も無かつたもん」

「今朝、あんなにもここで泣いていたのに？」

「うっ！」

「で？何があつたの？」

「聞いてくれる？」

「勿論！」

「一夏と喧嘩したのよ」

「ふんふん」

「それでね・・・」

<一夏の話したものと同じため省略>

「て言う訳なの」

「ふんふん。それでタッチャんのその抱きしめられてたのって？」

「ああ、それはね・・・」

ロシアの人が第二^{セカンド}移行したからそのデータを見せる予定だったの

「あ、こんにちは。ラッシュさん」

「あら？」

「どうかしましたか？」

すると突然抱きしめられた。

「え、ちょー！」

「いやーん、もう可愛い！何何？恋でもした？」

「え、ええまあ」

「それに胸も大きくなったかしら？」

「ちょーやん！ラッシュさん！」

「ああ、ごめんね」

「て言う事なの」

「つまりはその人が髪が短くて男性に見えたという訳ね」

「うん」

「だってさ織斑君」

「へ？」

ベッドの下から一夏が出てきた。

「た、楯無」

「ふん！」

「悪かった！」

「え？」

「俺の勘違いでお前にひどい事言っただけ悪かった！」

「一夏……」

「ま、俺は少し悪かったただけ……」

「あ、バカ！」

「へー少し？少して言った？」

「ああ言っただけ、どうかしたか？」

「少しな訳がないでしょうが！」

「……！！！！」

「私にブスって言ったことが少し悪いって違うでしょ！」

全部あなたが悪いんでしょうが！」

「全部だと？」

「そうよ！全部よ！全部！あなたが浮気したからでしょうが！」

「んな訳あるか！俺は浮気なんかしてないし第一、お前が7割悪いんだろが！」

「七割ですって？あなたが全部悪いんでしょうが！」

「違うだろうが！」

「ちょ、ちよつと落ち着きなつて！」

「「あ？」」

「え、えつと」

「だったらここはIS学園だ。決闘で決めようじゃねえか！」

「は！良いわ。この際、どっちが学園最強か決めようじゃないの！」

「良いぜ！もし、お前が負けたら1週間メイド服で俺に服従してもらうぞ？」

「良いわよ！」

「ちょ、ちよつとたつちゃん！」

「でも、貴方が負けたら女子生徒の制服で、なおかつ、

ミニスカートで1週間登校して授業受けなさいよ」

「は！良いぜ」

「あゝあ、もう知らない」

二人の戦いが始まろうとしている。

第46話 壮絶な痴話喧嘩PART2 (後書き)

こんばんわ〜ケンです。

如何でしたか？

こういう痴話喧嘩には巻き込まれたくないですね(笑)
では、さよなら〜

第47話 壮絶な痴話喧嘩PART3

「という事なの」

薫子は別室で待機していた他のメンバーに先程の決闘の様子を伝えた。

「はーなんでこうなっちゃうの？」

「一夏の性格を考えれば無理はないが」

「そうだとしてもお姉ちゃんは一夏の決闘は危険」

簪の言うとおり両方のISは既に第二形態移行済み。セカンドシフト

それにつれて破壊力も上がる。これの意味するものは・・・

「小さな戦争みたいなものか」

「だね」

そのまま日は過ぎていった

決闘当日

第三アリーナには全ての専用機持ちと何故か教員が数人いた。

「何で先生方がここに？」

「実は織斑君と更識さんが戦うと言うので来ちゃいました」

「だとしても勤務中では？」

「終わらせてきた」

「織斑先生！」

「きょうか、ではなく先生もこちらに？」

「ああ、国家代表と国家代表クラスの腕を持つ奴らの戦いだ。

見て損はないだろう」

「えっと、さっきの国家代表って誰なんですか？」

「ああ、そう言えば知らなかったな。更識は学園唯一の国家代表だ」

「代表候補生ではなくてですか？」

「ああ、余り言いふらすなよ？」

「これはすごい事になりますわね」

「一夏、もし今謝るんだったら罰ゲームの期間を短くしてあげるけど、どうする？」

「それはこっちのセリフだ。もし今謝るんなら罰ゲームをなくすぜ」

「ふふふ、良い提案だけど結構よ」

「そうだな」

「「プライドにかけて!!」」

二人の壮絶な痴話げんかが始まった。

楯無は進化した能力で水を操り高圧水流を一夏に向け、放つがそれを一夏は翼で風を起こし水を辺りに弾き、雪羅のカノンモードを放つが楯無も負けじと避けまた高圧水流を放つ。この繰り返し。

「さっきから何で会長さんは水流しかしてないのかな？」

「恐らく何か策があるんだろう」

その事には一夏も気づいていた。

「何でさっきからあいつは他に攻撃してこないんだ」

「そろそろかしらね。レイ！」

「了解！」

楯無は巨大な水の塊を一夏に向けて投げた。

「ちっ！邪魔だ！」

一夏はカノンを拡散させ破壊した。

「いつまでこんな事してんだ！」

「ふふふ、忘れたの？」

「何をだ」

「クリアパッションの事よ？」

「しまっ！」

楯無が指を鳴らすと辺りが爆発に包まれた。

第「これを会長は狙ってたのか」

虚「辺りに水を撒き散らしその後

クリアパッションを行い

広範囲に爆発を起こして一気に殲滅」

シャル「多対一では凄い威力だね」

ラウラ「一対一でも十分な破壊力だな」

セシリア「流石に一夏さんでもあれを喰らったら」

千冬「まだだ」

「え？」

「あいつがあんな簡単にやられると思うか？」

千冬の言うとおり楯無もまだ警戒をしていた。

「はまだ、一夏はどこかにいるはず。けど、爆煙で何も見えない」
すると突然、楯無が吹き飛ばされた。

「きゃ！」

慌てて周囲に目をやると何もない所で水がはねたりしていた。

「まさか、アクセル？それに掠ったけど

さっきの攻撃は零落白夜での斬撃。

このままだと絶対に負ける。負けたらメイド服……

絶対に嫌だ！絶対に勝つ！」

楯無は辺りに水を放ち無差別に爆発させ始めた。

「こっすれば一夏もこっすちには攻撃はしにくくなる。

その間に10秒稼ぐ！」

その頃、一夏はというと楯無の上空で待機していた。

「はっぱり、ああなったか。人って面白いよな。

一度何も見えないものに攻撃されたらそこら辺に向かって

攻撃するんだよね」

一夏が雪羅のカノンモードを発動しギリギリまでエネルギーをチャージした。

「よし、チャージ完了。終わらせるか」

「終わりだ、楯無！」

「え？」

楯無が上を向いた瞬間に雪羅のカノンが包みこんだ。

「終わったか？」

「ま、まだよ」

「！！驚いたな、まだ立てるのか？」

「ギリギリ水で自分を包んだのよ。まあ、ほとんど防げなかったけどまだ、エネルギーは残ってる。貴方ももう無いんでしょ？」

「まあな、さっきの一撃にほとんど使ったからな。

後、一撃が限界かな」

「そう、あたしも一回が限界かな」

「・・・悪かったな」

「え？」

「あの時の事だよ。お前を傷つける発言して」

「う、うん」

「お前が抱き合ってたの見たとき、イライラしたんだよ。ほかの奴と抱き合ってから」

「あれは・・・」

「分かってる。でも、女だとしても誰かにお前が抱きしめられてるのを見るとイライラするんだ」

「それって嫉妬？」

「ああ」

「そ、そう」

楯無も直球でそう言われ顔を赤くした。

「わ、私も一夏の意見も聞かずに怒ってばっかでごめん」

「ああ、楯無、愛してる」

「私も愛してる、一夏」

シャ「よかった。これで一件落着かな？」

ラウ「ああ、これでひとまずは終わりだな」

全員が帰ろうとして立ち上がるうとした時・・・

「でも、罰ゲームの話は別！」

「・・・は？」

「罰ゲームだけは絶対に貴方にさせて映像にとる！」

「は！俺も一緒だ。お前をメイドにして映像とって一生取っというやる」

「これで終わらせる！！」

二人とも飛び上がり一夏は目の前に10枚の壁が、楯無は周りにレイを巻きつかせ飛び上がった。

「喰らえ！」

「終わりよ！」

二人の蹴りが同時にぶつかり大爆発が起こった。

千冬「何で二人はあなるんだ」

シャ「似た者夫婦だから」

ラウ「同感だ」

本「でも、どっちが勝ったんだろ」

爆煙が晴れそこに立っていたのは・・・

「お、おはようございます。い、一夏」

「違うだろ？ご・主・人・様だろ？はい、もう一回」

「ぐーお、おはようございます。ご、ご、ご主人様」

「よろしい」

勝ったのは一夏だった。

という事で1週間のメイド服従が決定した。

学園にも許可を取って授業もメイド服で受けるという生き地獄が与

えられた。

「うう。何で理事長も承認するかな。普通はダメでしょ」

「ほらほら、口を動かす暇があれば働け」

「ぐう。は、はいご主人様」

周りの視線はメイド姿の楯無に注がれている。

ただでさえファンがいる中でメイド姿である。

さつきから頻繁に写メを撮っている音が聞こえる。

「わーお、会長、かわいーいですよー」

「おお、本当だ。たっちゃん可愛いよ」

「まさか、会長がここまで似合うとは」

「うう、見ないでー」

「はっはっはっは！愉快、愉快」

「織斑君てああ見えてSなんだね」

「だね」

だが、何故楯無がこんな恥ずかしい事を1週間も出来ているのか。
その理由を見てみよう。

「はーやっ！と今日も終わった。いつもより長く感じたわ」

「でも、可愛かったぞ？」

「へ？」

可愛いという単語に思わず顔を赤くした。

「か、可愛い？」

「そう、可愛い。襲いたくなるほど可愛い」

そう言い一夏は楯無を押し倒した。

「ちょー！い、一夏ー！」

「楯無は俺だけの可愛いメイドさん」

「バカ・・・」

「天才だ」

そして今日も二人は快楽に溺れていく。

第47話 壮絶な痴話喧嘩PART3（後書き）

こんばんわ〜ケンです。

如何でしたか？

これで痴話喧嘩編は完結です。

感想もお待ちしております。

次回は千冬さん奮闘劇編です。

では、さよなら〜

第48話 千冬さん奮闘劇

「は」

今、溜息をついたのは織斑千冬。

かつて第一回モンドグロッソ世界大会で優勝し世界最強の称号であるブリュンヒルデを貰い世の女性の憧れとして君臨していたが二連覇を達成するかと思われた第二回大会で弟が誘拐され

救出しに行く代償として不戦敗となり

日本代表の座を降り、その後色々ありながらも

現在はIS学園の教師として納まっている。

しかし、彼女には一つ悩みがあった。

「一夏……」

弟の一夏との関係が二度の事件により冷めきっていた。

これは彼女が一夏との関係修復にはしる物語である。

「溜息をついちゃうと幸せが逃げますよ。織斑先生」

「ああ、山田君か」

彼女は山田麻耶。

一組の副担任であり元日本の代表候補生で、さらに

千冬も認める操作技術を持つ。

ちなみに上から読んでも下から読んでも、やまだまやである。

「もしかして一夏君の事ですか？」

「ああ、あれから何とか喋りかけてみたんだが一向に取りあってくれないんだ」

「そうですか」

「は」

あのブリュンヒルデと呼ばれていた者のため息はレアである。

「うーん、私も手伝いましょう！」

「本当か!？」

「ええ!」

「すまない」

「いえいえ、では作戦を考えましょう」

その日、徹夜で作戦を練っていた二人だった。

翌日、

作戦NO.1 <一緒に食事してみよう!>

「だが、私が誘ってもあいつは必ず拒否するどころか話すら聞いてくれないぞ」

「そうだと思い助っ人を呼びました」

「助っ人？」

「はい、それではどうぞ」

「失礼致します」

部屋に入ってきたのは一夏の恋人の楯無であった。ちなみにメイド期間は先日をもって終了していた。

「更識・・・」

「話は山田先生から聞いています。ぜひ、協力させて下さい!」
「本当か!」

「はい!私も一夏と織斑先生の関係を元通りにしたいんです!」
「更識・・・」

「ふふふ、これに協力したら一夏との関係を

認めてくれるに違いないわ。そうすれば一夏との結婚も・・・」

「まさか結婚を有利にしようとか思っていないだろうな?」

「!!!そ、そんな事は考えていませんよ」

私は唯、二人の関係を修理したいという気持ちだけです。

そんな疾しい事は思っていない!」

「ほゝ正直に言えば二人の関係を認めてやらんでもないぞ?」

「本当ですか!」

「考えていたのか」

「あ！そうだが今日、生徒会の大事な会議が・・・」

逃亡しようとする楯無の頭を千冬は片手で鷲掴みした。

「えう！」

「おゝそうか、そうか。そんなに協力したいか」

「え、えつと・・・」

「協力するよな？」

「・・・はい」

「そうか、そうか」

千冬の顔には満面の笑みがあつたが後ろには刀を持ち腕が何本もある悪魔がいたとか、いなかったとか。

昼休み

「一夏、お昼食べよ」

「ああ、そうだな」

昼休みになり楯無が一夏を食堂に誘った時点から作戦は始まった。作戦内容はこうである。

楯無が一夏を食事に誘い席に座らせる。

そこに千冬と麻耶が座席と一緒にする。

必ず一夏は席を変えようとするが楯無がそれを何が何でも座らせるというもの。

「一夏どこに座ろうか？」

「そうだな、あそこにするか」

「OK」

そして二人が座り席につき千冬達も座ろうとした時・・・

「ラウラ、一夏たちと食べようか？」

「うむ、そうだな」

ラウラとシャルロットが現れた！（ROG風に）

「やばい！あの二人をどうにかしないと！」

麻耶が二人を説得しようとした時、周りの空気が重くなった。

「！！！！！！！！」

麻耶が後ろを振り向くと千冬が物凄い形相で二人に殺気を飛ばしていた。

「な、何だろう？このあそこに座ればただでは済まさんぞ！みたいな空気は」

「ひ、ひとまず向こうに行こう。シャルロット」

「そ、そうだね」

敵は去っていった。

「はは……」

二人が去ると同時に千冬は満面の笑みを浮かべた。ちなみにその笑みを見たものはあまりの美しさに全員鼻血を出したとか。

「じゃ、じゃあ行きましょうか？」

「うむ！」

二人は目標に向かっていった。

しかし、一難去ってまた一難である。

「おりむー一緒に食べていい？」

学年一のTHE GOD OF天然の称号を持つ

布仏本音が現れた！（RPG風に）

楯無は瞬時に考えた。

「しまった！この子の存在を忘れていた！この子は殺気とか受け流すのが上手かったんだー！」

「どうしよう、どうしよう！これじゃあ、作戦が台無しじゃないのー！ー」

絶対絶命の楯無達、それに気付かずにご飯を食べている一夏。

楯無は祈った。

「誰でもいからこの子をどうにかしてー」

祈りは通じ救世主が現れた。

「本音ーどこなのー」

「なーにー、お姉ちゃん」

布仏虚である。

「グッジョブ！虚ちゃん！今度、何かおごつてあげるからね！」
楯無は心の中で拍手喝采していた。

それは麻耶たちも同じだった。
「布仏姉、成績を上げておいてやろう！」

「布仏さんは救世主です！」

「さあ、行きしょう！織斑先生」

「ああ！」

二人は救世主に感謝しながらテーブルに向かっていった。

「後、少し、少しで一夏と一緒に食べられる！」

「いち・・・」

泣きっ面には蜂である。

声をかけようとした時ラグナロクを告げる

ギヤラルホルンが鳴り響いた。

『織斑一夏君、織斑一夏君、至急理事長室まで来て下さい。

お届物があります』

「！！！！！！」

「おお、ついに来たか！」

「な、何が来たの？」

「懸賞で応募した仮面ライダーの全劇場版DVDセットだよ！

当たってよかった」

一夏は意気揚々と走って行った。

「そ、そんな」

「徹夜で考えた作戦が・・・」

楯無と千冬はがっくりと肩を落とした。

作戦NO.1 <一緒に食事してみよう！>失敗。

第48話 千冬さん奮闘劇（後書き）

おはようございますーケンです。

如何でしたか？

感想もお待ちしております。

それでは、さよならー

第49話 千冬さん奮闘劇2

作戦ナンバー2 一緒の部屋に入れよう作戦

「今度は大丈夫なのか？」

千冬が麻耶に疑いの目を向ける。

「だ、大丈夫です！それで、まずは

彼に連絡があると言って部屋に入ります」

「うむ」

「そして先輩が入った瞬間に外からドアが開かないように細工して一緒の部屋に入れて話し合おうという作戦です」

「ふむ、だがまず私は一夏の部屋にはいれるかどうか。

門前払いをくらうのが見え見えだが」

「大丈夫です！私に任せて下さい！」

「お、おう」

妙に自信のある顔で千冬を黙らせた。

そして次の日、

「あ、織斑君！」

「はい？何でしょうか？」

「実は今日、連絡があるので部屋に行っても良いかな？」

「え？別に今ここで話せば」

「あまりここでは言えないような話なんですよ」

麻耶が一夏に耳打ちした。

「分かりました。何時くらいに来ますか？」

「夕食後でいいかな？」

「分かりました」

「さあ、先輩！舞台は整いましたよ。

後は貴方の役目です！」

「あ、ああ。行ってくる」

「はい！」

千冬は一夏が好きだったお菓子をいくつか持って部屋までの道のりで何を話すか考えていた。

「何から話せばいい？やはり最初はこんばんわか？」

「いやそれとも元気か？何を言えばいい」

「ちょ、ちよつと先輩！通り過ぎてますよ！」

「す、すまない」

そして一夏の部屋の前に到着した。

「よ、よし」

気合いを入れドアをノックした。

「はい、今開けまゝす」

ドアを開けると一夏が見えた。

「い、一夏」

「何の用だ？」

「わ、私が連絡しにきた」

「山田先生の筈だろ」

「や、山田君は急用で私が代りにきた」

「ちっ！」

そのまま一夏は部屋に入ってしまった。ドアを開けたままにして

「は、入るぞ」

「で？何なんだ？用ってのは」

「よ、用はない」

「あ？まさか俺と話す口実を作る為だとか言わないよな？」

「そ、そうだ」

「お前と話すことはない。俺は出ていく」

「ま、待ってくれ！お前と話がしたいんだ！」

「黙れ！お前と一緒にいたら傷が痛むんだよ！」

「!!!!!!」

「それでもお前は話したいとでも言うのか!? ああ?」

「そ、それは……」

千冬は何も言えなかった。

傷を与えたのは千冬自身。

言う権利などある筈もない。

「俺は出ていく」

そのままドアを開けて出ていこうとしたら開かなかった。

「あれ? 何であかないんだ!」

実は事情を聞いた専用機持ちが山田先生の

許可のもとISを展開し外からドアを押し込んでいた。

「これで良いんだろうな!」

「ええ、良いわよ라우ラちゃん。二人の関係の為に!」

「ああ!」

「ドアは開かないようにしている」

「お前!」

「私はお前と話がしたいんだ。頼む、一夏。この通りだ」

「!!!!!!」

千冬が一夏に土下座をしていた。

「……………分かった」

「ほ、本当か!」

千冬は嬉しそうに顔を緩めた。

「そ、その何だ。お菓子もあるから食べるか?」

「置いとけよ。話は何なんだ」

「そ、その元気か?」

「ああ」

「からだとか壊していないか?」

「ああ」

「無茶とかしてないか?」

「・・・偶にしている」

「ま、まあ偶になら」

それからというものの千冬は今まで

貯めこんでいたものを一気に吐き出した。

そしてあの時の事に入った。

「お、お前の傷何だが」

「！！！！」

「そ、その・・・」

「まさか謝るとかしねえだろうな」

「・・・・・・・・」

「図星か。俺は何度謝られてもお前を許さねえぞ！

ずっと死ぬまで俺はお前を恨み続ける！」

「・・・分かつてる」

「あ？」

「分かっている。お前にずっと恨まれていても私は構わない。

お前が生きてくれるだけで私は満足だ。

お前に家族として見られていなくても」

「・・・・・・・・」

思わぬ攻撃によって一夏はいつもの調子を崩していた。

「ただこれだけは知っていてほしい」

「何だ？」

「私はいつでもお前を心配している。

お前のためならこの命も捨てる覚悟だ」

それを言い残し千冬は部屋から出ていった。

「くそっ！調子が狂う」

ふと千冬の持つてきたお菓子が目に入った。

あの事件が起こる前はよく千冬と二人で

楽しく食べていたものだ。

それを見ると心がざわつく。

「俺はいつたい何を望んでいるんだ・・・」

「あれで良かったんですか？」

「ああ、私の言いたい事は全て言った。あれで十分だ」
「そうですか」

「さあ、仕事に戻るとしよう」

「はい！」

この時のと千冬の顔は満足したような顔だったという。

徐々に変わっていく少年の心。

この先どうなるかは楽しみ。

第49話 千冬さん奮闘劇2（後書き）

おはようございます〜ケンです。

如何でしたか？

では、学校に行ってきま〜す

第50話 テスト

知られることのない会話

「集まったみたいだね、全員」

「うむ」

「じゃあ、始めようか」

「なぜ我々はここに集められたのだ？」

ここは専用機の人格が集まる空間。

表に出ていなくても存在する事は存在している。

そして先程質問したのはシュヴァルツェア・レーゲンの内なる人格

「皆さあ今の搭乗者に文句とかないの？」

「……」

「私は無いよ」お姉ちゃん大好き！

「私もです」

「ま、そう言うのもあるけど大体は文句があると認識するわ。

例えなくても本当にその人物は私達を使うに値する人物か

見極めないといけない」

「それは良いがどうやってするのだ？我々は

貴様らみたいに覚醒はしていないぞ」

赤髪の少女が質問した。

彼女は紅椿の内なる人格。

「ええ、知ってるわ。でも、忘れたの？」

私たちは1回だけ現実に行くことができる」

「……！！！！！！」

「ではその一回を使うのですか？」

「ええ、そしてどんな方法でも構わないから

搭乗者をテストする。そこで合格ならば

それでいいけどもし不合格ならば……わかってるわね？」

「……ああ」

「なら、やりましょうか」

「了解」

それぞれの搭乗者のテストのために
旅立っていった。

現実

「さていつもの通り動かすかね」

一夏がアリーナでISを展開しようとした時
待機形態が震え出した。

「ん？出たいのか？あいつら」

待機形態が震えると彼女たちが外に出たいという証拠だった。
それに従い鞘を抜くと二人が現れた。

「どうかしたのか？お前ら」

「一夏、貴方をテストするわ」

「何を言って・・・!!」

突然、白式が雪片を展開し襲いかかってきた。

「な、何すんだ!？」

「言っただしょ！あなたをテストするのよ！

私の搭乗者として相応しいかね！」

「はあ？何を」

「貴方の相手は彼女だけではありませんよ！」

「がふっ！」

一夏は白騎士に蹴り飛ばされ壁にまで蹴り飛ばされてしまった。

「がはっ！はあ、はあ」

「言っただしょ？これはテストだって」

「そうかよ。だったら・・・!!!」

「どうしたのですか？まさか私たちと
生身で戦うつもりですか？」

「武装が出ない？」

いつも通り翼と雪片を出そうとするがまったくでなかった。

「当たり前でしょ。私たちが貴方から離れてるんだから武装なんか出せるわけないでしょ！」

「がはっ！」

一夏はなすすべなく殴られ続けた。

「所詮、貴方たち人間は私たちが力を貸さなければ唯のサンドバックなのよ！」

「があっ！」

「白式さん、そろそろ」

「そうね。所詮は人間か。期待してたのに」

一夏は壁にもたれ動かなくなった。

へは。情けねえなあ。わかってた筈なのに。やっぱり俺は弱いなあ。

あいつらの言うとおり俺は何もできない」

「まだ、立つの？」

「ああ」

「何もないのにですか？」

「確かにお前らの言うとおり俺はお前たちに力を貸してもらえなきゃ唯のゴミだ」

「わかつて・・・」

「でもな、俺はこんな所で止まる訳にはいかないんだよ！」

「何故ですか？」

「あいつを守るためにだ！」

愛する者の為に止まる訳にはいかない。

「さあ来い！雪片！」

そう叫ぶと一夏の手には雪片式型が展開された。

「！！！！」

「さあ、始めようか。俺たちの戦いを！」

「おおおおおおお！」

「くっ！」

一夏の剣を防ぐが一夏のほうが強かった。

「おら！」

「きゃあ！」

「この！」

白騎士の蹴りを雪片で防ぎその足を持った。

「な！」

「せいやあああ！」

「きゃあああ」

白騎士は壁に投げつけられた。

「はあ、はあ、どうだ」

「はは！流石は一夏。でも・・・」

「私たちの力はこんなものではありません」

二人の雰囲気が変わった。

「行くよ！白騎士！」

「ええ！」

エボリューション

「進化！」

「な！」

二人をすさまじい量のエネルギーがつつんだ。

「何なんだよ！今度は！」

そこに現れたのは白式でも白騎士でもなく一人の女性だった。

「誰だお前？」

『私は白式であり白騎士でもある』

そう言い女性は剣を持った。

「どういう意味だ？」

『そんな事はどうでも良い』

「そうだな。来い！」

『武装を出せたからといって』

「な！消え」

『調子に乗るなよ。小童が』

いつのまにか女性は一夏の後ろにいて
言い終えた瞬間、一夏が赤く染まった。

「が・・あ」

始まったテスト。

全員はテストをクリア出来るのか？

第50話 テスト（後書き）

おはようございます。ケンです。

如何でしたか？

一応、主要メンバーは書こうかと思っています。
それでは、さよなら！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3426w/>

インフィニットストラトス 改変物語

2011年10月26日08時02分発行